

ドの著にひとしく若干の批難を蒙りしを思へば名家傳の編撰の容易ならざるは察すべきなり。

フルードが歴史編述の方法を見るに彼れは事實を精叙するを主とせしよりは寧ろ之れを論定するに力めし傾きあり隨うて頗る物議を醸したりしが所詮彼れをしてかゝる体裁を擇ばしめしは半ばは時勢の然らしめし所なり。夫れクロート、マコーレー及び晩年のカーライル等が當時の讀史界に歡迎せられし主なる理由は事々件々を精細詳細に叙説したる點にあり而してかゝる精細詳細なる叙説は多年間の精勵の結果なりとして稱歎せられき。然るにフルードの事を叙するや之れに比ぶれば遙に粗なり而も其の議論を行るや更に密なり是に於て輕斷なる讀史界は臆測すらく其の力むる所疑ふらくは少なかるべく其の推斷臆測に成る所恐らくは頗る多かるべしと。さもあれ其の實フルードは彼の三史家に比すれば自己の私見持論を以てして人物事件を褒貶することは却りて少なかりしなり。而も其の長所は敵の爲には缺點と思惟せられ中立者の爲には可不可なきものと見られたり。所謂長所とは何ぞや。熱心堅固なる愛國者にして能く自國の長所

を看取し之れを推奨せしこと其の一なり之れを難ずる者ある時は彼れは全力を傾けて之れに當り舌に筆に辯駁し反論せり。よく歴史の眞義を會得し事實の取捨概ね其の宜しきに叶ひしこと其の二なり。按ずるに古今史家多しと雖も單に事件を年代的に録して能事畢れりとなせる者多し隨うて其記叙するや典據は正確に考證は該博なるも記叙に生氣無く往々にして宛も事實の臚列に止るもの比々是れなり而してよく此の失を脱し活寫の妙を兼具せる者古くはシウシヂ、イズありヘロドタスありクラレンドンありギボンありカーライルあり而してフルードの如きは其の尤なる者の一人なり。さてまた第三の長所は其の文致の雅馴と明快となり。彼れが文章はマコーレー、キングレーキ若しくはラスキンの如き瑰麗を以て勝るものにあらずされば廣く世俗の喜ぶ所とはならずりしも氣品俗を超越し平淡一奇なきが如くにして而も衆妙の體を具へ貫くに一片靈活の氣を以てす十九世紀後半第一の妙文たるを失はずといふべし。

第十六章 テニソン

第十九世紀後半期の詩歌は之れを彼の純文學の極盛期たりしエリザベス女王朝

若しくはアン女王朝の詩歌に比するに種々の點に於て毫も遜色なきのみならず、觀念の深邃といふ點に於ては、尙かに兩者に超越するものあり。夫の辭句の華麗と結構の纖巧とを以て特色とせしアン女王朝の詩歌が其の觀念に於て見るべきもの乏しかりしは、更にいはず彼の情熱と創新とを以て勝れりしエリザベス朝の詩歌とても其の形而上の想念は概して卑しく若し其の詞句の上に見えたるを標準とすればスヘンサル一人を除くの外は、重に人情の浮沈を歌ひ人事の成敗を歌ふに止まり未だ天地人の究竟問題に觸れ人生最奥の消息に接し之れを咏歌することとは殆ど無かりき。蓋しかゝる問題は當時の社會のいまだ留意せざる所なりしなり。降りて十九世期に至れば時運の大變動は人々の思想を刷新し來り人皆外界の昌平に知足する能はずして反省的となり願慮的となり、競うて生存の大問題を講ずると共に過去將來を推度して處世の方針を定め安心立命の地を作らんと欲しき隨うて詩人はた此の風潮に化せられ其の多涙多感の性に驅られ率先して這般大疑問の解釋を與へんとせり。是に於て彼等は思ひを凝らし心を潜め哲學宗教の問題に亘りて其の抱懷を抒し其の漸く覺悟する所あるや更に其の聲

を高うして慰諭の福音を歌ひたり。彼等はもはや舊詩人の如く單に自然美を謳歌する者にもあらず又單に人情を咏ずる者にもあらずはた又單に自家一身の興感咄嗟の哀樂を吟哦する者にもあらず否仔細に人生の秘機を察し煩惱の由來を概念しさて後ち靜かに筆を採りて且つ批判し且つ同感しつゝ作せしなり。是れ其の片言隻句の深邃なる觀念を藏する所以なり。

新詩風の一先驅として又其の代表者の隨一として眞に錚々の名あるものをアルフレッド・テニソン卿となす。

アルフレッド・テニソンは一千八百九年八月リンコオンショアなる一村サマルビーに生れき。其の父博士サオルサ、クレイトン、テニソンは同村なる寺領の監理者にして其の母エリザベスは一牧師の女なりき。アルフレッドは第三子にして兄弟六人妹一人あり。アルフレッドが初めて其の作を公にせしは一千八百二十七年にして年十八歳の時なりき。こは其の兄チャールスどもに作せしを集めたるにて題して『Poems by Two Brothers』(『兄弟詩集』といへり)實は長兄フレデリックも此の著に與りきといふ。卷中なる諸作は總べて十五歳より十八歳までの作なる由自叙に見えたり。

り。是れより先きアルフレッドは七歳にしてロースの一學校グラムマル、スクールに入りしが居ると數年、故ありて家に歸り兄チャールスと共に専ら父の薫陶を受けて人と爲れり。『兄弟詩集』は此の家庭教育間の作なり。かくて詩集出版の翌年、或はいふ翌々年の初めと兄弟相携へてケムブリッジ大學の一枚トリニチー、コレヂに入りしが後いくばくもなくアルフレッドは懸賞詩篇に當選して名譽の金牌を得たり。"Imbucos"と云ふ詩は此の時の作なり。彼の歴史家ヘンリー、ハラムが子アール、ヘンリーと相知りしも亦た此の際なり。後ちにアルフレッドが著はし、有名なる傑作 "In Memoriam" (『記念の爲めに』) は此の心友を追悼して作せしものなり。其の他在學中の交遊は後年に至りてテニソンと共に彼の「ストルリング社」に入りて文學政治宗教等に錚々たる名を博せし人々なり。

上にいへる懸賞の詩「テムボクシー」は一千八百二十九年中に上梓せられ同年七月の『アセニウム』雜誌は好意を以て之れを迎へ其の才藻をたゞへたり。按ふにテニソンが特質の影は已に此の壯時の作に見えたり是れいと稀れなる現象なり。彼のバイロンの如きは近世稀れに見る所の逸才にして其の文致といひ其の感想と

いひ奇峭矯勁時流に卓然たる所のものありされども其の初めて作りし作 "Lions of Idleness" (『閑日月』) には其の特色殆んど見えず尋常の英才と見られしのみ現してや後年のバイロンの影は之れを認むるに由なかりき。(テニソンが此の時の作尙一篇あり "The Lover's Tale" と云ふ多く「テムボクシー」に譲らざる作なれど意ありて遙かの後年に出版せられき)

一千八百三十年更に詩集を出版せり題して "Poems, chiefly Lyrical, by Alfred Tennyson" と云ふ『抒情詩を主とせるアルフレッド、テニソンが詩集』の義なり。此集中に載せたるものの中 "Ode to Memory" (『記憶に寄する長歌』) "The Poet" (『詩人』) "The Poet's Mind" (『詩人の心』) "The Deserted House" (『廢屋』) 及び "The Sleeping Beauty" (『睡美人』) の如きは作者が前途のいよ／＼多望なるを示し且つ其の傑特なる真相をも現せり。

(此の中『睡美人』は何故にや後の詩集には省かれたり)。此の集に對する世間の評判、就中諸批評雜誌の月旦は褒貶相半したり恐らくは非難のかた多かりしならん。かくて同三十二年(作者二十三歳の時)に第二の詩集世に出でたり題して "Poems by Alfred Tennyson" (『アルフレッド、テニソン詩集』) と云ふ。此の集に見えたるうち最

も清新と思はるゝは “The Lady of Shalott” (“シャロットの妖姫”) “The Miller’s Daughter” (“磨者の女”) “The Palace of Art” (“美術殿”) “The Lotus Eaters” (“無益の島人”) “A Dream of Fair Woman” (“衆美人の夢”)等、何れも皆情理高遠詞致典麗、之れを前年の諸作に比するに風情風姿兩つながら自然たるものあり。蓋しテニソンが詩人としての本領は此の時に至りて漸く其の圓境に近づけりしなり。之れより前の作は概して筆ならしの趣きあり又詞調の琢磨と修鍊とに過半、其の力を奪はれたる觀あり。予は三十二年を以てテニソンが詞壇の卒業期と名づけんとす即ち彼れが本色の確定せし時なり。さもあれ當時の諸評家は之れを遇すると必しも厚からざりき。例へばジョン・ロッシュ・ハートの如きは戲謔的筆法もて『毎週評論』に之れを評し「クォータルリー評論」の如きも例のローマン派のよろこばざる保守的感情より之れを貶し「フレッジウッド雑誌」の如きもテニソンの作には所謂コンンチー派の風調ありとて難じたり。但しコンンチー派の風調のテニソンに皆無なることは今は何人も認むる所なり。此のころの評にてはジョン・ステュアルト・ミルの評のみ獨り允當を得たりき(一千八百三十五年七月發刊『エヌスト・ミンスタル』所載)。大才は由來世に認めら

るゝこと遅きならひなりミルトンが『失樂園』すら僅々十二ポンドに購はれしを思へばミル一人の賛辭を得しだに寧ろテニソンの多とすべき所なるべし。爾後十年間は折々雑誌などに寄稿するのみにて久しく長篇を作せしことなく倫敦よりハイ、ビーチ其の他二三處に流寓し窮迫の日月を送りしが一千八百四十二年(作者三十三歳の時)に至りて更に新版の詩集を出だしぬこは已發兩集の粹を抜き更らに若干の新作を加へたるものなり。新作中の傑作は下の數篇ならんか。曰はく “Ulysses” 曰はく “Love and Duty” (“戀と義”) 曰はく “The Talking Oak” (“解語の樺樹”) 曰はく “Godiva.” 曰はく “The Two Voices” (“二聲”) 曰はく “The Vision of Sin” (“罪業の夢”)。就中『二聲』と『罪業の夢』とは當年のテニソンを表現するものとして最も留意すべき價値あり殊に前者の如きは十九世紀のハムレット皇子が獨白と稱せられたり。此の新詩集出で、テニソンが詩名は始めて定まりぬ英國の讀書社會は始めてテニソンの大詩人たるを知りぬ。此の集の如何にもてはやされしかは出版の翌年に第二版出で又其の翌々年に第三版出で又其の翌年に第四版出で又其の翌々年に第五版のいでしを見ても知るべし。さて同四十七年に “The Princess; A Medley”

と題したる長篇の物語歌成り其の翌年には其の再版出で同五十年に至りては「Memorian」梓に上りぬ。此の作は同じ年のうちに版を重ねること都合三たびに及びきといふ。

一千八百五十年六月ヘンリー、セルウッドの女エミリーを娶りて妻とす時に四十一歳なりき。是れより先同年四月時の桂冠詩宗桂冠詩宗ナルゾナルス卒して其の後を襲ぐ者なし。テニンソンとエリザベス、ブラウニングとは其の候補者として推されたりしが多少の動搖の後ち輿論はテニンソンに桂冠を捧げき。此の決定に與りて最も力ありしものは其の近作「In Memoriam」の好評なりきとぞ。

因に配す。桂冠詩宗は或は譯して勅選詩宗勅選詩宗ともいふ其の由来は詳かならず。近世の所謂桂冠詩宗の職分職分即ち毎年國王の誕辰を賀する詩と新年の祝賀の詞とを作ることとを務めする職分は凡そ一百年以前よりの事なるべけれど是れより先も幾百年宮廷詩宗といふ職名の詩人ありて常に宮廷に出入し王家より祿を受けたり。宮廷詩人といふ名はヘンリー三世王の朝に見え桂冠詩宗の名を賜はりしは彼の詩祖チローサルが嚆矢なり。さて之れを桂冠詩宗といふ由来を尋ねるにもさ大學にて學生が文法學の學位を得るや文法學の中には修辭學作詩學をも含めりしが故に卒業の褒証として月桂冠の木葉冠を受くると同時に Poet Laureatus といふ名を得たりき月桂冠を頂く詩人といふ程の義なり。さて宮廷に入りて王家の用務に従事せし者は大概大學の卒業生なりしが故に月桂冠詩人 (Poet Laureate) の名はいつか宮廷詩人と同義となりやがて宮廷詩宗をば桂冠詩宗と呼ぶに至りしならん。ベルナルド、アンドリュウ先づこの職に任ぜられアヨン、ケー是れに繼ぎアヨン、スケルトン其の次に任ぜられエドモンド、スパンサル、サミュエル、ダニエル、ペン、アヨソン、非リアム、デーヴァント、アヨンド、ドライテン、並びにトマス、シヤドエル等相ついで任ぜられかくてチーハム、デイト、ニコラス、ローよりユーステン、シッパル、ホワイトヘッド、アルトン、バイの五人を経て一千八百十三年ロバルト、ソウシー此の職に任ぜられナルゾナルス之れに繼ぎさてテニンソンにうつりしなり。桂冠詩宗、勅選詩宗などいへば無上の榮職のやうなれど必しも然らず時としては一層の榮譽ある奴隸たるに過ぎず少しく氣概ある者は或は之れを辭し或は之れを厭ひしなり。但し近世ナルゾナルスに至りて大に其の位置を高め更にテニンソンに至りて一層の價を加へしかば今や桂冠詩宗は名譽の閑職となりぬ。この好例によりて未來の桂冠詩宗は或は第一流詩人と同義に用ひらるゝに至らんか。

さて翌年三月パッキンガム宮に於て女皇陛下に謁し同月更らに其の詩集の第七版を公にしぬ。「To the Queen」と題したる小品は此の版の巻首に添へしものにてギクトリア陛下に奉りしものなり。これより後ちの諸作は一々紹介するの進なしこゝには其の尤なるものゝ題名のみを掲ぐべし。「Maud」といふ長篇は一千八百

五十五年になり同五十九年には“*Idylls of the King*”の第一出であり此の内は“*Enid*” “*Vivien*” “*Elaine*”及び“*Gwinevere*”の四篇を含む世間の歡迎はハイロン以後無比と稱せらる。同六十四年には“*Aylmer's Field*” “*Sea Dreams*” “*The Grandmother*” “*The Northern Farmer*”の四篇と共に“*Enoch Arden*”と云ふ物語歌出で又同六十九年には“*Idylls*”の次篇出でき。此度は題して“*The Holy Grail and Other Poems*”と云ふ。此の集の中には“*The Holy Grail*” “*The Coming of Arthur*” “*Pelleas and Etarre*”及び“*The Passing of Arthur*”の諸篇を含めり。さて又同七十一年には『當代評論』の紙上に“*The Last Tournament*”と云ふ翌年には“*Gareth and Lynette*” 同七十五年には“*Queen Mary*” (劇の詩) 同七十五年には“*Harold*” (同上) 同八十年には“*Ballads and Other Poems*”と云ふなり。

一千八百九十二年十月五日齡八十三歳にて歿りぬ。遺骸は彼のシェーンスピア、アチソン以下歴代の詩人英雄の墳墓あるエストミンスタル、アッペーの墓地に葬られ前古稀有の莊嚴華麗なる碑は此の大詩人の爲めに建てられたり。

エミール・シャープ曰はく世に大詩人の初期の作を研究するばかり趣味あるはなしさ

るは其の作の文學として價值あるが爲めならで件の詩人の作として思想進歩の跡を討ね得べければなりと。此の心を以てテニソンが初期の作を見之れを他の詩人の作と比較する時は趣味一層深きものあり。余は疊きにキーツを叙してセツペリーがテニソンの祖をキーツなりといへるを掲げし因みによりこゝに又同じ人が二詩人を比照せる言を抄せん。曰はく

「人或は英國詩風の傳統を論じてテニソンを以てキーツに相ぐものみなす。思ふに不當ならす。テニソンが一千八百三十年及び同三十二年に出だせる詩集中其の圓熟なる作は皆てキーツが新哲兩派の風調を折衷せる清新の踏音あると共に時に此の折衷の不熟の操音を有せしこと彼のキーツが“*Greian Urn*”及び“*La Belle Dame sans Merci*”に見ゆるものと正さに相同す。然れども正當に兩者を比較すれば(物の比較ばかり誤解せられ易きはなけれど)其の相異或は顯然たるものあり而も兩者もさより大詩人たるに於て擇ぶ所なきは首を俟たず。キーツの短命なりしや其の作未だ圓熟に至らずして止みきと雖も彼れをして若しテニソンが例の十年間に爲しとが如く其の作を自ら批判してゐる、修鍊琢磨する餘裕ありしめば其の作必しもテニソンに下らざりしならん。げにもキーツが初期の作の幾分は當時の批評家も既に雖せしが如く一氣にして千百立ちこころに成れるが爲め概ね蕪辭巴調に止まり好尚も觀念も粗雑淺薄なりしことテニソンが初期の作よりも甚しかりしならん而も感情の精緻といふ一點より

之れを見ればテニソンが作中一としてキーツが傑作に及ぶものなきにあらざる。要するに兩者の類似は争ふべからず、彼れ等は共に繪畫的表現と音樂的表現とを併用する妙技を有し、彼等は共によく人道を解し、普通の事物にも互りて靜穩に平直に且つ健全なる觀察を有せり、而して此の點に於ては彼の實際界を離れ、現世間を無視せりしシエリーに勝りしこそ一等なり。

と。キーツを激賞するは近年の傾向なれば、センツベリーが言も尙多少の斟酌を要すべきなれど、兎に角にテニソンが初期の作のキーツの比して敢て卓然たる能はざると其の詩風に多少の類似あるとは争ふべからざる事實なれば、此の點より見てテニソンの系脈をキーツに求むるは必ずしも不當ならじ。されど予はテニソンがテニソンとなりて生れしはキーツとの關係には因らずして寧ろ時勢、時潮の必然の氣に因りしものと見做さんと欲す。一言すればテニソンはキーツが子にはあらず、否キーツと同腹の弟なり。

而してテニソンの好尙はキーツに比すれば少時より一段多方面にして受容の量將た一層大に且つ序を逐うて進前するの歩武も亦たキーツよりは確實なりき否、な實に此の點はテニソンが衆詩人に卓出する一特徴たり。彼れは詩人の天職と

自己の天才とを認識し、古人の名作を讀むも曾て之れが爲に逡巡若しくは眩惑することなく、寧ろ其の短所及び不熟の個處を發見して自ら深く警めたりき。之れに加ふるに彼れは詩人として夥多の長所を有せしかば、其初期の作中にては“Claribel” “Mariana” “Recollections of the Arabian Nights” “Ode to Memory” “Dirge” “Dying Swan” “Ortana” の如きは屢、誦して尙其の妙味の津々たるを覺ゆ。而して第二期の作に至れば、情趣風姿共に更に進みたり。さて其の卒業期の作に至りては、思想の高遠、想像の美妙、辭句の精練、昔前作の比にあらず。此期の作の繪畫的にして音樂的なるキーツ若しくはシエリーのに譲らず。按ふに繪畫的にして音樂的なることは詩技の上より見て極致とする所、何れの時の詩人も之れに到らんと欲めしは明かなる事實なり。彼等の聰明なるものは能ふべくば、先づ繪畫(色彩の美)を情感と化し、此の情感を音樂(聲調の美)と化し、以て詩歌に現さんと試みにきされど、能く其の目的を達し得し者を數ふれば、英國古今の詩人中たゞ四五指を屈すれば足りぬべし。成熟期のテニソンは實に其の随一人たり。加之彼れは其の先進が繁詞を以て歌ひしもの(例へばナルゾオルスが『エキスカルシヨン』の如き)を醇化して短篇と

なし無限の情致と幾多の變化とを盡し其の言々句々をして讀者の心脾に沁せしむ。この點に於て彼れに匹敵すべきものは古今其の人多からざらむ。スペンサーが『宮殿』及び『夢』の二篇はやゝ這般の趣致ありキーツ、シェリー、コールリッジ、ブレイヤ等も時に此の技を試みたりきされどテニソンに匹敵すべくもあらず。且つや“Onone”の律調壯大なるは彼の山海の如きミルトンが無韻律語をも凌ぎ“*The Lotus-Eaters*”の荒唐にして雅逸なるは彼の夢裡の天樂に比すべきスペンサルが『神女王』にも譲らず。

テニソンは時代の精神を歌ふに於て二様の方面を取りき自然界を主觀的に歌ふことゝ十九世紀の精神に立脚して過去の事蹟を歌ふことゝ是れなり。前者の可憐なる情致はナルヅナルスより得たるなれど尙彼れの如く乾燥低調ならず後者の華麗と濃厚とはスコット、バイロンより來れるなれど尙彼れの如く淺露粗野の失なし。蓋し彼の三詩人は嚴密にいへば其の思想も感情も到底テニソンの如く十九世紀的なる能はざりしなり。

エドワード、フィッツゼラルド并てテニソンを論じ一千八百四十二年の作を以て其

の全盛期となし其以後の作を老衰期の作となせり。是れ恐らくは其の觀察の單に外形に止まりしよりの誤謬にはあらざるか。げにも一千八百四十二年の頃はテニソンが才華の天々としてほひ出でたりし時なるべし彼れが青陽の作は收めて當時の集にあり外形上の進歩は或はこゝに盡きたらんされど眞の老成の風趣は秋冬の景物に比すべき晩年の作中に此を求むべけれ。さすれば。フィッツゼラルドが老衰期の名は宜しく老成期と改むべきにあらざるか。

此の老成期の初に出でし作二篇あり“*The Princess*”及び“*In Memoriam*”是れなり。是れ等の作に至れば單に彼の詩體と感情との調和若しくは繪畫的兼音樂的などいふ點に妙あるに止まらず其の思想の根柢に此等の技巧以外に從容自若たる覺悟あるものゝ如し、二篇のうち前者はいさゝか滑稽の趣味を加へたる長篇の物語歌にして作者が苦心の作なり其の滑稽の如きは成功とはいふべからざれど兎に角に傑作の一たるを失はず、後者は濃厚誠實なる著者が情誼のあらはれたると共によく當時の或思想を歌ひ得たる作なり。或思想とは彼の半懷疑的宗教思想にしてテニソンは所謂自由的保守主義（イデオロギカル・コンセルヴァティズム）の人否な寧ろ保守自由の間に彷徨せし人

なりしなり。『インメモリアム』に於ては彼れは *iambic dimeter* といふ律格を用ひたり此の躰は庸常の作家に用ひらるれば單調讀むに堪へざるを常とするものなれどテニソンは此の長篇によく之れを用ひて一句のたるみなく卷を終るまで厭倦を起さしむることなし以て其の韻師家としても當時第一流なりしを證す。さてこの期の第三の作を“Maud”とす。辭句の詩的といふ點に於ては彼れが一生の作中第一に位するものにして *Cold and clear-cut face*、——と歌ひ起せる第三節の如き *I have led her home, my old friend* を以て始めたる第十三節の如き *Come into the garden, Maud,* ——の第二十二節の如き、さては第二十六節なる *O that I were possible* ——のあたりの詞調は彼の絢爛目を奪ふ其少壯の作にすらも見るを得ざるもの(否ホーンバにも三舎を避けざるべからざるもの)なり。さもわれかゝる辭句上の巧妙を離れ詩として全躰に亘りて之れを見れば情理風韻兩つながら前の二篇の下にあるのみならず彼の“*Spasmodic School*”(際物派)と競争して筆を際物に染め爲めに神聖なる詩人の風格を損ぜんとするに至りたり。或は傳ふ彼れ此の篇のやゝ識者間に不評なりしを介意し其の親友にして當時名望ありし某批評家に向ひ其の故を訊うて

曰はく「君が“Maud”を俗受けの作といへるは何の理ぞ」と。答へて曰はく「そは覺えなきことなり」。テニソン默思すると少時にして又曰はく「否な君はまか思はれしならん」と。此の批評家は決して『モード』を俗受けの作とはせざりしものなり而してテニソンの此の問を重ねし中心は察するに餘りあるにあらずや。

さて彼れはこれより愈々精進して更に彼の“*Idylls of the King*”をものしき。此篇に於てはよく前者の弊を脱し部分の妙味と共に全躰の興趣を存し辭句はた例によりて精鍊、識者をも悦ばしむるに足り俗衆をも悦ばしむるに足る。無韻律語の作中ミルトン以來稀に見る所今日に至る迄も前には只トムソンが作“*Seasons*”の稍同種の面影を傳へ得たるあるのみ。さて遙に晩年の作(例へば“*Gareth and Lynette*”の如き)に至りては流石に“*The Princess*”時代の英氣を失ひたる觀あり又 *Pelleas and Ettrae*、“*Balin and Ballan*”等に於ては後進作家の詩風を模したる跡あるに至りしかど尙鞍に跨りて顧眄する餘勇は“*The Holy Grail*”及び“*The Last Tournament*”にあらはれたり。』テニソンの多才なるや其の作せし所一様ならず山野の風物に關係せる物語歌あれば幽玄深遠なる哲理に關係せる冥想の作あり古代の詩歌より翻譯せる軍歌も

あれば寫景狀物を主としたる作もあり。又尋常の抒情歌あり又純然たる劇の詩あり。就中狀寫諷詠の趣致はゆたかに當世紀を代表するに足れり。但し其の劇の詩は寧ろ其の短所を示せるものなり。第一科介の妙乏しく、第二篇中の人物に彼のシェークスピアに見るが如き宛然たる入神の妙相無し。所詮テニソンは抒情狀景の巨擘、兼ねて物語歌の妙手なり。

按ふに英國の詞壇古來名家に富めりと雖も自ら詩人の天職を意識して其の天職の神聖なるを信じ十年一日の如く忠實に熱心に慎嚴に眞摯に勇猛精進片時も其の理想を忘れざりしものは果して幾人かありし。其の理想テニソンの如く其の精勵テニソンの如く其妙技テニソンの如くして初めて十九世紀の詩人たるを得べし。十九世紀の英國がテニソンを好遇せしは至當の禮儀なりと評すべき也。』終りに尙一言すべきは彼れと時勢との關係なり。テニソンの如きはもとより未だ時世を先導せし作家とはいひ難ければ之れを豫言者と稱せんは溢美なれど毎に當代を代表せりといふ稱は何人も否拒せざる所ならん。蓋し彼れが作には毎に宗教上、道徳上、社會上すべて此等の問題に關する當時の進歩せる輿論の反映れ

り。勿論嚴密にいふ時は彼れが歌へる所は必ずしも當年最勝の思想にはあらず最も創新なる思索最も進歩せる想念にはあらず而も其の作に見ゆる所は當時の真相を反射せるもの、最も聰明なる英國人全躰の最近年に於ける修練と經驗との結果尙も當代の聰明者が自家の影なりとして首肯せざるを得ざりし者なり。是れ豈時勢を代表せる者にあらずらんや。或は晩年のテニソンを貶して曰はく彼れはもはや英人の理想を歌ふ能はざりきと。然り彼れは豫言者にあらず詩歌を以て一世を導く能はざりしは明かなり而も彼れは決して當時の大問題を歌ふとを忘れし者にあらずたゞ忘るべきを忘れ歌ふべからざるものを歌はざりしのみ。解せざりしにあらず歌ふ能はざりしにあらず。又たとへ晩年のテニソンが時勢に後れしを實とするもそれは功成り名遂げて簞を易へんとせし頃のテニソン也其の壯時のテニソンは正に新しき思想の謳歌者にして時には新理想の鼓吹者なりき。例へば一千八百四十二年に出だし、『ロクスレー、ホール』を見よ、彼れは人物の口を借りて自家の感慨を抒らし更らに轉じて將來の期望を歌へり是れ明かに時

の改進黨の希望なりき。尙後年に及び『六十年後のロクスレー、ホール』を著はして

時の保守派が抱ける思想と疑惑とを歌へるが如し。或は又『Princess』を見よこれ
 はた當時の新聞題たる女權論の旨に密接せるものなり。若しくは『美術殿』の旨を
 味へ是れはた當代の一弊たりし出世間熱の誤謬を諷刺し暗に眞善美の相關を説
 き世間と出世間との關係を歌へるものなり。『美術殿』の美術に於けるは St. Simeon
 style の宗教上の僻見に於けるが如し後者は主我的枯禪主義の弊を難じ世間的
 義務の重んずべきを説けり。何れもテニソンが理想の影にしてまた當代思想の
 影なり。要するにテニソンが終生の理想は天法を畏敬するに在り精進を推奨す
 るにあり秩序を亂さずして進歩するにあり義理を重んじつゝも人情を重んじ平
 等を愛しつゝも差別を愛し出世間に遊びつゝも現世間に處するにあり。(是れカ
 ーライルがゲーテに於て其の實例を見たるを喜びしものと相近し。)而して其の
 平生の行實も頗るよく此の理想に副へりしに似たり。テニソンの如きは思ふに
 詩人中の君子人たるに近かるべし。

第十七章 ブラウニング及びブラウニング夫人

テニソンと世を同うして更に清新なる感情更に深遠なる思想を謳歌し遂にテニ
 ソンを凌ぐの名あるものをロバートブラウニングとす。一千八百十二年五月生
 る一市人の子なり。其の家資産饒かなりしに如何なる故ありてか小學にも中學
 にも入りしとなく幼きより家庭にてのみ教育せられき。始めて其の詩篇を公に
 せしは一千八百三十三年にて齡二十二歳の時なりき。"Pauline"と題したる篇是
 れなり即ち其の二十歳の時の作なり。ブラウニングが作に終始附随せし一種の
 缺點は既に此の作に表はれたり而して其の傑特の詩才は未だ之れを認むるに由
 なかりき。此の作は作家自らも重きを置かざりきと見えて後年に出版せし自撰
 の詩集には悉く此の初作を除きたり。此の篇に顯れたる特質は凡そ三あり第一
 詩句の悉く劇白の躰なること第二長き疊音ソングの語の目立ちて多きこと第三彼れが
 作の特色と稱せらるる『晦澁』オブスクアの甚しきこと是れなり。此の中第一と第二とは別に
 いふべきとなし但だ何が故にかゝる奇異なる劇詩躰を用ひしか審かならざるの
 み。さて所謂『晦澁』の失は寧ろ一氣呵成を要せし結果なるが如し即ち情の向ふ
 所やがて之れを筆に傳へ殆ど辭句の選擇をなさず偏に氣に任せて作せしが爲な
 らんか。さもあれ此の『ポライオン』は推稱すべき作にてはあらざりしなり。後ち

二年を経て“Paracelsus”といふを著しぬこは前作に勝る數等なりこれも同じく劇白牀の詩なりしが對問の呼吸間熟し到底上場の見込はなけれど傾瀉するが如き急調と疾驅するが如き一氣呵成とは其の無韻律語の特質を成し難雜險晦の瑕疵あるに拘らず隱然一種の靈氣を具へおぼろげながらも作者が特得の美感を傳へたり。其の主人公バラセルサス及び其の友フェクス及びマイケルは作者が得意の心の解剖を適用して物せるもの中にも伊太利詩人アプリール(Aprile)の如きは彼の『ファウスト』のオイフリオン(Euphorien)の面影ありと稱せらる。要するに此の作は詞致に尙調はざる處ありて後の作に見るが如き莊嚴の妙はなけれど抒情詩としては獨創の一體にして眞に新詩人の初作たるに愧ぢざるものなり。而して世間の之れを遇するや冷々たりしがブラウニングは敢て其の詩牀を改めんとせず又二年を経て其の友某の爲めに“Shafford”といふ正劇を作せり。此の作妙處乏しきにあらねど如何せん其の思想例の如く時世に超越し其の表白はた含糊なりしが爲めに之れを讀み物とせずして演ずるものとするときは興味索然たらざるを得ざりき。後ち又三年にして“Sordello”といふ劇を作しぬ此の作取りわけ

て異色を帯びたりしかば實に俗衆に悦ばれざりしのみならず平生ブラウニングを愛讀する輩すら此の作者遂に其の作詩の方針を誤らんとするに非ずやと危みにき。かゝる疑惑は一千八百四十一年より同四十六年の間にいでし“Bells and Pomegranates”と總題せる詩集出づるに及びて跡を絶てり。此の集中の劇詩にも例の缺點は伴へりしが奇異なる“Pippa Passes”を除くの外は必ずしも讀者をして茫然自失せしむる底の異質あるに非ず而して其の抒情的短篇の或作に至りては優かに其の作者の單に語るに堪ふるのみにあらで歌ふにも秀でたる由を證したり。按ふに一千八百四十六年は彼れがはじめて大詩人の列に入りし年なり。同年エリザベス、パーレット嬢を娶りて妻とすテニソンと桂冠詩宗の選を争ひし令名の女詩人ブラウニング夫人といふは是れなり。結婚後ブラウニングは伊太利に遊び一時フロレンスに居を卜し妻の逝りしまではかしこに在りき此の間にもせし作は僅かに二篇のみ“Christmas Eve and Easter Day”(一千八百五十年出版)及び“Men and Women”(同五十五年出版)是れなり。之れを既刊の二詩集即ち“Bells and Pomegranates”及び“Dramatis Personae”(同六十四年ロンドンにて出版)と併べ稱してブラウ

ニングが壯年期の傑篇を蒐めたるものとなす。こゝに至りてブラウニングの名聲漸く定り世間多數の讀者はた彼が歌に一種深遠の意義あるを認むるに至りぬ。かく一千八百六十九年無慮二万餘句の長篇を著しぬ題して『The Ring and the Book』といへり這は四巻に分ちて出版せられ大に世に歡迎せられき。是れ或はたゞ一てブラウニングが傑作となせる異昧の叙事詩なり。然れどもブラウニングは一時の虚譽に眩惑して濫作するの愚なるを覺り退いて筆を作詩に絶つこと十有四年此の間ひたすら精神を修養し或は人生の大問題を攻究し或は希臘の古詩歌を玩味しさて一千八百七十一年に至り再び詩壇にあらはれたり胸中成竹ありて詞藻また豊かなり最近英國思想の謳歌者としてブラウニングが名を不朽に傳へし作は蓋し是れより後に出でたり今其の名あるものを下に掲ぐ

“Balauston's Adventure” (一八七二) “Prince Hohenstiel-Schwangan” (同) “Fifine at the Fair” (一八七二) “Red Cotte Nightcap Country” (一八七三) “Aristophanes” “Apology” (一八七六) “La Saiziaz” (同) “Dramatic Idyls” 二卷 (一八七九—八〇) “Jocoseria” (一八八三) “Fersblah's Fancies” (一八八四)

後ち又 Parleyings with certain People of Importance” (一八八七) 及び “Asolando” (一八八九) の二篇を作し同八十九年伊太利にて没しき齡七十八。

晩年の作中『アンランド』は二十五年にものせし “Dramatis Personae” 以來の名作と稱せらる。總じてこの期の作には異様の無韻律語を用ひ普通の話説昧と劇詩の獨白昧とを相交へたり。この獨白昧はブラウニングが終生棄てざりし筆致なり。

ブラウニングが作の是非は今尙ほ全く確定するに至らず況んや當年に於てをや。其の中年以後二三の聰明なる批評家の彼れが作の美を看取せりしが多數の讀者は蕪雜粗笨、險晦含糊等の非難を挿みて一概に彼れを斥けたりき。或は附加して褒稱せし輩あるも只漠然と其の清新の致を認めし耳何れの個處に眞個の妙あるかを明知せざりしが故に世間多數の嘲罵非難(就中大學出身者の劇しき攻擧)に對しては作者を回護するの辭を知らざりしなり。所詮當時のブラウニング黨が勢力はいと微弱にして啻に世間に向ひて十分にブラウニングを推舉する能はざりしのみならず自家はた其の妙を會得する能はざりしなり。然れども彼れが作も

退くに山で十年二十年を經過するにつれて世間の非難もまた舊の如く頑ならず又其の景仰者も漸く其の所信を固め文壇の一隅に所謂ブラウニング社カレッジを起し一千八百八十一年には公然ブラウニング研究会といふを組織し入會者には其の趣意書を交附して賛成の意を表せしめ且つブラウニングが特殊の辭句譬喩等を解するが爲めに『ブラウニング辭典』を編するに至りぬ。崇拜者の運動是の如くなりしかばブラウニングを撥斥する輩更に起ちて反對運動を試みこゝに再び批評海の一大波瀾を捲き起しき。さもあれ今此種愛憎を脱し虚心にして彼れが作を觀るにブラウニングは圓満の詩人とは稱すべからざるも偉大の詩人たること争ふべからず其の缺點は其の詩の形にありて其の内容に存せざればなり。

論者曰はく新詩人中の新詩人たりしブラウニングの如き作家には多少の破格も許さるべからず時尙に先だてる思想は時尙の言語のみをもて表しがなければなり。其の晦澁を以て難ぜらるゝも止むを得んや。カーライルが散文も嘗て晦澁の穢を得たり散文既に然り況んやカーライルよりも更に幾歩をか進めたる新思想新感情を新詩の詩歌に表はすに於てをやと。是れ今のブラウニング黨の所

論の要たり。然るに他の論者は曰はく所謂新詩人は平順の語を以てしては其の情思を表現する能はざるか。詞意の險晦は技テクニックの足らざるに因するにはあらざるか。テニソンが或作の如きは雅馴穩健の詞致をもてして能く時尙に先だてる感想を歌へるならずや。所謂新詩人は何故に通常事を歌ふ場合にだに晦澁險怪なる語を用ひざるべからざるか云々。是れ非ブラウニング派の今尙主張する所なり。淑ぶものは缺點にだに私し難ずるものはひとへに其の短を擧げて其の長を蔽はんとす。世の論客が是非は概してかくの如しよく其の兩端を叩かん者ひとり能く事物の眞を知らん。按ずるに新思想を抱くもの世に之を傳へんとするやひたすら言はんとするに急に於て語を擇ぶに暇なく勢ひ含糊不明の章をなすこと多し。必しも新思想を表自せん爲には新辭を要すと自謙して後に然るにはあらむ論者が此の故に其の技の不熟を非ず當を得たりといふべし而も新詩人の作に遇ふや毎に技の不熟を咎め其の想の美を棄却せんか批評家の任務何の邊にか存する。抑も批評家は一面讀書社會の側サイドに立ち作者に對して適當なる注意と箴戒と奨勵とを與ふると共に一面作者の側サイドに立ちて世間の爲に新聲ニューボイスを通釋し懇に作

者の足らざるを補ひ將きに来らんとする新思想、新信仰、新希望の光明を傳へざるべからず。此の約束に外れたらんものは批評の一大要義を忘れたるものなり。畢竟アラウニクが是非の由來はテニソンの對照に基く所多しテニソンが典雅渾成の筆と相比して其の濫晦の一層きはだちて見られたりしに因る。又其の格外に賞揚せられしは其の思想のテニソンのに比して遙に高遠なりしと同時にテニソンに對する社會の歡待のあまりに甚しかりし反動なり。いづれにもせよアラウニクが運命は彼のパーンス、キーツ若しくはタルゾナルス、シェリーに比すればむしろ幸ひなりきといはざるを得ず彼れは其の存生中に十二分景仰を得たればなり。以下少しく彼れが作について觀ん。

彼れが詩篇は其の形の上より見るに概して律呂と押韻との調諧なきものにして其の詞の如きも往々にして滑稽劇の人物の白の如く或は電信用の文句の如く簡に過ぎて義をなさざるが如きもの多し。言語を思想の符號とせば彼れが語は更に他語の符號たりしなり。其の長篇を讀者の厭ひて重に其の短篇をよるこひしは洵に所以あり。加ふるに彼れは詩中に於て或は人心の解剖を行ひ或は哲理上

の議論を試み剩へ生硬若しくは險晦なる言辭を以て之れを行りしかば讀者はいよいよ其の解に苦みたり。彼れが作に對しては質を減じ文を加へよと求めざるを得ず。さもあれ彼れが詩には一種いふべからざる情趣ありて知らず識らずの間に入を魅するの力ある、ドライデン以後空絶と稱すべし。且や心理上の研究を利用して悲哀と滑稽とをほしめしにしたる技倆シェイクスピア以外殆ど空絶なり。センツベリー曰はく「彼れが宗教は所謂正統宗ならずとするもまた彼れが哲學思想は漠然不整なりきとするも神學哲學及び倫理學に關しては彼れ常に天使の側に立てりき、又其の政治意見の如きも其の甚だ茫漠として空理たるに過ぎざりしにも拘はらず常に公明にして正大なりきと。さて又其の劇詩の方は舞臺上の技術を缺きし爲めに實際の脚本作家としては殆ど稱するに足るものなかりしも人物の性格を活現する技倆は頗る歎美すべきものあり。又自然の風物を歌ふに於てタルゾナルスの如く精妙ならざりしも其の不羈宏恢の氣ある所は殆ど何人も彼に及ぶ能はじ。要するにアラウニクは之れを抒情詩人として見れば最高作家の一人なり。彼れは悲哀の歌を能くし又戀愛を歌ふに巧みなりき。總

じて短篇に其の最長を見る。中にも“*Asolando*”に收めたる六篇の如きは聲調と
その色彩とを思ひ想とを共に煩る見るべきものなり。“*Pippa Passes*”に收めた
る“*Through the Metidga*”“*The Lost Leader*”“*In a Gondola*”“*Earth's Immortalities*”“*Nesmerism*”
“*Women and Roses*”“*Love Among the Ruins*”“*A Toccata of Galuppis*”“*Prospice*”“*Rabbi Ben Ezra*”
“*Porphyria's Lover*”“*After*”等數十篇(殊に“*Last Rite Together*”の篇)の如きは抒情詩中醇
平として醇なるもの彼のテニンソンが夢幻的作物と相對して一代の珍たり。
ブラウニング夫人エリザベスバレットは夫よりも六歳の姉なりき又其の名聲は
普通の讀詩社會には一時は夫よりも高かりき。夫人は一千八百六六年ドルナムな
るカルトンホールに生れき。父は西印度なる某地の領主なりしが家産豊かなり
しかば或はヒアフォルドシヤアに或はロンドンに轉住し又チヂンシヤアに漫遊せ
り。此の漫遊中エリザベスはいたく健康を害ひ加ふるに父厄に遭うて其資産を
失ひしかば決然一枝の形管によりて一家を支へんと志し廣く古今の詩歌小説を
讀み作文の初歩より自修を始め兼ねて希臘語をも學び刻苦精勵の末遂に一千八
百二十五年“*Essay on Mind*”(人心論)といふ論文と數篇の詩歌とを世に出だしき。

時に齡二十歳なりき。これより十餘年間は別にいふべき程の作なし。同三十八
年“*The Seraphims*”外數篇の詩を物しき是れロバルド、ブラウニングが初めて文壇
に出でし程の事なり。同四十六年『詩集』を出版し此の年ブラウニングと結婚す時
に女史年四十一歳ブラウニングは三十五歳なりき。ブラウニングは家人の不承
諾を意とせずして女史みづから擇びし夫なりきといふ。かくて夫に従ひて伊多
利のフロレンスに其の病を養ひ同四十九年一子を擧げ翌年其の『詩集』を出版せり
夫人が名作は大抵前年の詩集と此の集とに收めらる。其の翌年“*Casa Guidi Vin-*
dos”及び“*Aurora Leigh*”成り同六十年“*Poems before Congress*”成りぬ此の三篇は其
の夫の詩に呼應する所少からざる爲め却りて其の特得の長所を損せし趣あり。
翌年六月フロレンスに歿しき。遺稿“*Last Poem*”は其の翌年世にいでき。
ロバルト、ブラウニングがもてはやされしは夫人が歿後なり其の生前にはパーレ
ット女史あるを知りてグラウニングあるを知らざりし者も多かりき。高遠なる詩
人としては女史の其の夫に及ばざるや明かなれど夫人また英國の女流詩人抒情
詩人としてクリスチアナ、ロセッチ女史を除きては前後及ぶものなき技倆を有せり。

其の詩(殊に晩年の作)は夫ロバルトの詩風を學びたるが爲め詞句の意義不明なる所少からねど尙ほ其の夫の如く甚しからざりしのみならず間々其の朦朧たるが爲に神秘的感情を寓し得たることあり而して其の少時の不幸と多病とより來れる悲哀の感想は屢々可憐巧妙の詩となりて其の愛讀者を泣かしめたり。蓋し(一)其の至誠なる宗教心はよく其の作品を高からしめ("Cowper's Grave" は其の好例)(二)其の博愛慈悲の主義はフッドが作ヂッケンスが作と呼應し("The Cry of the Children") (三)其の女性の特技は其の家庭的切哀を寫すにあらはれ("Isobel's Child") (四)其の傳奇的空想("The Duchess May" 及び "The Brown" "Rosary") (五)其の倫理及び政治の思想("Lady Gerildine's Courtship")はた讀詩社會の愛を博しき。さて其の辭句は律格押韻共に嚴正なるにはあらねど諷詠の間言ふべからざる情趣あり其の詞の選擇は間々宜しきを得ざりしかど尙創新の譽れあり。其の悲哀を叙するや女子の癖としてや、饒舌に流れたる所もあれど眞實と純粹とを失はずして句々能く人を助かす。而して自然の風物を歌うて繪畫の如き妙ある當時テニソンを除きては敵するものなかりき。按ふに夫人が長く病みて其の病室に閉居せしや嘗て刻苦自修

の際に硝窓を隔て、觀賞せりし遠山近水を憶ひ起し其の身の自由ならざる爲に一しは自然の悠々たるを慕ひ之れを翫賞するの念更に深きを致せしものあらんか。さて夫人が十四行詩に至りては遠くテニソンの上にあり其の夫に送れる Sonnets From Portuguese の諸篇の如きはシェイクスピア以後十六七世紀の名篇と伯仲の間にありと稱せらる。但し夫人が作に一大缺點ありそは女流作者の通弊ともいふべき一種の自信強く毫も他の批評を顧みざるのみならず反省の念に乏しく只管才に任せて作すること是れなり。識見素養の深からざる一女子にして之れを爲す失なきを得べしや。其の律格と其の押韻とが杜選に流れたること屢々破格の詞句たる頗る多かりき。此の弊尤も其の初期の年に多しブラウニングと結婚するに及びて其の夫に教へられて漸く此の失を改めきといふ。而して其の主題を擇ぶや亦た甚だ杜撰なりき或は他が物せる小説の筋を其のまゝに歌ひ或は一知半解にして或種の哲理を詠するなど讀者の譽を買ふもの一二のみならず。夫人が長所の缺點と共に夥しきは彼のバイロンにいとよく似たりき。一言すればブラウニング夫人は實に一世の才女にして鬼才ブラウニングの夫人たるに愧

ぢざりし者なり。」

第十八章 其他の詩人

テニソンとブラウニングとが第十九世紀後半の詩壇に日月の如く輝きし時尙別に幾多の明星ありて天の各方に耀けりき。中につきて最も著きをマッシュウアーノルド、ロセッチ、ロセッチ嬢、トムソン、クラフ、ロッカー、リットン等とす。今順次に略叙すべし。

(一) アーノルド

マッシュウアーノルドは詩人としてテニソン、ブラウニングに次ぎしのみならず批評家としても一世に推重せられたり。一千八百廿二年に生る父は有名なる博士アーノルドにしてラグビー大學の教頭なりき。幼時にはニウジグートとラグビーとの小學にて教育を受け後ちパルリオールに轉じて一千八百四十年同校を卒業し同四十五年オリリエルの校友に推選せられき。これより學務監となりて終生此の務めに服しき。同五十七年より十年間はオックスフォードの詩學教授を兼ね其の名いと高かりき。是れより先き同四十九年始めて『The Strayed Reveller and Other Poems』と題する一詩篇を公にし又同五十三年には『Poems』『詩集』を世にいだ

し、が後者は其の序文の巧妙なると名篇の多く收められたるを以て名あり。同五十八年希臘劇と英國劇とを折衷せる戯曲『Merope』といふを物せしが此の篇はスフィンパーンが『Atalanta in Calydon』及び『Frechtheus』と共に其の種の作中の傑篇と稱せらる。かくて後ち暫くは公務の多忙なりしと散文の著述の繁かりしとによりて詩歌を作する暇なかりしが同六十七年に至りて又『New Poems』といふ集を著し爾後陸續作を絶たず一生中の作集めて五百ページの大冊をなすに至りき。一千八百八十八年歿しき齡六十三。

現今に及ぶまでアーノルドを批評する者に二派あり一は彼れが散文を推重して詩歌を貴ばず一は彼れが詩歌を愛で、散文を珍とせず。兎も角も彼れは兩方面に秀でたり就中詩人として世に知られしは散文家としてよりも二十年の前にありき。

アーノルドは其のはじめ深くタルヅナルスを景慕せりき其の晩年にはタルヅナルスが缺點若干を擧げて論難せしこともありしが其の私淑せしこと深かりしは其の詩牀に揭焉たり。又ミルトンの風調をも學びたる跡あり。又半無意識にし

てテニソンの影響を受けしことも少からず。而もテニソン、キーツ等がローマン
 ス派の流麗華縟なる作に對しては反動し力を竭して別に新古詩派Neo-classicismを建設せんと
 欲しき。一面よりいへばアーノルドは所謂正格派Classicistに屬する者なりポーブが十八
 世紀の正格派なりしが如くアーノルドは十九世紀の正格派なりき換言すれば結
 構詩句の格法を重んじ辭を彫琢すると共に情理趣致の洗鍊を最みたりき。され
 ば其の作の最も秀でたるものに至りては其の妙十九世紀詩人中第一に位すべき
 ものもありしなり。批評と創作とが別才に屬するとは嘗て論ぜられたる所なれ
 ども最近代の論者は一步を進めて「批評の能なき詩人は未だ圓滿といふべからず
 而して詩才あり批評家は眞に無上なり」といはんとす。第十九世紀の詩人につい
 て之れを見るに獨りコールリッチはアーノルドより五十年代の前に出で、アーノ
 ルドにひとしき學者にして兼ねて詩人としては寧ろ一等を進めたるものなりき
 而も其の自作自評はアーノルドには嚴ならざりき。スコット、バイロン、キーツに至
 りてはもとより正當の學者批判家にあらず、シエリー、テニソンはた批判家たる譽
 れなかりき。此れによりて之れを觀れば或一派の徒がアーノルドを稱揚して九

天の高きに置かんとするも其の所以なきにあらず。

自作自評して自ら勵むことはアーノルドの夙に實行せりし所なるが故にや其の
 初期の作既に見るべきもの多し。中にも最も名あるもの二三を擧げんにシエー
 クスピヤを歌へる十四行詩ソネットは莊麗にして嫺雅坐ろに、ライオンが名句を聯想せ
 しめ「Myerinus」といふ六行一解の詩はよく光をテニソンと争ひ「The Church of Bron」
 は結尾に無限の餘韻あるを以て名あり(こはアーノルドが一生に通じたる特色な
 り)。その他「Requiescat」は精妙なる挽歌と稱せられ「Switzerland」は斬新奇警の詞
 致あり而して其の獨白劇「Strayed Beveler」及び「Empedocles on Etna」はやゝ後に成れ
 る「Merope」と共に一種の抒情詩として大に見るべきものなり。物語歌には優婉
 なる「Sohrab and Rustum」あり。「The Sick King in Bokhara」「Balder Dead」「Tristram and
 Iseult」「The Scholar-Gipsy」の如き皆佳作なり。總じて短篇を佳とす是は十九世紀
 後半期の詩歌の特質なるが如し。中にも「The Forsaken Mermaid」は觀念の深邃より
 は思想の創新と興趣の湛々とを以て著はれ「Dover Beach」は彼れが散文中の殊な
 る宗教思想を聲調めでたき韻語をもて表はしたるが故に名あり而して「Becha-

naia”及び“Summer Night”これに次く。彼れは頗る追懐ニホリアの詩を好みキタルツナルス及びハイチを歌へるものの如きは其好例なり。就中『エストミンスタルアッペー』は其の語意の莊重端嚴ミルトンが“Nativity Ode”に匹敵すと稱せらる。蓋し此の作ミルトンを聯想せしむるものあるは決して偶然にあらザアーノルドは常に詩題の撰擇に重きを置きて經營頗る力めたりしなり。現に前にいへる『詩集』の序文中に「詩題」に關して論じたることあり謂へらく「詩歌の貴きと然らざるとは全く主題の大小によるともいふべし些末の事を捉へ刹那の感想を寄せて之れを歌ひ以て一時の歡を買はんとするは是れ豈に最近詩人の通弊にあらザヤ。かゝるに詩篇を取りて之れを推獎し兎に角に其の多からんを望む是れ豈に最近批評家の通弊にあらザヤ。百千の盛火は一月の明に如かず片々たる斗符の小品朝に作せられて夕に讀まる爲す所果して幾何かある」と。按ずるに古今の大詩篇主題の大なるものもとより多からん而も其の盡く然るか否か輕々しくは斷ずべからざるなり。所謂大詩篇とは何ぞ。絶妙の詩篇といふ意か。主題の大ならざるもの何故に絶妙なるを得ざるが。大主題のみを歌ふべしとせんか詩人の主題は遂に盡

くるの處なきか。悉くアーノルドがいふ所に從はゞ吾人は遂にミケランゼロ又はレオナルド、ダ、ખンチエ等をすて、彼のピラミッド若しくはエスキュリアルなどいふ粗大なるもの、計畫者を尊ばざるを得ざるに至らん。豈にかゝる理あらんや。蓋しアーノルドが作はた常に彼れが言に副はざりしものゝ如し。そは兎も角も彼れが作の最も巧妙なる者に至りては其の數割合に少きだけに英詩の衆妙を盡したりと稱して溢美ならざるもの間とあり。是れ彼れを好む者の彼れをテニンソン、ブラウニングの上に置かんと欲し彼れを好まざるものだに其の人道所謂大題目發揮の功をたゝして彼れに同情を表する所以なり。

(一) ロセツチ及びピロセツチ嬢

前にもいへる如くマッシュウ、アーノルドはもとナルゾナルスの流れを汲みて其の詩田に灌せし人なり而して彼のキーツ、テニンソン一派がロマンチックの潮流に對しては力を極めて其の防遏に励めしか故に此の流れは爲めに方向を轉じて所謂プリファエルの運動(Pra-Raphaelite Movement)の一潮流となり延いて今日の詩界に及べり。ロマンチックの派とプリファエル派とは共に彼の宗教上の一派「オックスフ

オールド派の運動と密接の關係を有し始終これに助けられて其の勢を加へしものなり。さてプリファエル派の起りしは第十九世紀の中葉にて當時はアーノルドを首めとして有力なる詩人批評家のうちにこれに反抗せし者も少からざりしか此れ等二三子の死後は其の志を繼ぐ英才なく而して新派の方にはロセッチ、モルリス、スフィンバーン等の名家出て中にもスフィンバーンの如きは今も尙存生せる程なれば此の派は遂に全勝を得現に英國詩壇の大半を占領す。

ガブリエル、チャールズ、ダンテ、ロセッチ(通稱ダンテガブリエル、ロセッチ)は一千八百二十八年ロンドン府に生れき。父は詩人と批評家とを兼ねたる伊太利人なりしが本世紀の初め故ありて脱國し先づメンタに走り次いで英國に住みこみじき。かくて英國にて妻を娶り(伊太利人と英國婦人との間に生れし女)四子を擧げき皆文才ありガブリエルは其の第三子なり。兄 W. M. Rossetti は有名なる批評家にて姉マリア、フランセスカもダンテの略評をものして名あり。妹クリスタチナ、ジョルヂナにつきては後にいふべし。さて父はロンドンなるキングス、コレヂといふ大學にて以太利文學の教師となりて熱心にダンテを講説しがブリエルも夙に此の學

校にて教育せらるゝことなりしが彼れ生來いたく繪畫を好みしかは十五歳の時同校を退學しロイヤル、アカデミーに入りて畫を専攻することとなりぬ。かくて二十年間は此の業に従事して名聲ありき。されども幼時より作詩にも従事し一千八百五年にはプリファエル派の雜誌に "Germ" と題せる詩篇を掲げ同五十六年には『オックスフォールド、アンドン、カムブリッジ、マガツン』といふ雜誌の寄書家となり同六十一年には古代以太利誌の翻譯と自作の『詩集』とを公けにしき。同七十年又『詩集』を著し後八年にして "Ballads and Sonnets" を出版せり。一千八百八十二年病を得て歿しき。齡五十五。

以上の詩篇は大抵彼のモルリス、スフィンバーン等の作に先導せられて世に出でしが實際を言へばロセッチの二人に影響せし所も尠からざりき。此の三詩人は全く同一の詩風を奉じて立ち以て一派の根柢を固めし者なれど流石に各々特色あり。モルリスは佛蘭西英吉利の中古の詩風を慕ひスフィンバーンは廣く自國古代の作に其の模範を求め而してロセッチは傳來の以太利文學の上に脚を立てんと試みき而も共に中古派に屬せしは明かなり。ロセッチは壯時の作 "The Blessed Damsel"

を取りて之れを見るに其の想を全くダンテか或節より取り來りてこれに中古佛蘭西風の快活と中古英國風の創新とを加へたるが如き跡歴々たり。否な彼れが一生の作は大抵然るのみならず中古の荒唐なる思想感情に加ふるに十九世紀風の半ば神秘的なる幽玄の趣致を以てせしものいと多し。初期の作中見るべきは“Love's Nocturn” “Troy Town” “Sister Helen” “Penumbra” “The Woodspurge” 等なり。第二の『詩集』は前の『詩集』に追加せしものにして前のに比して異風なるは“Rose-Mary” “The White Ship” “The King's Tragedy” 等の物語歌の加はりたるにあり。以下少しく彼れが特質を評せんか。エミール・シャープは曰はく

彼れに取りては戀愛は一種の神秘的情熱にして、最もまた幽遠不可思議なる精靈の意義を一種の符合を以て表現せるものに外ならず

とげにや彼れはかゝる點に關してはダンテとや、趣きを同うせるならん。蓋しロセッチの戀愛は闇黒面なき戀愛なり。人間に於ける天道を鞏固にするものは是れ即ち彼れが戀愛にして斯かる戀愛は男女が形骸已上の美若しくは恒に「精靈に宿れる形骸の美」を相思するより生ずるものなり。而して其の精靈といふは皆中世

は太利詩人のいへりしものに同じく最近英國の思想には既に跡を絶ちしものなりしなり。實に彼れは最近の思想に對しては殆ど感ずる所なかりしものゝ如し十九世紀歐洲思想のほのかにも見らるゝ作は一生中二三篇に過ぎず。

要するにロセッチが特質は其の作の繪畫的なるにあり其の中古の思想感情をスコットより一層深く詩中に蘇生せしめんと努めながら尙十九世紀的幽玄の趣致を帶ばしめたるにあり其のコールリッジ、キーツによりて一たひ試みられ更にデニソンに至りて漸く成熟するに至りしロマンチック詩句及び語調を一層圓熟せしめたるにあり。シャープ又曰はく

早年に於けるナルソナルスとコールリッジとの間には作詩の標的に於て著き差あり日常生活を詩界に取り入れんさするはナルソナルスにして實在の眞意義を現はさんか爲めに實際以上の事柄を歌ひ以て人間の感情の度を知らんさせしはコールリッジなり「エンシェント・マイリナー」『クリスタル・カメル』『クアレー・カン』の如きはこれなり。而してキーツまた彼の「永く忘れられたる仙境の秘を探りて其の“La Belle Dame Sans Merci” “The Eve of St. Mark” の篇を得たりき。而してこの二人の數回遊歴を試みし此の異境は實にロセッチが生國にして妖鬼仙童の出沒往來する此の夢幻の靈域はロセッチが得意の彩筆に最も適したるもの

なりしなり云々。

ロセッチの小妹は名をクリスチナ、マヨールダナと云ふロセッチ嬢とて才貌双絶の名ありき。嘗て兄ロセッチがテニソンの作“Morte d'Arthur”に基づきて皇后の愁然として思ひくづれたる姿を書きし時其の畫の標本となりしは此の女なり。一千八百三十年に生れき。熱心敬虔なる教會員にして母に仕つて孝順身を持すること貞淑女詩人の模範たるに堪へたりき。同九十四年に歿しき。

其の作は多からず始めてものせし詩篇は題して“Goblin Market and Other Poems”といひ一千八百六十一年出版せられき。次ぎを“The Princes' Progress”といひ同六十六の兄ロセッチの挿繪を添へて公にしき。數年の後“Sing-Song”を著し、がそれより同八十一年までは取りたて、いふべき作なし。此の年“A Pageant and other Poems”を著はしき。

今日に於けるロセッチ嬢が評價は甚だ高く批評家は之れをブラウニング夫人に比較して其の變化の多きと作の夥しきとに於ては彼れに劣る所なれど其の瑕疵はと少なく未練長舌の弊なく溫柔優雅なる點は彼の夫人に優るとなせり。兎に角

大跡よりいへば英國女詩人(抒情詩につきていふ)中嬢に匹敵するもの殆んどなしと、いふべからん。其の最初の集に於ては彼のブラウニング派の特質のあまり著く現はれや、厭はしく思はしむる情を惹起するものあれど次ぎにものせる“Dreamland”“Winter Rain”“An End”“Echo”“The Three Enemies”“Sleep at Sea”樂曲“When I am Dead, My Dearest”及び夥多の十四行詩は何れも精妙の頂に達しよく此の派の粹を表はせり。而して“A Pageant and Other Poems”は前の二集に比して嚴肅の趣致滑稽の旨味双つなから勝りたり蓋しロセッチ兄妹は共に諷刺に長じたりしなり。要するに其の名作を収めたる“Collected Poems”一巻は英國古今の抒情詩集中稀に見る所なり最も可隣にして情趣深き花籠にも喩ふべく嬢が贈遺の餘香は今尙馥郁たる感あるなり。

(三) オシヨウチシー及びトムソン

ブラウニング派は今も尙ほ盛んなれども當時(今より三十年前に於てはロセッチ及びロセッチ嬢とモルリス、スフィンバーンとの外は其の派の作家中世に聞えたるものなかりしが尙仔細に該派中英才を探れば散文の名家を兼ねたるジョン、シモ

John Addington Symonds 逸才の盲詩人にして其の名はたゞ朋友の間にも高かりしフィリップ・マーストン Philip Bourke Marston 二十年間教會の僧官となりそれがため詩名中道にして滅せしホフキンズ Gerard Manley Hopkins 及びオシヨウチシ・トムソン等十數名あり。但しこゝには末の二家のみを略叙して止まんとす。「オシヨウチシ・オ・シャウネッシー (O'Shaughnessy 一八四四—八一) は大英博物館の館員なりき。詩集三巻あり「The Epic of Women」(一八七〇出版)「Lays of France」(一八七二)及び「Music and Moon-light」(一八七四)是れなり。別に遺稿一卷「Songs of a Worker」と題して歿後に出版せられしが其の中「Lays of France」は Marie の意譯にして「Songs of a Worker」の大部分もまた佛蘭西の最近の詩歌を翻譯せしものに過ぎざれば彼れか其技倆は殘れる二卷に於てのみ見るべし。彼れは例のプリラフェル派の夢幻詩想の極端を悦べりしがゆゑに其の作世俗に厭はれ、人間的興趣を缺けりといふ批難を得て空しく其の生を畢へたり。思ふに彼れは自家のみを宗とせりし詩人にはあらざ例へば米の詩人エドガー・ポーに負ふ所などいふ多し又彼れの音樂の好尚に富めりしは「Music and Moon-light」の詩編によく見えたり。要するに其の詩のあまりに

ロマンチック風に馳せて荒唐怪僻となりたるは厭ふべしと雖も尙ほ流石に棄てかたき趣味もあり。

トムソン 十八世紀の末に出で、『四季の歌』の作者として詩名を一世に揚げしチエームス・トムソンと同姓同名の詩人にしてプリラフェル派中最も異色ありし詩人なり。一千八百三十四年に生れき。其の父は舟夫にして家甚だ貧なりしかば幼にして救貧院 Royal Caledonian Asylum に送られて教育を受け業を卒へて後或る兵學校に奉職せしが性其の職適せざるのみかチャールズ・ブラッドロウ Bradlaugh 等一派の感化を受けて懷疑説をよろこび共和主義などを奉ぜしかば遂に一千八百六十二年に其の職を辭したき。或は謂ふ其の厭世の最も著き動機は其の愛着せし少女が死去せし事なりと。かくて後或は狀師の書記となり或は鑛山の吏となり或は軍事擔當の新聞記者となりて數年を送り竟に印刷業に従事しこゝに漸く生計の安途を開き、同八十二年に歿しき。要するに不平の間に人となり不平の間に業を執り終始不平の歲月を送りて生を了へし詩人なり而して其の不平の精神はよく其の詩にあらはれたり。又夙に散文家として名をあらはし詩文

學を評せしがもとより殊なる素養あるにもあらず識見はた卓拔とは稱し難けれど着眼流石に奇警にして筆鋒もまた鋭利なりき。彼のブラッドロウが主筆たりし“National Reformer”といふ雜誌にB.Vといふ假號にて屢々時文評を掲げしものは即ち此のトムソンなりき。當時はシェリーに私淑せりしものゝ如し。さて其の批評中間々見るべきものもありフルード、キングスレー等は賛稱せりきといふ。一千八百七十四年初めて“The City of Dreadful Night”といふ詩をもつて例の雜誌に掲げしが顧るものなかりきかくて後八年にして又“Van's Story”など題せる篇を出だしるが世間の冷遇は以前の如くなりき。かくして輶軻の間に逝るに及びて世人は遽かに其の作に注意し其の詩集は忽にして二三版を重ねしが作物いとなかりしかば今尙其の眞價を評定すると難し。“The City of Dreadful Night”は厭世的精神の一貫せる作也宛たる虚無黨主義の深刻なる作にして冷酷なる狂憤の語時に人をして悚然たらしむるところく華麗莊嚴擲すき情致もあり。最後の作“Insomnia”亦た鬼氣あり。而して其の未だ幸福なりしころの作“Sunday at Humpstead”“Sunday up the River”“the Naked Goddess”其の他二三篇はやゝ光明界に

近き作なれど尙ほ狹隘に一律にして不自然背理の悲愁あるを免れず。其の消極的絶望的なる神秘界の消息を傳へて鬼哭啾々の聲あるところ彼のロセッチ嬢が瑞氣飄々たる積極的有望的の神仙界を歌ひたる聲と相對してプリラファエル派の兩面を代表せるものと評すべし。

(四) 第二級の詩人

(一) ダツバル Martin Farguha Tupper は一千八百十年に生れき。父はチャンネル島にて有名なる外科醫なりき。ダツバルはチャタールハウスと基督教會にて教育せられ業を卒へて後ち評議員の職に就きしが性文學を好みしかば程なく職をすて、鉛槧に従事し重に韻語の作をもつしき。一生を著作中最も有名なるをば“Proverbial Philostry”となすは一千八百三十九年に出版せられき。當時の批評家は其の平凡庸劣を難じたりしか讀者の多きことは古今比なく版を重ねると四十純益二万磅に及びきといふ。同八十九年に歿しき。温厚の士なりき。未だ出版に及ばざりし詩篇數十ありいづれも短詩の模範とするに足るものなり。前にいへる“Proverbial Philosophy”は其の傑作にして其の平易にして花やかなるころ尤も俗衆

によるこばれし所以なり。

(二) テニソンが親交の詩人 アルフレッド・テニソンが作『Poems by two Brothers』は其の二兄と共に作せしものなることは已に前にいひしが其の中長兄フレデリックは今年九十一歳の高齡に達して今ま尙は存生し筆硯頗る健なりといふ。次兄チャールズ(一八〇八——一八七九)亦詩名あり殊に十四行詩に秀でたり。彼のテニソンをして『インメモリアム』をものせしめし親友アーサー・ハラムもまた散文にも韻語にも名ありき。取り出でいふべき長所としてはなけれど雅馴にして瑕疵の少きは見るべし。彼の「ストルリッソ」社を開きし散文家ジョン・ストルリッソ亦たテニソンが親友にして時々作詩あり常にテニソンの詩風を模せりき。カーライルは彼れを評して詩文共にテニソンとハラウとの間にありとなせりき。

(三) トレンチ(一八七〇七——一八八四)カムブリッジの神教大學を卒業して監督牧師となりし人なり。其の傑作『Study of Words』は『學者的の詩歌中最も通俗而して通俗的なる詩歌中最も學者的なるもの』と稱せらる。彼れは重に中世紀のラテン文學中神秘端嚴なるものを英國に紹介することを力めたり。創作にてはアルマの

歌を歌へるもの、外別にいふべき作なし但し十四行詩及び讚美歌には見るべきもの多し。

(四) トマス・ゴルドン・ヘーシ 其の作世に多く稱せられされど詩としては珍とすべきものあり。『Old Souls』『The Snake Charmer』及び『The Palmist』を其の三傑作とす。其の平生の主義に曰はく

苟くも完全なる詩歌と稱すべき詩歌は其の意義を理解するが爲めに讀者をして多量の知識を要せしむる底のものなるべからず。さりさて一讀して其の内包の一切が明々白々に讀者の眼に入るべしとにはあらずたゞ智を以て謎語を解するに心を奪はれ詩を樂むの餘裕なきに至らざらんを要す。

と。彼れか作は此の主義を實現せるものといふべし。前に挙げたる三篇は更らなり『Madeline』『Parables and Tales』『New Symbols』『Legends of the Morrow』及び『Maiden Ecstasy』等皆同じ趣きあり。多少の作詩の経験あるものにして之れを讀まはげにもどうなつかるべし多かるべしとセンツベリーかいへるさることなり。

(五) エドモン・ウィリアム・エドモンストン・アイトン(一八三一——一八五六)は『テラッシュウッド雜誌』の重要なりし記者にして法律と文學との記事に名ありき。地方長官にして大

學教授を兼ねたり共に令名ありき。齡十七歳にして初めて其の詩を公けにしき。其の傑作は大抵 "Bon Gaultier Ballads" 及び "Lays of the Scottish Cavaliers" の中に收められたり。後者は一千八百五十四年の出版なり。翌年 "Bothwell" といふ長篇をあらはし又同六十一年には "Norman Sinclair" といふ小説をもしき共に好著なり。彼れか一生の作を代表すへき "Lay of the Scottish Cavaliers" の詩体は悉くスコットのに倣ひたれば彼の平板の失に陥りたるは惜むべし但し瑰麗なる詞句に其の平板を破りたる所間あり "The Island of Scots" "The Heart of Bruce" 等は其の例なり。要するに小スコットといふべき作家にして熱心なるトリーリ黨兼ねて中古武士の愛慕者たりき其の抒情的想像は概ねこの性癖に制せられたる觀あり。

(六) スバスモヂツ派 暫且の感動を本とする派即ち際物派 所謂際物派の起原は何年なりきとも定めがたけれど兎に角十九世紀の初めに起りしものなることほぼ明かなり。按ふに彼の定期出版物の隆盛に際して雜誌新聞紙等に珍事異聞を掲ぐることも盛んになり而して之れを散文の雜誌に見るのみにあき足らで更に之れを詩に詠することを試みるに至りしや其の始めなるべきか隨ひて何人が其の最

初の作者なりしか詳ならず。雜誌新聞紙類にたづさはりし者の中より誰れとなく何時となく行はれ始め漸く一派を以て目せらるゝに至りしならんか。もとより詩としては取るべき價值あるにあらず其の長所を擧げんにたゞ事の實際に近くして放膽の氣ありといふほどの事にて概ね巧遅よりは拙速を貴び一時の喝采を博すれば足れりとせしなり。今尙存生し "Festus" の記者として名あるヘイリ

イ Baily の如きも始めは此派に屬せりきとす。

一時此の派の牛耳を執りしはシドニードーベル Dobell とアレキサンダル、スミスとなり。共に十分の教育もなく秀でたる詩學上の意見もなく衣食に追はれて筆を一時に執りしものゝ如し。

シドニードーベルは一千八百二十四年に生れしが家貧にして小學にも入る能はず家庭にていさゝかの教育を受けしのみなりき。さて長ずるに及びて父の業を嗣ぎて酒舗となり處々の市府に旅行し此の間に見聞を廣め後の著作に益する所ありき。一千八百七十四年に歿して處女作を "The Roman" とは所謂書齋劇 closet drama なり一千八百五十年に出版せられき。後三年にして又 "Balder" をものせり。此

の作を彼のイブセンが“Brand”と比較するものもあれど如何あらん。シリミア戦争はドーベルが得意とせし題目なり“England in Time of War”と云ふ作あり尙其の外にスミスの合作“Sonnets on the War”と云ふあり。

スミス(一八二九—一八六七)が生涯詩風共にドーベルと大差なし。廿歳の頃“Life Drama”をもつて喝采を博し後ち“City Poem”(一八五七)“Edwin” of Deira”(一八六一)等をもつてせしが晩年散文に従事して小話の類を綴りき“Dreamthorpe”(一八六三)“A Summer in Skye”(一八六五)は其の著きものなり。

ドーベルの作の取るべきは着想の異風なるにあり“Tommys dead”は其の傑作なるべし。たゞ其の篇餘りに長く且つ詞調平板なれば讀過に堪へ難し。スミスは着想ドーベルに劣れども辭句は巧なり其の處女作“Life Drama”最もよし。此の派に屬せしものうちにて他にヤノ名あるは

W. C. Bennet. William Cory (?—1892). W. C. Roscoe(1823—59). William Alingham (182489). Thomas Woolner. 等なり。

(五) クラフプロ、カル及びビットン

アーサル、ヒウ、クラフ　は如何なる故ありてか當時上流の人々より「悪詩人」といふ號稱を得たりしかこは別に故ありての悪名らしく彼れが作は決して悪詩と稱すべきものにあらす其の“Qua Cursum Ventus”の篇の如きは諷誦三嘆措く能はざる名句に富めり。一千八百十九年オックスフォードに生れき。幼時を亞米利加にて送り年少にしてラッシュビーに赴きかしてこにて夙に其の名をあらはせりき。後ちオリーエルの校友に推選せられしが一千八百四十八年之を辭してロンドンなるユニヴァルシチー、ポールといふ教育會院の長となり轉じて教育局 Educational Office に入り一千八百六十一年伊のフロレンスにて歿しき。初めてものせし詩を“The Bothie of Tober-nr-Vuolich”と云ふ。次ぎて“Amours de Voyage”及び“Dipsychus”成りぬ。此の三篇はやゝ彼の際物派の風あり。後また“Ambarvalia”“Bothie”等を陸續出版せり。而して全體に亘りて之れを見るにクラフは十九世紀の懷疑思想に感染したりしあど歴然たり。蓋しクラフの出でし時は恰もフルードのいへる如く「オックスフォードは信仰と不信仰との二氣が有爲なる青年の腦裡に旋風の秋葉を捲くが如く相追驅せし中心にしてクラフは此の間に於て兩者の一に就くの輕忽にし

て危険なるを知り断然中立してたゞ最も穩健なる道念に依頼して一身を修め以て静かに大聖の降誕を待ちしか故に其の外貌一見甚だ卑屈なるか如く遂にセンツペリー等をして彼れは信ずるの力を缺き反抗するの勇氣を缺きしものなる如く思はしむるに至りぬ。されどこは畢竟するに彼れか中心の頗る強健なりしか爲なるべし。ドゥデンもいへる如く彼れか健全なる道念底より出でたる詩歌は他の徒らに懊惱する青年輩に取りては一貼の安慰劑とも稱しつべし。たゞ惜むらくは彼れが心中には信仰不信仰の兩々相軋して火を發するに至らざりしが故に其の詩篇に於て雲湧き龍躍る壯絶快絶の觀を見る能はざりしなり。其の“Latest Decalogue”の諷刺は頗る見るべく田園詩の朴茂また愛すべし。フレデリック・ロッカール Locker は一千八百二十一年に生れき。初め海軍省に奉職せしが後ち官を辭し文學に従事して一千八百五十七年初めて“London Lyrics”といふ作を公けにせり。爾後多く作らず只だ時々彼の篇に追加せし外に同六十七年“Lyra Elegantiarum”といふ詞華集を出だし同七十八年詩歌と散文との雜著集“Parnassus”を公にせり其の伎倆はこの篇に於て見るべし。或はこの作を評して其

の外形ソーシーが“Omnia”に似たりとせり實にさるふしなきにあらず。“My Guardian Angel”は短篇の逸話にして文致の簡潔雅馴なる同種中稀れに見る所なり。さればにヤセンツペリーは若しチャールズラムをして此の時代に生れしめて此の境遇に立たしめば必ずロッカールと同一様の作をなせしならんといへり。

リットン 小説家として名高かりしリットン伯の子にて名をエドワード・ロバートといへり。但し其の世に出だし詩篇には久しくOwen Meredithといふ假號を用ひたり。一千八百三十一年に生れき。十八歳にして外交官となりこれより三十二年間歐洲の各國に轉任し遂に父の爵を紹ぎ同七十六年には印度總督に任ぜられき同八十年辭して國に歸り七年の後全權公使となりて佛京パリに赴き同九十二年かしこにて歿しき。其の政治上の生涯かくの如く煩劇なりしにも拘らず詩歌の作頗る多し“Olympestra” (1855) “The Wanderer” (1859) “Uncle” (1860) “Songs of Servia” (1861) “Fables in Song” (1874) “Glennavril” (1885) “After Paradise” (1887) 等は其の重なるものなり。此の他傳記小説及び他人との合作詩集あり又遺稿は“Marah”及び“King Poppy”の二巻となりて歿後に出版せられき。

リットンが全作についての眞價は今なほ定まらず。其の作いと多きのみか諸種の詩人の影響を受けて其の躰も種々なり。さりとして摸倣者とはいふべからず獨創の才も見ゆればなり。又批評家に擯斥せらるゝは俗受けを主となせるが故かと思へば世俗には寧ろ高尚に過ぎて悦ばれざる趣あり。随うて批評は紛々たれど要するに彼れが聲價は其の眞價よりも下にあるが如し。彼れが詩風の晩年に至りて粗々一定せしがごとくなれどはじめはテニソン、ハイチ、ブラウニング等其の他あらゆる名家の作に摸倣し時には換骨奪胎にもあらず斷章取義にもあらず他の趣向をも詞藻をも其のまゝに借り來て殆ど増減せざりしことあり爲めに剽竊家といふ非難を被るに至りき。然れども第一彼れが詩に抒情詩として得難き實際的眞誠的不易的の質あり以て其の詩躰の過麗なる缺を補へり『The Wanderer』、『Fata Morgana Buried Heart』の如き『March』の『Experientia Selenites』の如き是れなり。第二は其の獨得の獨語風の話説なり、こは他の企て及ばざる所にして後には一變して寓言風となりしが若し初めより終りまで此の詩躰に従事して此處に其の脚を立てしめば其の名聲或は今日の如きに止まらざりしならん。

六) モルリス及びスフィンバーン

モルリスとスフィンバーンとは詩統の上より見れば前にも云る如く彼のロセッチと同派に屬す。其中後者は尙現に生存しモルリス將た昨年逝りしばかりにて其評未だ定まらざる有様なれば茲には唯一わたり其名作に付てのみ略説し置べし。』
 スフィンバーン、モルリスは一千八百三十四年ロンドンに生れオックスフォードなるExeter College といふ大學にて教育せられし人也。其の全躰の詩風はチヨウサルが物語歌を師とし且つ『Renaissance at Wonder』、『荒唐復古』を主義とせる一種新躰の物語歌を以て本領となせりしが如し。處女作を『The Defence of yneverere』といふ傳奇風の短篇を集めたるものなり。例のロセッチ風にフラウニング風の獨白躰を雜へたるものなり。篇中アラウニングにひとしく晦澁の個處も少からぬど又一種の妙味あり。其のアーサルに關する物語歌はテニソンが『Idylls of the King』に比すれば遙かに劣れる作なれどテニソンの出でざりし前に出版せられしかば評は頗ぶる高かりき。モルリスが世界及び人間に對する當時の感想の最もよくあらはれたるは『Haystack in the Floods』の篇中にあり。七年の後『Life and Death of Jason』と題する

長篇の物語歌をものしこゝに全く其の詩体を定め遂に程なく彼の最大作 “The Earthly Paradise” (『地上樂園』) を作るに至りき。『地上樂園』は四長篇より成り一千八百六十八年より同七十年に亘りて出版せられき。

ノルエーの貴族二三名及び水夫若干この程或る海洋の中に彼の地上樂園ありき聞き其處へ赴かんさて船を購してそこそもなく渡々たる大洋に乗り出したるが途中にて暴風に遭ひこれより数年間海上に漂ひ種々の艱難を経遂に蠻民の住める一小島に漂着しそこに件の蠻民どもより種々に款待せられければ其の報いとしてこれより一年の間毎月二回其の知れる奇譚を物語りす

といふ筋なり。第一卷には三月より八月に至るまでの分十二篇を收め第二、第三、第四に於て九月より翌年の二月に至る十二篇を收め都合二十四篇より成れり。チヨウサルが『カンターベリー物語』の筋と相似たるを見るべし。こは作者も自白せし所なり。詩律もチヨウサルのに同じく三種を用ひたり。さてチヨウサルと異なる所は件の物語の間に劇詩的妙味を加ふる能はざりしこと、其の當代の事件を詩中に取り入れざりしことにあり。さて初めの三卷は全く英國古代の文致によりてもものせしが其のアイスランド文學を愛するに及ひしころの筆に成れ

る末卷にてはノルエー文士の敘事的筆致をも模したり。卷中の物語は孰れも作者の創案にあらず或は古詩歌或は古傳説の中より得たるものにて通常人の見聞きて無趣味殺風景の囁語となせるもの、中に一種の生命を發見しこれを化醇して生氣を與へ是れに衣するに典麗華穠の章を以てしたる也。而して此の長篇は話説の程合ひ其の宜しきにかなひ押韻句法亦た頗る變化に富めるが故に讀者厭倦の情を催さざるのみならずよく篇中の人物と共に夢幻の境に遊ぶを得。且つ作者は大に自然界を愛し戸内よりは寧ろ戶外に於て生活せし人なるが故に篇中こゝかしこ自然を歌へる所清新快活の氣に富み時に人をして快哉を呼ばしむるものあり。

モルリスの作は尙 “The Story of Sigurd the Volsung” 及び “Hope and Fear for Art” の二著あり前者は一千八百七十六年に出版せられき。『アロニウム』(雜誌)は此の篇を以てモルリスが最成功の作となし其の文章の強健なるどころ其の結構の劇詩的なるところ共に『地上樂園』の上にありとなせり。後者は同八十二年の出版にかゝる美術講話集(五回分)なり南歐の美術を推稱シラファエル以前の典雅高渾なる繪畫趣

味を論じたるものなり。

アルセルノン、チャールズ、スフィンバートンはモルリスよりは三歳の弟にて同じくロンドンの人なり。少時佛蘭西にて教育を受け一千八百五十七年國に歸りてオックスフォードなる Balliol College といふ大學に入りしが卒業に及ばずして校を退き二十三歳の時初めて脚本二篇を綴りて公けにす "The Queen Mother" 及び "Rosamund" 是れなり。共に一種の筆力を具へざるにあらねど筆路結構なほ未だたどくし。同六十五年又劇詩 "Atalanta in Calydon" といふを作す想形共に全く希臘風のものなり想像豊富シエリーに次ぐとの好評ありき。同年又 "Chastelard" をものしき。蘇國の女王メリーを主人公となせる悲劇なり女王が冷薄荒の性格よく寫されたり之れが爲めに蘇格士黨の人々には頗る憎惡せらるゝに至りきといふ。翌年 "Poems and Ballads" といふ詩集を出だしき。作者が彼の世間の批難に抗して美術は道徳宗教政治以外に獨立すべきものなりと極端に論じて愈々物議を醸すに至りしはこの時の事なり但し當事の極端なる主義及び缺點は次第に後年に至りて緩和せられ若しくは除かれたり。同六十七年 "A Song of Italy" をものし翌年 "Satan" を

ものし同七十年 "Ode on the Proclamation of the French Republic" をものし同七十一年 "Songs before Sunrise" をものしき。一生中の最長篇を "Bothwell" とす同七十四年の作なり "Chastelard" の續篇として女王メリーの後日譚を劇詩體にものせる叙事詩なり篇一万五千行を以て成り登場人物重大なるもの數十人の多きに及べりあまりに長篇なれば舞臺に上らしむる望みはなけれど人物の性格はよく現はれ殊に彼のフルードの史筆に基きて物せる女王メリーの如きは執拗夜情酷薄にして又詭策に富めるところマクベス夫人の面影ありと稱せらる蓋し彼れが劇詩中の白眉なり。これより現今に至るまでの著作にて重なるものを擧ぐれば "Poems and Ballads" の第二集(一八八〇) "Songs of the Spring-tides" (一八八〇) "Studies in Song" (同) "Mary Stewart" (一八八一) "Fisstrum of Lyonesse" (一八八一) "A Century of Roundels" (一八八三) "Marino Faliero" (一八八五) 及び "Miscellanies" "Viegor Hugo" (一八八六) 等なり。

さて全躰に亘りてスフィンバートンが詩を見るにシャーマのいへる如く思想及び意義の深遠幽遠よりも衷情の華麗にして光炎あるところに其の長處は存するが如し。彼れが思想は到底フラッシュニング、テニソン、アーノルドの深く且つ高きに及ば

ザ否なブリ、ラファエル派中にもロセチモルリスの飄逸なるに及ばず。而して後年の作を取りて調査すれば第一、甚しく非クトル、コーゴの感化を受けたること第二、極端に小兒を愛すること(スフィンバインは始終動もすれは極端に陥れり)第三、大に自然界を愛し殊に海洋を嘆美せしこと等の性質歴々たり。彼れは其の海洋癖を利用し以て其の詩調の變化を扶けたり平潮漫々欲帆の斜陽を帯びて走るが如き激浪澎湃虬蛟の雨を呼んで叫ぶが如き皆彼れが取りて以て其の聲調の素養となし、もの也宜なる哉さばかりの長篇に於て讀者の毫も單調に厭くことなきや。實に彼れが詩は「意義の詩」といはんよりはむしろ「音調の詩」と名くべし。意義の上に於ては到底シニリーとも併ぶを得ずと雖も音調の上に於てはよくテニソンをも凌がんものありとすればスフィンバインが詩歌の名聲は兎に角に不朽なるべし。

尙ほ説きもらせる第二流の詩人若干と其の作の一二とを掲ぐることを下の如し。

Lord Houghton "Brookside" "Strangers yet" 等
 Alfred Donett(1811—87)....."Ranulf and Amohin" 等

Charles Mankay(181—90) "Cholera Chant" "O, ye Tears" 等
 Mrs Archer Clive....."IX Poems by V." 等
 Roden Noel (1834—93) "A Little Childs Monument" 等
 Thomas Ashe(1836—89) "Sorrows of Hysippyle" 等
 Charles Stuart Calverley (1831—84)....."Verses and Translations" "Fly Leaves." 等
 Lady Dufferin(1807—67)..... "The Irish Emigrant" 等
 Emily Bronte....."Last Lines" 等
 Mrs. Norton(1808—76) "Annals" "The Lady of Is Garaye" 等

第十九章 最近小説家

第十九世紀前半の小説家は曩きに「新代小説家」の章に略説したる如し。彼等は何れより新代小説家の先驅たりしには相違なけれど之を同後半期に出でし小説家と較ぶるときは其の間顯著なる差等なきを得ず。何ぞや。前半期の小説家も何れも一世の英才にして其の作に玩賞すべきもの頗る多かれとよく觀れば時勢との關係流石に未だ親密ならず隨うて「第十九世紀前半期の英才」と特稱すべき點乏

しく寧ろ、いつの時代に置くも差支なき底のものたり其の然らざる者だに新代小説家の特徴を備へたるは殆どなし。一千八百五十年以後に出でたる小説家は是れと異なり、いづれも時勢の推動と大關係を有し、オックスフォード派の運動、科學の勃興、教育の普及、美術の重視せらるゝに至りしこと、クリミア戦争後英國の再び大陸政略に關涉するに至りしこと、盛んに蒸車漁船を用ひて大に貿易を興せしと、澳太利及附近諸島の開拓、印度騷擾 (Indian Mutiny) の後ち東印度會社の權力の移動及び一般社會に於ける改進黨主義の發達等のごときは皆此等小説家に影響する最大なるものなりき。さて一々につきて其の影響を精査せば大に我が讀者を益することあるべけれど、今之れを試みん餘地なければ、就中最も著明なるプロンテ、エリオット、キンクスレー等數名の上のみを略叙して止まん。

(一) チャロット、プロンテ女史

清新獨創の思想と華麗遒勁の筆致とを以て新代小説の先驅をなししものをチャロット、プロンテ Charlotte Brontë 女史とす。一千八百十六年に生れき。愛蘭土の人、ヨオクシヤアの牧師の女なり。姉妹五人あり幼にして母と二姉とを喪ひ處々を

流遇し窮迫の間に教育せられ、竟に残る二妹と共に教師となりてブラッセルに赴きぬ。此の三人皆文才あり一千八百四十六年始めて合作の『詩集』("Poems")を公けにす。此の編皆匿名を用ひプロンテは Currer Bell と號し二妹 エミリー及ア、ン、ト Ellis Bell 及 Acton Bell と號しき。次に小説の作ありプロンテは "The Professor" をヘンリーは "Wuthering Heights" 及び "The Tenants of Wildfell Hall" をア、ン、トは "Agnes Grey" をものしき。而してプロンテが "The Professor" は悪作なりとて出版を拒まれしかば女史はこれより大に發憤し其の一世の名作 "Jane Eyre" の著に心を凝らし遂に一千八百四十七年を以て脱稿しき。されどもこれを購ふ書肆なく、緩かにミス及びエルダー二氏の好意によりて出版せられしが攻撃の聲頗る高かりしと共に讀者また頗る多かりき。翌年エミリー没し其の翌年ア、ン亦た歿して。此の年女史 "Shirley" をものし同二十五年 "Villette" の作あり二年の後結婚し翌年みまかりき齡僅に四十。

プロンテが作のかく一方に於て攻撃せられながら一方に於て非常の喝采を得たりしは蓋し女史が作は新小説の先驅たりしに因る。抑女史の出で、其の彩筆を

揮ひしは恰もスコット既に死してサッカレー尙未だ出でずスコットが模倣者も概ね様
に依りて葫蘆を畫くに止まり讀者漸く其の千篇一律に飽かんとしヂッケンス一流
が近代の家庭小説はた纒かに呱呱の聲を揚げしに止まり其の四肢は未だ發達せ
ずして宗教的と懷疑的との間に踰躓せし時にあり。女史が小説は此の過渡時代
と新時代との間に架せる一橋梁にして實に女史が名をして不朽ならしむるもの
は一つにはかく新代小説の先驅たりしに因り一つには其個有の特質の大に見る
べき者あるによれり。所謂個有の特質とは何ぞや。女史が半世の閱歴より得た
るもの是なり。其傑作 *Jane Eyre* に就きて見るに女主人公デューの性格の其獨白
の文章に於いていみじく現はれたるは更らにも云ず「醜雄」ローゼンストルのごと
き人物を描きてよく其の神に入りしものは皆其の閱歴より來れること衆批評家
の噴々して止まざる所なり。按ふに閱歴の用を爲すは作者に詩人の資ありて後
の事にして閱歴は詩人にとりては到底第二位以上にあるものにあらずされど三才
直觀の大詩人だに尙且つ其の作礎として若干の閱歴を要すべく然らざるものだ
に尙ほ閱歴によりて大に其の文想を開發する機會を得べしそは彼のバイロン以

下の詩人に徴しても明かなりフロンテ女史が閱歴の其の小説を帯けしことの少
小ならざりしやまた争ふべからず。然れども第二流以下の詩人を利するものも
害するものも双つながら閱歴なり其批評家もいひし如く女史をして若し尙十年
二十年の歳を保たしめこれをして例の如く小説に筆を執らしめば其の名聲恐ら
くは今日の如きを得ざりしならん。何が爲ぞや。女史が閱歴は女史の爲めにほ
ゝ其の用を盡し果てたればなり。女史が多少の創意を加へきといふ「醜雄」の性格
の如きも沙翁の大才あるにあらずんばよく之を再びすること能はじ況んや女史
が筆は少妹エミリーが如き妖嬌の欠きたれば永く諸者の愛玩を持続する能はざ
るべきをや。畢竟するに *"Jane Eyre"* の如きはたゞ一篇にてこそ珍品なれ二篇三
篇と續出するに及びては讀者漸く之れを厭棄せんや必せり。論じてこゝに至れ
ば實にフロンテ女史が蚤死は寧ろ其の幸なりしが如しと雖も又一方よりこれを
觀るときは吾人はセンツペリーと共に

女史が文思は如何に游溺にして其の詞藻は如何に粗厲なるも其の小説は死に角に全
く創新たるものにして決して過去のものにあらず現在及び未來へかけて生命を有す

へきものしにて其の文學史上の價值に至りては斷つてこれを模倣小説の圓滿なるものの上に置かざるべからず。

といふべきなり。

少妹エミリーが作また名あり一時はフロンテ女史を凌ぎたりしこと上にいへるが如し。概ね短篇にして其の描く所の性格はた廣からずと雖も創新の點に於ては其の姉に譲らず、輒近小説壇の一佳什なり。

(一) ショルゼ、エリカ、ト子

フロンテがみまかりし一千八百五十五年の翌秋及び五十七年に於て “Scenes of Clerical Life” 中の一篇 “Aunt Barton” といふ小説『ラッシュウッド雜誌』に掲載せられき。著者はショールヂ、エリオットと稱せり。ショールヂ、エリオットとはマリアン、エヴンスの假號なり。女史が此の匿名を用ひて作せしや其の作巧妙なりしが爲めに大に讀詩社會の好奇心を呼び起し作者の實名に就いて推測揣摩紛々たりき。或は之れを英國々教會に屬する法教師の著ならんといひ或は之れをケムブリッジ出身の牧師ならんといひ其の他思ひくの想像を以て著者の素性をいひ中てんとし評壇

騷然たること二年餘、迷誤は迷語を重ねて著者をマリアン、エヴンス女と知るものなく獨りヂッケンスが烟眼のみ著者の到底女性なるべきこと及び万一男子ならば古來未曾有の女性的頭腦を有するものならんと思破したりき。マリアン、エヴンスとは何者ぞ。

マリアン、エヴンスは一千八百十九年英國ミッドランド山間ワーリックシアの一邑に生れき。幼時は全く此の片田舎にて教育せられ宗教上の信仰頗る篤かりしが二十歳にして父に従ひエズントリーに涉りユニテリアン派の人々と相交りこれより漸く信仰上に疑惑を生じ遂に自ら教會を脱するに至りぬ。女史がストラッスの “Leben Jesu” 『基督傳』を翻譯して始めて文界にあらはれしは此の時なりき。一千八百四十九年父を喪ふすなはち去りて瑞西に赴きセネヴの湖畔に質素なる生活を營み靜かに崇高なる道念と微妙なる詩思とを養ひ且つ古文學を研究すること一年餘、歸り來れば生活の急焦眉の間にあり即ちロンドンに止まり『エストミンスタル』の社員となり又『フイエルブラーク』 “Wesen des Christentums” を翻譯しき。此の時女史はカーライル、ミル、スペンサル等の名士と交り大に啓發せらるゝ所あり

又スペインサルの紹介によりてシャルヂ、ヘンリー、リュネウスと相知り遂に彼と婚して
 獨逸に遊びぬ時に一千八百五十四年なり。是に於て夫は『キョオテ傳』を稿し妻は
 スピノザの倫理書を反譯して緩かに其の生を支へ此の間若干の知人を得て飯國
 せり。リュネウスはもと哲學者にして科學者の頭腦を有し亦た詩人的詞才に富み
 小説作者ともなり得べき資質ありき其の批評の眼識は最も犀利にして夙に其の
 妻の劇詩家的才能あるを認めしかば屢々勸めて脚本を作らしめんとせり。エワ
 ンス夫に勸められて遂に年來の神典を驅りて一篇の小説を作しぬ前にいへる“*Adams Burton*”
 はこれなり。夫妻はこの小説喝采の聲をあとにして再び獨逸に遊び
 第二の“*Scenes of Clerical Life*”を起稿しぬ此の著歸國の後脱稿し“*Adam Bede*”と題し
 て出版せらる。譯者の喝采前者に過ぎチャッケンス、スペインサルの如きも賞讃措く能
 はざりきといふ。一千八百六十年同じく第三篇“*The Mill on the Floss*”出づ而して
 エリオットの名聲全く定まり英國空前の散文的な女詩人として騷壇一人も之れを稱
 揚せざるものなきに至りぬ。翌年“*Silas Marner*”の作あり價值前年に譲らず同六
 十三年“*Romola*”成る文藝復興時代の伊太利の一話を材とせるものなり。これよ

り“*Felix Port, the Radical*”(一八六六)雜詩“*Spanish Gypsy*”“*Tubal*”等一八六八—七四)
 “*Middlemarch*”(一八七一)“*Daniel Deronda*”(一八七六)及び論文集“*Impression of Theo-*
phrastus Such”等の作あり。同七十八年其の夫リュネウス歿す。二年を経て女史ヂ
 ン、クロッスに嫁し同年十二月歿しき。一生の言行と書簡とは歿後其の夫の手にて
 輯録せられ題して“*Life and Letters*”といふ。

女史は一方に於て大に自由を尊びしと共に敬虔の念に富み剛毅なる丈夫魂と慈
 悲深き女性の情とを兼ね具へき。女史が朋友の驚きを顧みずして嫁夫リュネウス
 と婚せしが如き俠氣將たこの間より起りしものなりといふ。女史が著作につき
 て見んに。

女史が著作は頗る多し詩歌、論文、翻譯等其の冊數殆ど小説に匹敵す。然れども精
 しく其の質につきて見れば女史が詩歌はたゞ思辨力に富める同代人士の思想を
 歌へるに止まり其歌ひざま淺膚露骨にして殆ど詩歌的美趣なく時に辭句の妙な
 るものなきにあらねど所謂粗布に施せる色彩にして絹布の光澤なし。其の論亦
 要するに時の風潮の一波たるに過ぎざる概あり其の賞讀者に悦ばしむるにとい

まり未だ學者を益するに足らず。畢竟女史が眞價はその小説にあり一千八百六十年より同七十年に至るまで即ちサッカレー既に筆を絶ちて Dickens 未だ傑作を出ざりし間に於て英國小説壇中人意を強うするに足りしものはひとり女史ありしのみ。況んや Dickens の歿後に於てをや。「英國空前の女作家」といふも敢て溢美にあらざるなり。女史はそも如何なる著作を以て此の大名に副はんとせしか。

エリオットが小説を讀みて何人にも明かに了解せらるゝは此作者に二方面あることなり而して件の二方面を代表せる作を “Silas Marner” と “Romola” とす。第一女史はよくユーモアの眼を以て些末の人事を洞視し其の奇仄オグチチを描きて巧みに人情世相の微を穿てり。“Silas Marner” は *Silas Marner* に及ばず “Scenes of Clerical Life” の各篇は皆なく此の種の伎倆をあらはせり。此の伎倆たる蓋し女史が小説に不易の價値あらしむるものにして亦女史が他の一面と比するも一層健全にして精妙なるものなり。按ずるにこれ女史が不幸なる半世の長日月間靜かに人世の辛酸を味ひたる結果にして其の成功は女史が結構的創才のいみじかりしに因るといはんよ

りは寧ろ其の諷諧的觀察の精微なりしに因るといはんかた穩當の評なるべし。蓋し女史は創才に豊かなりしにあらず寧ろ科學若しくは準科學を好めりしなり此の科學癖は遂に女史をして第二の方面を作らしめき。女史が科學に偏する傾向は女史が “Silas Marner” をものせし後更に一層著くなり遂に特別の蘊蓄によりて “Romola” を作するに至りぬ女史の “Romola” をものして材を伊太利の文藝復興に取るや經營實に慘憺女史自らも我れ此の書の稿に著手せしときは妙齡の處女なりしも其の脱稿の際にはや白髮の嫗となりきといへり。女史が勞苦の大なりしを見るべし。センプペリー曰はく

こゝに至りて女史の小説は活物にあらず。天才の創造にあらすして研究の製作なればなり。快通の逸作にあらずして苦心の修練なればなり。吾なもはや觀察の成果にすらあらざればなり。

と。而して女史が此の研究の作は女史が近代英國を主題とするに及びて一層著なりぬ。女史が後期の作は明かに或る「目的」を標幟としてもものすることとなりたり。然らば女史が目的とは何ぞや。女史が所謂科學準科學とは何ぞ。

夫れ近世の科學は其の進歩の結果としてさながら人間の情を破棄し其の愉々快

々たる希望を絶滅せんとするものゝ如し。此の時に際し情を以て立たんとする人間は當さに如何してかこれに處すべき。所謂真理の迫害に堪へてよく其の生存を保たんとせば情は如何なる決心を以て如何なる地歩をか占むべき。これ女史が其の想像の才を驅りて自ら解釋を試みし問題にして此に於て女史は成るべく科學的知識を吸引し其の心中に科學を經とし感情と緯とせるものを織り成さんと欲しき寧ろ其の最高目的の爲めに科學を使用せんと欲しき。この最高目的とは何ぞや。佛人シェーレル曰はく「思想の自由を主張する心と共に信仰の敬虔を尊ぶ念は女史が心の二方面なりき」と。而して之を一貫せるものは唯一の良心にして實に倫理思想は女史にとりて第一義のものたり感情と學理とは寧ろ其の左右に過ぎずされば女史の科學を研究せしや主と倫理の方面に於てし一に倫理の目的として倫理のよく科學と調和し人情と調和したるものを得んとせんとせり。而して此の研究の結果として女史は「世界に和樂なくしてたゞ安心あり」といふ結論に達したり。曰はく

世には(少くも現今の如き世には)眞の和樂なるものなし若しこれありませばこれ其

の人の心の淺薄狹隘にして世界大の悲痛を感ずる能はざるが故の迷妄のつゝ。心の
大なるものは接觸するもの多し彼等は概ね悲痛に接觸す。彼れの處すへき唯一の
方法はたゞ自棄セルフ・サレンダーの安心のみ云々

こゝに於て女史は此の上の研究を無要とし或は寧ろ研究に堪へず其の所信に就きてこれを表白することを力めき。女史が後期の作は多くかくの如くして成りしものなり。

女史はかくの如く世を哀觀せりき而も厭世觀に陥りしにはあらず。人間は殆ど必然的に罪惡に傾くものなりかゝる故に毅然として罪惡に打克ち其の誘惑に堪ふる是れ即ち最高の徳にして最高の勇ヒーロイズムなりといふ是れやがて女史が終世の確信なりき。女史は常に此の思想を以て小説をもものせしなり。故に其の人物は多く缺點ある人物にして美德の標範たるは殆ど絶無也隨うてふと見れば女史が倫理上の主義と矛盾背馳せるが如く思はるゝもこれやがて女史の小説をして不朽ならしむる所以なり。女史は人間罪惡の必然なるを熟察し深くこれに同感し以て其の筆を執りしなり是に於て讀者は其の人物の缺點を知りて尙ほ其の愛すべき

を感じ時には以て人間世相の實態を見得たるが如き感となす。是れを倫理小説の泰斗たるリチャードソンに比せんに兩者共に小説に倫理的的目的を置く兩者共に英國的なり而も前者は自己の感想を作中の人物に注ぎて之を理想的ならしめ後者は作中の人物に自己を同化し自ら其の人となりて悲喜哀歎す。前者は主觀的といはれ後者は客觀的前者を教訓的といはれ後者は心理的なるべし而も其の倫理的なるに於ては一なり。リチャードソンとエリオットとをしてかくの如く異同せしめしものはもとより品性の相異にもよるべけれど一つは明かに時勢の異同すなはち變遷に歸せざるべからず。讀者の人世觀の未だ哲學的ならざる時代に於ける倫理小説はリチャードソンの教訓小説にしこ事足るべけれど讀者の人世觀の全く哲學的なる十九世紀に於ける倫理小説はエリオットの如き心理的のものならざるべからず。エリオット謂へらく今代の人士にはもはや教訓の必要なし自ら思辯すればなり且つや小説を以て教訓の奴となすは美術を賊するものと。是に於て女史は其の所觀の世相に従うて心理的之れを活寫し讀者をして自ら人間の何物たるを覺らしめ以て自ら處世安心の最良法を知らしめんと欲しき。是れ

リオリッドが倫理小説の特質にして亦た最近倫理説の特質なり。

女史の没後其の名聲は生前の勢ひに反動して頓に墜落し遂に諸批評家をして女史が晩年の哲理癖を酷評せしむるに至りしがよく好悪を離れてこれを觀れば女史が倫理小説はもとより意義なきものにあらずまた其の小説的伎倆の尋常ならざるは更に拒言を容れざるべきものなり。

(三) キングスレー

ウォーホルヂ、エリオット女史と同年に生れ之と同時代の小説壇に於て名聲相譲らざりしものをチャールズ、キングスレーとなす。風光畫の如きアブシアの州中にて最も明媚の一邑なる法教師の家に生れ和煦春の如き家庭に生ひ立ちし彼は嚴格にして變化なきミッドランドの山中に生れて夙に蕭殺たる秋霜に惱まされたりしエリオット女史と共に各其の境遇の特色を表せり。前者は和平流溢後者は森嚴精刻而も共に十九世紀後半の思想を代表す。

キングスレーは長じてロンドン及びケムブリッジの大學に入り優等の譽を得て卒業し而ちにハムブシアなるエブリースレーといふ處に宣教師となり一千八百四十

四年牧師長に進み、在職三十二年にして同七十五年に歿しき。是れより先きケムブリッジ大學に聘せられ、近世史の教授を擔當し、九年間この職を兼ねたりしが、小説家の眼孔を以て過去を觀察するが故に、彼の些末の事實を把へて因果纏綿の模様を述ぶること、義兄フルードにも譲らざりしが、彼の「概括的史眼」に至りては到底フルードの十が一にも及ばず、在職九年にして辭任し、一千八百六十九年チェスタルの法教師となり、同七十三年又エーストミンスタルに轉じ、竟に女皇陛下の師範に命ぜられき。彼れ嘗て西印度に航せしこと一回得る所少なからざりきといふ。

キングスレーは頗る多作、其の種類亦た甚だ多く、概ね劣作なし。始めて著作を公けにせしは一千八百四十四年にして題して“Village Sermons”といふ、平明流暢なる論文集なり。次ぎに韻語の作若干あり、一千八百四十八年“Saint's Tragedy”といふ悲劇をも、しきハンガリーのセント、エリザベスの事蹟を材とせるものなり、科介變化に富み、詞華麗を極む。翌年小説“Alt non Locke”“Tailor and Poet”の作なり、これより數年間に若干の詩篇をも、しき(イギリス)すれも匿名皆見るべし。

同五十八年“*Andromeda and other Poems*”をも、しき此の篇六歩格(ヘキサメーター)を用ひたる最妙

の詩篇と稱せらる。其の他の作にて名高きものを舉ぐれば“*The Last Buccaneer*”“*The Red King*”“*The Three Fishers*”“*The Sterlings*”等あり。さて彼れが本領たる小説を見るに、其の處女篇は一千八百四十九年に成りぬ、題して“*Alton Locke*”及び“*Yeast*”といふ。文牀結構共に圓熟せずして、時に尙生硬露骨の個處もあれど、一種靈活に氣あり、當時英國を聳動せし労働問題、民權擴張問題等を捉へて具象的にこれが解釋を與へたる點に於て、裕かに一家の風ありといふべし。是れより先きキングスレーは基督教社會派(クリスチャン・ソシヤリスト)に入りて、モーリス(Maurice)と相結ひ、短篇を草して新聞雜誌上盛んに其の主義を發表し、又“*Faser's Magazine*”の誌上に華麗の文章を以て文學上遊戯上其の他種々の方面より同じ主義を唱道せしが、遂に彼の社會主義を描ける第二の小説“*Hypatia*”をも、しき引き續一千八百五十五年に其の傑作“*Estward Ho!*”を出だしぬ。二年を経て“*Two Years Ago*”成る材をクリミア戦争に取れるもの也。最後の作を“*Hereward the Wake*”とす、一千八百六十六年に成れり。キングスレーに對する評論は今尙紛々たり。

美歌論文集等によりて發表せられ何れも多少の聲譽ありき。キングスレー等の社會改善に熱心なるや其の小説に累をなし粗雑なる議論癖は毎に其の筆に伴ふに至りぬ。其の議論たるや論理錯然、趣旨散漫、情あまりありて語隨はず而して他の攻撃に遇ふや憤激怒罵毫も假借する所無かりき。彼れが詩歌小説の如きも概ねこの目的を以て成れりともいふべし(ニウマンとの論争の如きはこの失敗の最も顯著なるものとす)。ドウデン曰はく。

キングスレーの一方に於て論客、説教家たりしことは其の詩人小説家たりし方面に一方ならぬ不利を興へたり。彼れはあらゆる争闘の爲めに靜穩なる創作たるを得ざりしなり。されば争闘はもろ人間の本性に屬す何ぞ獨りキングスレーを咎めん況んやキングスレーが名作は件の争闘の主題たる社會問題に對するキングスレーが意見の所産たるに於てをや。吾人はたゞ其の平明なる説明的に流れて美術の神秘を忘れ人世の隠微を歌ふ能はざりしを惜む。

而してこれを當時の風潮に徴すればキングスレーの此くの如きに至れる亦た止むを得ざりしものあるを知らん。實にカーライルもいへる如く所謂労働問題に直ちに吾人が未來の大問題に屬す。苟くも熱誠ある士にして一たび眞面目

にこれを研究せんか一步は一步と其の放棄しがたきを感じ來らん。蓋し労働問題は實際的に人世未來の大問題なり熱誠燃ゆるが如き詩人にしてこれを研究するは敢て異とすべきにあらざらんやあくまでも實際的なる十九世紀の英國詩人に於てをや。此の問題たるや單に下級労働者を煽動することを能事とせる一種の社會主義とは大に趣を異にせり。其の主導は彼のモリスにしてキングスレー(Thackeray)等これを扶補し一千八百四十九年を以て一盟社を建てにき。『基督教社會派』これなり。謂へらく人間は凡て上帝の兒孫なりよろしく基督を媒介として相結合すべし基督教の正教として奉ぜられん限りは彼の労働者も相結合一致すべし労働者も兄弟なり競争を停めて共働せよと。該派の所説は實に此の如き單純なるものにしてカーライルは是れ粗暴なる凡神教的大言と罵りたりしも其の所説の生命に至りては容易に奪ふべからざるものあり。基督教の經典はこゝに至りて愈々人間に密接し又人間の肉體と密接し陳腐の凡説と譏られしものも竟に一世の大問題となりぬ。實に當時英人中にても精神界スピリチュアルの人間にして普通社會の人間たるキングスレーの如きは無く普通社會の人間にして精神界の人

間たるキングスレーの如きはなかりしなり。

今委さにキングスレーが所説を評する餘地なければかくの如くにして成れる彼れが小説は明かに其の特質を現はし爲に多少の瑕疵を醸ししにも拘らず彼れが天才は小説中の風景性格結構等にあらはれ當代殆ど並ぶものなき地に達しぬ。

其の "Alton Locke" 及び "Hereward," 中の妙句は絶妙好辭と稱へられ就中前者のロンドン市中労働社會を措き又クムプリーヂの瀟洒なる風景を寫せるなどは爾後五十年間幾多の模倣者をして茫然筆を投ぜしむるに足りき。"Yeast" は其の劣作に屬すと雖もなほセンツベリーをして感情溢るゝが如く靈活の氣全篇に充實したる作にしてこの十分一の作だに尙ほ現今の小説界を動かすに足らんと激賞せしめたり。其の "Hypatia" の慘にして結構複雑なる "Two Years Ago" の妙句に富める "Hypatia" のパノラマ的なる昔人の稱して措かざる所也。而して Westward Ho! の如きは愛國の士氣を以て充實せる歴史小説にして著者が社會問題を離れたる小説的創才はよくこの篇にあらはれたり。

〔四〕 Anthony Trollope は第十九世紀後半に出でたる一派の小説家の泰斗なり母

はトロロープ女史(一七八〇—一八六三)とて "The Widow Barnaby" (一八三九) "Domestic Manners of the Americans" (一八三二)等の作を著して頗る文名あり。兄トマス・アトルフラス(一八一〇—)亦た歴史小説家にして盛んに諸種の雜誌に寄稿せり。アンソニーは此の間に生れて(一八一五)インチェスタル及びハーロウの學校にて教育せられ長じて郵便局の吏となり此の間小説の作甚だ多く讀者の喝采殆んど當代に冠たり。一千八百八十二年に歿しき。翌年其の『自傳』出版せられき。委さに其の作の由來結構等を發表せるを以て名あり。一生の作甚だ多く中には散逸せるも少からぬと其の傑作と稱せらるゝものは多く『パーセットシヤア叢書』のうちにあり即ち一千八百五十五年のものせし端物 "The Warden" 其の一生の名作 "Barchester Towers" 等より "Doctor Thorne" "Framley Parsonage" "The Small House at Allington" "The Lost Chronicle of Barset" 等に至るまで皆その中に收めらる。その他は "The Three Clerks" "Orley Farm" "Can You Forgive Her" 及び "Phineas Finn" 等皆一讀の價あり。

トロロープが小説は嚴にいへば彼れが宇宙人間につきて感得することの深かり

間たるキングスレーの如きはなかりしなり。
 今委さにキングスレーが所説を評する餘地なけれどかくの如くにして成れる彼
 れが小説は明かに其の特質を現はし爲に多少の瑕疵を醸し、にも拘らず彼れが
 天才は小説中の風景性格結構等にあらはれ當代殆ど並ぶものなき地に達しぬ。
 其の "Alton Locke" 及び "Hereward" 中の妙句は絶妙好辭と稱へられ就中前者の
 ロンドン市中労働社會を措き又ケムブリッジの瀟洒なる風景を寫せるなどは爾後
 五十年間幾多の模倣者をして茫然筆を投せしむるに足りき。"Yeast" は其の劣
 作に屬すと雖もなほセンツベリをして感情溢るゝが如く靈活の氣全篇に充實
 したる作にしてこの十分一の作だに尙ほ現今の小説界を動かすに足らんと激賞
 せしめたり。其の "Hypatia" の慘にして結構複雑なる "Two Years Ago" の妙句に
 富める "Hypatia" のパノラマ的なる皆人の稱して措かざる所也。而して West
 ward Hol の如きは愛國の士氣を以て充實せる歴史小説にして著者が社會問題
 を離れたる小説的創才はよくこの篇にあらはれたり。

[四] Anthony Trollope は第十九世紀後半に出でたる一派の小説家の泰斗なり母

はトロロップ女史(一七八〇—一八六三)とて "The Widow Barnaby" (一八三九)
 "Domestic Manners of the Americans" (一八三二)等の作を著して頗る文名あり。兄トマ
 ス、アンドルフアス(一八一〇—)亦た歴史小説家にして盛んに諸種の雜誌に寄稿せり。
 アンソニーは此の間に生れて(一八一五)インチェスタル及びハーロウの學校にて
 教育せられ長じて郵便局の吏となり此の間小説の作甚だ多く讀者の喝采殆んど
 當代に冠たり。一千八百八十二年に歿しき。翌年其の『自傳』出版せられき。委さ
 に其の作の由來結構等を發表せるを以て名あり。一生の作甚だ多く中には散逸
 せるも少からねど其の傑作と稱せらるゝものは多く「パーセットシヤア叢書」のう
 ちにあり即ち一千八百五十五年のものせし端物 "The Warden" 其の一生の名作
 "Barchester Towers" 等あり "Doctor Thorne" "Framley Parsonage" "The Small House at
 Allington" "The Lost Chronicle of Basset" 等に至るまで皆その中に收めらる。其の他
 には "The Three Clerks" "Orley Farm" "Can You Forgive Her" 及び "Phineas Finn" 等
 皆一讀の價あり。

トロロップが小説は嚴にいへば彼れが宇宙人間につきて感得することの深かり

しが爲めに成りしものにあらずで寧ろ彼れが殊なる境遇によりて諸種の人物に接して其の外部の動作につきてこれを直寫したるものなり。是れ所謂寫實小説の一派にして毫も理想の分子を含まざる純粹の寫真小説なり。此の種の小説や如何に上乘の位置に達するもなほ宇宙人間の真相と對すれば間接若しくは二重間接のものなるに過ぎず、直接に宇宙人間の眞意を曉りて之れを描くものに比すれば文學的價值尙かに劣等なりといはざるべからず。宜なり其の世に行はるゝもたゞ一時の喝采を博するに止まり五年十年の後に至れば讀者また之れを顧みるなきに至るや。

〔五〕 チャールス、リード 千八百十四年オックスフォードシヨアに生れき。幼時家庭にて教育を受け其の後は全く獨學にて遂にオックスフォード、マクダレン大學の校友に選ばれ同四十二年には法官となりしが其の始めて筆を執りしは同五十年の頃にして劇詩一篇をもつしき。これより始終脚本の作ありしが成功の作無し。かくて同五十二年始めて“Peg Woffington”といふ小説をもつし後更に十餘篇を作す同八十四年没しき。

リードは頓智滑稽に富み“Peg Woffington” “Christie Johnston” “Hard Cash” “Griffith Grant” “Put Yourself in his Place” 等の作皆談話百出能く人の頤を解く然れども往々にして好悪偏局し褒貶宜を得ざりしかば時に讀者をして眉を蹙めしむるものあり。“Never too Late to Mend” (一八五六) “The Cloister and the Hearth” (一八六一)などの如きは舊教信徒者流の激賞して措かざる所也。『雜報的小説家』の名ありき些少の事實を種として叫嗟の間に能く其詩趣を傳へたればなるべし。抒情詩にも拙からず稍々ローマンチック風の極端に流れたる趣あれど亦た流石に味ふに足る。但し近世詩人の常具たる批評的眼光の微々たりしが爲に主題の高下を選擇するに拙く隨うて可惜狂才も往々にして其の用途を誤りたり。

〔六〕 ヘンリー、キングスレー チャールス、キングスレーの弟にして名聲一時は阿兄をも凌がんとせりき。感想はやゝ阿兄よりも微弱なる所あるも諷諧の力は阿兄に優りたり。要するに作者としての性質は阿兄よりも健全なりき。惜むらくは天壽ゆたかならざりしのみか多くは生活の爲めに筆を執りしこと多かりしかば十分に脚足を伸ばすに至らざりき。一千八百三十年に生れロンドンなるキング

スコッチ及びオックスフォードなるウィースタルコレッジといふ大學にて教育せられしが中ごろ退學して濠洲に移りかしこに住すること五年、一千八百五十九年故郷に帰り彼の地の物語を小説に綴りて“Geoffrey Hamlyn”といふ名篇をものしき。二年後の作“Ravenshoe”と共に一生の二傑作と稱せらるゝ作なり。其の後尙第二の濠洲小説“The Hilliards and the Burtons”及び其の他二三の作あり。一千八百七十六年に歿しき。其の作大概は腹案粗滯にして首尾相應せず支離滅裂に了れるものに乏しからねど兄チャールズに同じく光景動作及び性格を寫すことに長じ且つ十九世紀作者たるの特質あれば少くも阿兄のに次ぐ作として何れも再讀の價あり。

〔七〕 スチーヴンソン Robert Louis Balfour Stevenson (通稱 Robert Louis) は第十九世期の後期に出で、小説に於けるローマンチック風の新派を創始せし人なり。一千八百五十年に生れき。父は燈臺の吏にしてスチーヴンソンは其の技師なりき。エヂムバラ大學を卒業せし後は代言人をも兼ねたりしが二職共に其の性質に適せざりしかば齡三十歳の頃より文筆に従事し『ホルンビル雜誌』に數篇の論文を掲

げ傍ら『ロンドン』の爲めに小話をも綴りき。これより引續き“An Inland Voyage”(一八七八)“Travels with a Donkey in the Cevennes”(一七七九)『ホルンビル論文集』“Virginibus Puerisque”(一八八一)“Familiar Studies of Men and Books”等の作あり。而して彼れが名聲の漸く著はれしは彼の有名なる“Treasure Island”を著し、後にあり。此の作は一千八百八十二年に成りにき青年の讀み物としてはカピテン、マリヤットの作以來第一に位し而して文學的價値は尙かにマリヤットを凌ぎたり。かくて後更に一轉して神仙譚を趣向し奇想天外より落つるの妙作 “New Arabian Nights”をもものし次いで同種の“Prince Otto”(一八八五)“The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Pyde”(一八八六)“Kidnapped”(一八八六)“The Black Arrow”(一八八八)“The Master of Ballantrae”(一八八九)“Catriona”(一八九三)等を作しき。中にも“The Black Arrow”はヨオシランカマタル二家の奇話を本としてもせる作最もよく其の殊才を示せり。“Catriona”これに次ぐ。一千八百九十四年病を得て歿しき。其の作小説の他に“Child's Garden of Verse”(一八八五)“Underwoods”(一八八七)“Ballads”(一八九一)等の韻辭あり。

スチーヴンソンの論文は流石に一種獨得の着眼の頗る見るべきものなきにあらねど論旨多くは散漫に失して堅實を欠けり。されば已れもまた論文の長所たるざるを曉り遂に専ら物語を作するに至りしが其の神仙譚は多少の缺點あるにも拘らず尙ほ十九世紀の奇什として長く後昆に傳ふるに足るべし。彼れは其の話説の文章を修得せしに先ち大に内外の物語を玩味し甲に倣ひ乙に摸し頗る經營する所ありしが竟に一家の牀を定め讀者をして一たび彼れが作を繙けばまた應接に暇なきの感あらしむ。其のあまりに誇大に失し形容のわざとらしきは稍と厭ふべしと雖もこはスコット以下物語作者の通弊ともいふべきものなれば必しも咎むるに足らざらんか。只惜むべきは女性を描くに拙なることなり宮媛や處女や妖婆や大抵は活動せずされば篇中に女性の多きもの程兎角に興味の索然たるを感ぜしむ。例によりてこの時代の小作家を擧ぐる下の如し。

Wilkie Collins (1824-1889) “The Dead Secret” “The Woman in White” “No Name” “Armadillo” (1857-66) “The Moonstone” “Cruise upon” “Wheels” 等あり。

George Henry Lawrence (1827-1879) “Guy Livingston” “Sword and Gown” “Barren Honour” “Sons Meret” 等
 Mrs. Gaskell (1810-18) “Mary Barton” (1832) “Cranford” 等
 Dinah Maria Mulock (1826-1888) “John Halifax” “Gentleman” 等
 Robert Surtess (?-1864) “Pickwick” 等
 Major Wdite-Melville (1821-1878) “Holmly House” “Sarchedon Gladiators” 等
 Francis Edward Smedley (1818-1864) “Frank Fairleigh” (1850) “Lewis Arundel” (1852) “Harry Coverdale’s Courtship” (1854) 等

第二十章 最近評論壇

定期出版物の興起と其の記者の特質とに就いては既に前章に其の要を示したり更に本章に述べんと欲する所は件の定期出版物を牙營として最近の評論壇に覇權を握りし二三論客の特質に關してなり。然れども第十九世紀後半の文學界は他の點に於ても前半のと其の趣きを異にするが如く定期出版物もまた従來のとは異なる所あれば批評界の變遷を叙するにさきだちて定期出版物の若干種につきて其の變遷の跡を點檢するの要あり。

當時とても舊地方雜誌又は月刊雜誌類が悉く廢刊したるにはあらず『エヂムバラ
 評論』及び『ブラックフィールド雜誌』の如きは十九世紀の中ごろまでは盛んにショ
 ルヂ、エリオットの小説、キングスレー及びフルードの論文などを掲げて紙面の光彩
 陸離たる者ありきされど新をめで舊を厭ふは讀書社會のならひなり彼等は其の
 記事の質の如何は置き只管題號の新を喜び体裁の奇を求めしかばこゝに自ら機
 運一轉して新刊諸雜誌の續出を見るに至りき。もとよりこれ等多數の片々たる
 もの、過半は所謂朝起暮廢の『三號雜誌』たりきと雖も此の間また自ら多小の改善
 と創意との加はれるものなきにあらずされば全躰よりいへば兎に角に前者より
 は一段の進歩をなせしと共に一方に於ては印刷輸送等の便利も加はり隨うて紙
 面も擴張せられ價額も低減せられ讀者の數も増し遂には今日の如き狀況に達し
 たり。此の間に於ける變遷の跡を尋ねれば畧、下の三段をなすべし。第一週刊六
 ペンニー新聞の流行。第二月刊雜誌の紙面擴張。第三新月刊評論の發行。週刊
 新聞の中最も著名なるを“Household Words”『家庭新語』及び“Saturday Review”
 『土曜日評論』とす。

『ハウスホルドワードズ』は一千八百五十年の發刊にしてヂッケンス主筆なり。大
 躰に於て『ブラックウッド』又は『ロンドン』と体裁を等うしたり言はゞ其の發行の回數
 を増して價額を減じ論說の程度を低うして通俗的となしさて政治上の評論を除
 き去りたるに過ぎざるものとも見るべし。主筆ヂッケンスは絶えず筆を執り別に
 パルソ、リゾルなどいふ作家連の寄稿を掲げ其の餘は自家門下の青年文士を
 して之れに當らしめき。其のうち非ルキ、コリンス最も名ありき。件の週報の
 長所は議論の通俗にして雜報文の輕快洒落なるにありき。但し中には『ロンドン』
 及び『ブラックウッド』掛持ちにて勤むる記者も交りたることなれば多少件の二雜誌
 の特質も加はりたり隨ひて其の躰裁も全く獨創といふべからず且つ美術文學の
 論の如きはもと二三の學者に悦ばれんよりは寧ろ多數の好尚を高うせんことを
 所志とせしかば一世の評論壇を支配するには足らざりしもこれによりて多少文
 學的思想を社會に布及するの功ありしは事實なり。これよりこの週報に摸して
 成りしもの夥多出づるに至りしが特に取りいでいふに足らず。

『サタルデーレフ』は主義特質共に前者と異なり小説の如きは之れを掲載する

こといと稀なり。この種の週報にして著はれしもの既に二種ありき一は『エキザ
ミナル』と題しハンツ、フォンランク、フォルスター及びミントー等相續きて其の主筆
となり當世紀の三分の二に亘りて紙面の光彩曾て衰へず。一は『スペクテーター』
と稱し Rentoul (レントゥル)の主筆となりし以來盛價はじめて定まり持續して今
日に至りぬ。兩者共に改進黨を以て立ちしが『サタルデーレギウ』に至りては其
の初めは貴族主義を以てあらはれいつしか Independent Tory (獨立トリー)即ち
Liberal-Conservative (自由的保守主義)を主張するに至りぬ。されば其の紙面に於て
も彼の改進黨及び Radical Party (急進黨)の名士が寄稿を歓迎せしと共にオックスフォ
ルド及びケムブリッジ二大學の俊才に論說の寄稿を請ひて古文學の復興を鼓吹せ
り。而してこれと共に彼の當世紀前半に於ける新聞紙の通弊ともいふべき個人
の性行を褒貶することを避け其の主義持説に付いてのみ堂々論難する方針を取
りしかば其の論說は少なくも公平真面目の文字として一世の注目する所となり
特に文學上の評論の如きは頗る勢力あるものとなりぬ。

『ハウスホルドナルズ』と『サマルデーレギウ』とにつぎて世に出でしを “The

Cornhill Magazine” 及び “Macmillan's Magazine” とす。概して『ブラックウッド』『フレイ
ザル』などと異なる所も見えねど價額の半減せると寄稿に知名の士の多くなれる
とを以て見れば當時新聞雜誌業の如何に日進の勢ありしかを察することを得ん。
『ユルンホル雑誌』はサッカレーの發行にかゝりマッシュウ、アノールド之れを扶け『マク
ミラン』はキングスレー兄弟の寄書を得て其の紙面の飾とせりき。

雑誌(マガジン)流行の餘勢は一轉して『評論』の興隆となりぬ。但し『評論雜誌』の興
隆は政治思想及び文學思想の廣く社會に布及せりし結果なりと見るべきか或は
單に當時佛國に流行せし “Revue des Deux Mondes” の模倣と見るべきかは尙學者間
の疑問に屬すされど兎に角に其の最初にあらはれし評論雜誌 “Fortnightly” 『二
週評論』が徹頭徹尾件の佛國の評論雜誌に倣ひたりし者なるは事實也。『二週評
論』に次ぎて出でし者を “Contemporary” 『當代評論』及び “Nineteenth Century” 『第
十九世紀』とす。何れも謹嚴周密を以て知られて今尙持續せる評論批判の雜誌な
り小説の如きは絶えて掲載することなし。

これ等新聞雜誌の一々につぎては其の特質を叙述するの適なしましてや日刊の

新聞紙に至りては晨に午に夕に其の數幾千萬、秋の木の葉の紛々として舞ふが如く滿庭の碎錦は到底筆翰の掃ひ盡し得る所にあらず。さればこゝには週刊以上のものに就きて只最も著名なるもの一二のみを擧げ置かん。週刊の雜誌にて最も名高きは“*Albion*”にて刊行七十年の長きに及べり“*Academy*”これに次ぎて

出で別様の趣味を以て名聲を前者と争へり。此等の雜誌にて文學上の評論として一時盛んに流行せしは古人の作を取りて評騭することにしてこれと共に古人の詩選を取りて其の特質を論ずること盛なりき。さてこれ等の雜誌新聞紙にたづさはりし批評家中其の著名なるものを擧ぐれば

ジョン・ホルソン、クロッカー及びエブラハム、ヘーワードは初期の地方雜誌の名家にしてジョーエル、ブリムリー、ヘンリ、ランカスター、タルタル、バショット等は第二期の論客なり中にもブリムリーはテニソンが初期の作によりて早くも其の異材たるを觀破しこれを世人に紹介せし烟眼の解釋者にしてランカスターのサッカレーに於ける亦たこれに同じ。バショットは多能多才其の評論は政治經濟文學宗教に亘りて餘す所なし中にも復古主義とローマンス主義との中間に脚を立て、仔細にチ

ルツナルスが詩能を論じたる一篇の如きは最も名あり。其の他の女士にては博士ジョン・ラッタン (“*Horace's Beatrix*”の著者) デーラムス・ハンキー (“*A Course of English Literature*”『英文學捷徑』の著者) 及びアーサル、ヘルプス等皆名あり。ヘルプス(一八一三—一七五)は政事界と文學界とに跨り『西領亞米利加論』を以て一方に知られ“*Friends in Council*”を以て他方に名あり後者は論理學上及び審美學上の評論文を集めたるものなり説は道德と哲學とに亘りて文章も巧に傍證頗る廣し。

マッシュ、アーノルド 其の一生の經歷と詩人としての特質とは前章既に畧説せり。彼の章にても少しく言ひおきつる如く彼れが世に現はれしは先づ韻語の作者としてなり散文家評論家として出世せしはこれより二十年の後即ち一千八百六十年の前後なり。然れども其の批評の論文の初めて世に出でしやオックスフォード大學の哲學教授が所論として直ちに世人の注目推重する所となりき。此の時諸雜誌の爲めにものせし評論の文は同六十五年一冊子となりて出版せられき。有名なる“*Essays in Criticism*”『批評論文集』是れなり收むる所九篇何れも文學に關するものなれども所論博、大、科學、宗教、美術、音樂等に亘り前人未言の卓説頗る多し。

アーノルドは詩人としては極めて小心翼々の人にして改削又改削左顧右眄一語苟くもせず寧ろ用意のあまり周到なるに失せしが如き觀ありしが論客としてのアーノルドは殆ど別人の如く直往獨斷一氣湖山を吞吐するの概あり。されば着眼は甚だ奇警にして人をして發明する所多からしむと雖も其のあまりに獨斷的なるや所謂獨り合點に流れて時に論理の順道を逸したるが如き觀あり。

アーノルドが評論の有名なるものは以上の外に“Culture and Anarchy”“God and the Bible”“St. Paul and Protestantism”“Literature and Dogma”等あり。行文峭健にして奇氣横溢せり然れども此等の殊なる題目に對してさせる深き素養なき著者が咄嗟の感想を録したるものに外ならざるが爲に讀者が一時の賞翫を買ふを得べきも未だ以て學者を益するに足らず。アーノルドは晩年に至りて頻りに人物の評傳を試み遠くはジョンソンが『詩人傳』中の數人近くはバイロン、シェリー、ワルツナルス等を論評せり(中にもワルツナルス論最も名あり)。推想精刻詩人文客の胸臆に入入すること意の如く眼光犀利仔細に作の眞髓と風格とを照破して餘す所なし。殊に行文の勁拔にして諷諒の滑脱なるは共に一世に冠たり。

ラスキン

アーノルドと同時代の散文壇に馳騁して相讓らざりし文豪をジョン、ラスキンと云す。一千八百十九年に生れき。父は酒類の賣買を業とし商務の爲め屢大陸に旅行せりしがジョン亦た常に隨伴し隨つて幼時より見聞を廣うし殊に各國の山河自然の風光及び建築彫刻繪畫音樂等に精通するに至りき。こは何れも後年彼れが批評の事業に少からぬ幫助を與へしものなり。ラスキンはかく幼時を處々の異郷にて送りしが爲め規律ある教育を全うする能はず小學校をも履まずしてオックスフォードなる基督教會の大學校にて教育せられ一千八百四十二年に業を卒へき。ラスキン少にして文才あり在校中嘗て募に應じて“Salsette and Elephanta”と云ふ一篇の詩を作して賞を得たりき。後ち美術を以て其の身を立てんと欲しルーベンス及びレムブラントに私淑して畫を學びき而も天稟の才技はむしろ文學に在りしかば常に論評の試文を絶つことなく遂に卒業論文として彼の有名なる“Modern Painters”『近代畫家』の第一巻を著しき時に齡僅かに二十四なりき。此の篇は翌四十三年に至りて出版せられ後ち三年にして第二巻成り同六十年に至

りて完結せり總べて五卷なり。終りの三卷は故ありて匆卒に筆を執りしが爲めに前の二卷に比すれば經營足らざるが如く行文また少しく瑰麗を缺けり。其のはじめ此の書の第一卷の公にせられしや文學界一時大に振蕩せり蓋し其の論の斬新なると其の行文の銳利巧妙なるどが一方に於ては激しき反對論を喚び起し一方に於ては夥多の歎美者を生ぜしなり。一千八百六十年より同六十七年までの間に彼れは該著を修正して再版を發兌せり前説を改削したる所いと多しといふ。此の間ラスキンは別に建築論を草して陸續出版しき。"Seven Lamps of Architecture" (一八四九)及び"Stones of Venice" (一八五一—五三)是れ也。ラスキンは彼のラファエル以前の畫風を主唱するプリ、ラファエル派の柱石にして一千八百五十年より同六十年に至るの間件の美術の典雅入神の致あるを説き熱心に南歐美術の趣味を英國に輸入せんといふ。"Architecture and Painting" (一八五四)及び"Political Economy of Art" (一八五八)は當時の講説の草稿なり。其の引き續き"Unto the Last" (1861) "Minerva Pulveris" (1862) "Sesame and Lilies" (1865) "The Cestus of Aglain" (1865) "The Ethics of the Dust" (1866) "The Crown of Wild Olive" (1866) "Time

and Tide by Wear and Tyne" (1867) "The Queen of the Air" (1869) "St. Mark's Best" "Pre tria" (1885)等の著あり。一千八百七十年オックスフォード大學の美術教授に選ばれ同七十六年に再選せられ同八十年に三選せられ同八十四年病の爲に辭任しき。其の始めて美術教授となりしや聽講者堂に溢れて如何ともすること能はざりしかば止むを得ず同じ講説を二回づゝ物して纔かにこれを支へきといふ。『近代畫家』は主として近代の英國派の風景畫を辯護したるものにして風景畫に於ては今人は却りて古人に優れりといふ説を主張したるものなり。

ラスキンの著を読む者の著く感ずるは此の著者に二つの方面あること是れなり。其の一つは詩人たる方面にして他の一つは批評家美學家たるの方面なり。(彼れ又社會改革者としても多少思索する所ありしかどこゝに是れを略す)ラスキンは著作は常に件の二方面より生れいで、美術の趣味と美の山來を世俗に傳ふるの効果を有したり即ち自然を觀察するの新眼光を廣く世人に授けたるなり。而して其の影響は決して繪畫社會にのみ止まらずして文學上にも社交上にも殆ど繪の何たるを知らざる社會にだに及びたり。蘇人ヒーター、ペーンは嘗てラスキ

りて完結せり總べて五卷なり。終りの三卷は故ありて匆卒に筆を執りしが爲めに前の二卷に比すれば經營足らざるが如く行文また少しく瑰麗を缺けり。其のはじめ此の書の第一卷の公にせられしや文學界一時大に振蕩せり蓋し其の論の斬新なるも其の行文の鋭利巧妙なるも一方に於ては激しき反對論を喚び起し一方に於ては夥多の歎美者を生ぜしなり。一千八百六十年より同六十七年までの間に彼れは該著を修正して再版を發兌せり前説を改剛したる所いと多しといふ。此の間ラスキンは別に建築論を草して陸續出版しき。"Seven Lamps of Architecture" (一八四九) 及び "Stones of Venice" (一八五一—五三) 是れ也。ラスキンは彼のラファエル以前の畫風を主唱するフリラファエル派の柱石にして一千八百五十年より同六十年に至るの間件の美術の典雅入神の致あるを説き熱心に南歐美術の趣味を英國に輸入せんと力めき。"Architecture and Painting" (一八五四) 及び "Political Economy of Art" (一八五八) は當時の講説の草稿なり。其の引き續き "Unto the Last" (1861) "Munera Pulveris" (1862) "Sesame and Lilies" (1865) "The Cestus of Aglain" (1865) "The Ethics of the Dust" (1866) "The Crown of Wild Olive" (1866) "Time

and Tide by Wear and Tyne" (1867) "The Queen of the Air" (1869) "St. Mark's Best" "Prae tria" (1885) 等の著あり。一千八百七十年オックスフォード大學の美術教授に選ばれ同七十六年に再選せられ同八十年に三選せられ同八十四年病の爲に辭任しき。其の始めて美術教授となりしや聽講者堂に溢れて如何ともすること能はざりしかば止むを得ず同じ講説を二回づゝ物して纔かにこれを支へきといふ。『近代畫家』は主として近代の英國派の風景畫を辯護したるものにして風景畫に於ては今人は却りて古人に優れりといふ説を主張したるものなり。

ラスキンの著を讀む者の著く感するは此の著者に二つの方面あること是れなり。其の一つは詩人たる方面にして他の一つは批評家美學家たるの方面なり。(彼れ又社會改革者としても多少思索する所ありしかどこゝに是れを略す)。ラスキンの著作は常に件の二方面より生れいで、美術の趣味と美の山來を世俗に傳ふるの効果を有したり即ち自然を觀察するの新眼光を廣く世人に授けたるなり。而して其の影響は決して繪畫社會にのみ止まらずして文學上にも社交上にも殆ど繪の何たるを知らざる社會に及びたり。蘇人ヒータータル、ペーンは嘗てラスキ

ンを評して曰はく

夫れ自然の美を感受する卓越せる力を賦與せられ自然の眞を認識する卓越せる力を有する者は山岳にも聲を與へ河流にも音楽を附す。彼れ海をなかれむば其の海立ちどころに一しほ長閑に美しきものさなり彼れ雲をながむれば其の雲忽ち一しほきらしく輝きわたる。彼れは神秘に奉仕する神官自然の慈恵を配分するものなり而して人はかゝる人を詩人と呼ぶ。ラスキンの如きは斯くして造化の眞趣味を解釋して治く其の豊かなる恩恵を人間に傳へたる二三の名譽ある俊傑の班に列す。彼れは美妙の覺力ある聲を以て決して交易せざれども常に毎に斬新なる又已に老いたれども尙塔もすがれす且つそこなはれざる自然の繪畫に關して語りたり。蓋し自然の美たるや諸の美術の承認する所又諸の美術の原因する所なれど其の吾人の眉間に在るや幼少の時より不斷なれば吾人往々にして輕々しく其の美しさを看過せんさす。彼れ吾人に憶ひ起さしむらくホーマルの時代に等しく色薇花なす曙の色は今も尙曉毎に新しく珍しき笑を有す。又曰はく朝ぼらけが大海原に添うて進めゆくや海原の水の色は今も尙常に黄金色と靑藍色との新しき刺繍を以て盛飾せらる。彼れは又何人も得争ふまじき麗を擧げて示すらく眞に自然美を愛するん者は清水の噴き出づるあたり若葉の繁れるほさりにて陽春の來れるに遭遇せば常に未曾見の美を認めざるを得し。ラスキンの聲に呼び起さるゝや吾人はた忽然と宇宙の美と大さに関する新意識を感ず。宇宙の何たるかを更に明かに思念し如何に宇宙をながむべきかを知る云々

アイリップ、ギルバート、ハマルトン亦九曰はく

我が英國最近の言術家にて其のいみじき者を韻語の詩人中に求めんかテニソンは蓋し第一に位しシエリーこれに次ぎバイロン、スコット、ナルツナルス及びキーツまたこれに次ぐ。而してこれを散文の作家に求むるに至りては吾人はラスキンを以て唯一人さなきべからず(中略)ラスキンが散文を以て肥叙論述をなすの技はあらゆる方面に於て驚歎するに堪へたり。

と。ペイントハマルトンとは共にラスキンが詩人的方面を贊せるものなり。此れ等の贊評を以て多少溢美の傾きありとするも英國の散文壇の殊に寥々たる時に方りて能く此の評を領せんもの他に殆ど其の人なきは明かなり。以下少しく批評家美學家としての彼れをうかゞはん。

ラスキンが美術に關する批評の特質ともなり兼ねて其の重なる價值ともなれるは其の美術論以外に出で、人生論に及ぶ所にあり。換言すれば一個の無上なる

範疇の裡に倫理的、社会的、と美術的、とを結合する所實に彼れが審美論の長處にしてまた其の短處なり。ラスキンが美術の職分なりとして且つ其効用なりとして證說せる所は極めて高尚なり。彼れは美術の批評家たると同時に道德論者たり彼れは美術品を品階するや多少倫理的問題に干渉し人間の義務に説き及ばざることなし。所詮彼れは美術を以て單に道義に關するものたるにどいめずして神聖なるものとし又道義を以て當り善且つ眞なるものとのみせずして更に美なるものとせり。エルノン、リーといふ匿名にて嘗てラスキンの美論を批評せしものあり曰はく「ラスキンは徳義と美術とを相關係せしめて双方を神聖ならしめんと欲し却りて双方を毀ひ了んぬ。徳義はこれが爲めに荒廢たるものとなり美術はこれが爲めに陋劣なるものとなりぬ」と。恐らくは酷評ならん。

今こゝにラスキンが美論を詳説する能はずたゞ其の所説の要旨を紹介せん。彼れは主張すらく「圓滿に美なるものゝ中には圓滿に善なるもの存す。かるが故に人若し眞に美なるものを知りて脱我の感情を以て深くそを愛することを得ば以て私慾の侵入を防ぎ其の生活を潔うするに庶幾からん。夫れ善と美とは一なら

ずして相背けりされば其の根柢を探れば相親和すべき性質を具し相契合する所あり。然らば何故に人はこの缺陷多き人間界にありて美の研究に我が一生を委ねんとはするぞ。曰はく他なし道義を重んずればこそ美を研究せざるを得ざるなれ。蓋し道義をして愛重すべく若しくは鞏固ならしめんとせば當り美を知るを以て足れりとせずしてそを研究し且つ愛好せざるべらず。云々

固よりラスキンが美術上の判断は悉く正確なるものにあらず然れども眼を轉じて在來英國美論の経歴を一瞥せんか古くはバルク、アダム、スミス、アリソン等ありて多少の論なきにあらねど概して蕪雜淺薄當時の詩歌小説劇詩等の作品に對しては大に遜色あり近くはハヅリット、ハートリー、コールリッチ、チャールズラム等に至りて其の考究や、深く或は凄婉或は優婉或は滑稽等の上に於て詩歌の妙趣を論じ其の神韻を説くところありしが論の根本的に天地人の本體に亘り絶對的に美術の本領を定め其の眞價を論ずるに至れば何れも朦朧模糊の中にあるを免れず。

吾人がラスキンの説を讀みて首肯し得ざる點は屢これあるべきも兎に角に其の自然の精神を解釋し人間と自然との間の契合を論じあらゆる高尚なる美術的作

物より來たる靈妙なる聲を解釋し私欲を破し我慢を難ずる條に至りては其の深さと廣さとの點に於て英國過去の學者中に其の右に出づるもの稀なるのみならず廣くこれを海外に見るも前人の未だ言はざりし卓見少からざるを覺ゆ。

されどもラスキンが美論はもとより系統の整然たるのみにあらず否其の所見は往々にして前後矛盾せり。彼れみづからも常にこれを自覺しながら尙且つ安然たりしものゝ如し。彼れ曰はく

凡そ重要な事柄は概して三面四面又は多々面を有す而して件の多面體の周邊を一歩づゝ取調ぶることは頑なる人々にせりてはいさづらき業なるべし。予にせりては何事にもあれそれに関する既を越くも三度ばかり案トかへたる後にあらざれば妥當なりと安する能はず。

と。彼れは彼の靈妙不可思議にして無數の方面を有せる美といふ怪物に對して果して幾回の考察をか遂げたりし知るべからず。彼れが定義は到底曖昧にして捕捉し難きものなり。加之其の用語例頗る濫りなりき。

要するにラスキンが所説は嚴正なる最近の科學的眼光に照せば條理紛雜見るに

堪へざるものなりと雖も其の美術と宗教とを以て相離るべからざる姉妹なりとし兩者に關する真正の領會の孤立しては得難かるべき由を述べたる一段の精神に至りては一二學者の論難を以て容易に覆すべからざるものあり。英國に於ける空前の美論家世界に於ける錚々たる善美一致論者として其の地位は今尙確固たるものありといふべきなり。

ジョン、リチャード、デンプリース、アーノルド、ラスキン等に比すれば品位も所説も共に尙かの下級にあるも尙を批評壇に於て若干月日の間一種の異彩を放てりし者をジョン、リチャード、デンプリースとす。一千八百四十八年に生れ十八歳にして新聞事業に従事し「North vills Herald」といふ雜誌に寄書家たりしこと十年餘りさて後ロンドンに上り同七十八年に「The Game-Keeper at Home」と題する小品文集を著しき。此の書は多數の讀者を得る能はざりしかど一たび讀みし者の間には稱賛の聲低からざりき。さて同種の作若干をものせし後轉じて半ば哲學の性質を帯びたる論文を著し、が其の著は常に冷遇を受け數奇不平の間に病を得てロンドンを去り一千八百八十七年齡僅かに三十九にして歿しぬ。彼が名聲は忽ち其の

訃と共に各所に喧傳し久しく塵底に埋葬せられたりし著書は今や定價の四五倍を以て數日間に賣り切れとなり諸種の新聞雜誌は争ひて其の文牒を模倣するに及びたり。かくの如き一時のチマプリー熱は忽ちにして冷却し今や其の著書は空しく覆醬の用に供せらるゝに至れり。蓋しチマプリーの詩人的性質はナルズナルスよりは一層精微にして其の世界觀の哲學的なる亦チナルズナルスに過ぎ其の華麗なる散文を以し且つ論じ且つ歌ふや其の成功せるものに至れば頗る見るべきものありと雖もこれを以て彼のラスキンの妙辭に比すれば彼れは瓊葩綉葉名花是れは名なく實なき枯木のかへり咲きに過ぎず。宜べなり其のラスキンを相并びて多く風騷の客を得る能はざりしや。然れどもチマプリーも亦チ一介の詞才なり其の派の論説と文牒とは饒かに一派をなしキルベルト、ホワイト及びグレイの如き亦チこれに屬したりしなり。アーノルドとラスキンは兎に角に近世英文壇の泰斗にして文藝批評の方法に於て其の影を仰げるもの現に頗る多しと雖も今こゝに細説せずたゞ就中最も著明なる一二人を畧説して止まん。

ナルタル、ホレーショール、ペーターナル一千八百三十九年に生れき。オックスフォードの校友に選ばれ終生大學に在りて力を盡しき。處女篇を“Studies in History of Renaissance”となす。一千八百七十三年出版せられき。主題の面白きと体裁の新しきと文致の巧なるとによりて大に讀書界に注目せられき。其の文章の華やかにして詩的なる所は或はラスキンにも過ぎたるへし。後ち“Marius the Epicurean” “Imaginary Portraits” “Appreciations”等の著あり何れも見るべし。“Marius the Epicurean”は就中價値あるものにして亦其の一生の傑作なり。ペーターナル初めは希臘の美術文學を好み殆どこれに溺れんとしたりしが後最近の思想好尚に感染し隨うて其の所説もまた一變しき。“Imaginary Portraits”は美術の批判よりは寧ろ美術家が製作の瞬間に於ける心機の妙用を描破せんとせしものなり。此等の諸篇其の最妙の個所に至ればラスキンの暢達に加ふるにトマス、ブラウン及びデ、シンシーの巧緻を以てせるが如きものあり但し説の幽微に入り高玄に向ふ所に至りては到底ラスキンの精且つ大なるに及ばす。

ジョン、アッダント、シンモンス (John Addington Symonds) ペーターナルと同一の派に屬して考

説の精緻なる所は彼れに及ばざれども亦た彼の美論派の文士中錚々の名を博したる詞客なり。一千八百四十年に生れ同九十三年羅馬にて歿しき。生來遺傳病に冒されて十分力を文學に用ふると能ざりしかど其一生の心血は『History of the Renaissance in Italy』、『伊國文藝復興史』に濺がれて今猶ほ多數の讀者あり。モンツは南歐の文藝に精通せる人にして希臘の學藝美術及び伊太利なる文藝復興の事に付ては平生精査せる所ありこれに關する論説は屢時の新聞雜誌に掲載せられき。而して彼れの屬せりし美論の一派はもと多少彼のラスキンの流れを汲みしものなれども追々に其の倫理的宗教的なる方面を離れて獨立に研究せしものなりき。其の所論中見るべきものなきにあらぬど一家の學としていふべき程のものならねばこゝにはこれを擧げず。

非リアム、ミントー 千八百四十六年に生れ同九十三年に歿しき。アベルヂーの大學にて論理學及び英文學の教授たり文學美術の評議に美學的觀察を用ふることも少く且つ文章を詩歌的に修飾する事少かりしは前の二人に比して異色ある所なり。嘗て『Examiner』(雜誌)の主筆となりしが同誌の批評文はこれより騷壇に

重きを置かるゝに至りき。後ち去りて『Daily News』に赴き暫らくにて辭して去りぬ。この間又小説若干をものしき『The Crack of Doom』は就中の傑作なり。是れより先きミントー英國の散文と韻語とに關する史論をものし又彼の『エッセイクロピヂア、ブリタニカ』の爲めに若干の寄稿をなせり。其の特質は博く過去の文藝に通じて又深く最近の思想に感染せるにあり。其の史論及び文學論は全たく兩者の融合より成れるものといふべし。其の失は批評眼のあまりに近代的に偏して作を廣く宇宙的に觀る能はざりしにあり但しこはあながちミントー一人にあらざり殆んど近代美學派評論家の通弊なり。其の文章は平明順正よく其の言はんと欲す所を悉くせり。

第二十一章 哲學壇及神學壇

文學を純文學のみに限り且つ廣義に解して冷く思想感情の文章となりて表はれたる者となす時は哲學上の著述の如きは其の思想の方面より神學上の書籍の如きは思想感情の方面より文學上頗る重要な位置を保つべく隨うて其の變遷發達せる跡を討ぬるは文學史家の忽にすべからざることなるべし。さりながら此

の如き文學史は純文學史はいふに及ばず哲學史宗教史などを合むこととなり到底容易く企つべからざるものなれば本講義の如きも哲學史宗教史等とは引き離して彼の純文學を中心とし其の他は純文學と密に關係ある思想并びに純文學たる價值ある著作につきて論述せんとはするなり。

第十九世紀なる哲學家及神學家の著作は純文學の方面より觀るに此の世紀の前期より起りたる彼のオックスフォード派の學者の如きは美文の才ある者頗る多く其の作には散文の詩歌として賞玩すべき者も少からず。降りて最近二十年に至りて英國の科學者は殆んど全く美文を離れて乾燥枯冷の文章をものすることとなりぬ。かゝるは彼れ等科學者等が獨逸の學風に化せられたるが爲か或は天資文才に富めるものゝ出でざるが爲めかとは本章に於て論定すべきことにあらず讀者にして西歐十八九世紀間に於ける思想變遷の跡を察せば思ひ自ら半ばに過ぎん。本章略述するは英國十九世紀間哲學及び神學の著作家中純文學の方面より見て文章家と稱し得べき人々の上のみにしてミル、ハミルトン、ニウマン等を首とせる數人に過ぎず。若し夫れ此れ等の碩學か科學的事業を精察せんとなら

ば須く哲學史及び神學史を繙くべきなり。

(一)デレミ、ペンタム 一千七百四十八年ロンドンに生れき。十三歳にしてオックスフォードなるクィンズ、コレツといふ大學校に入り十八歳にして卒業し六年の後ち父の業を繼ぎて狀師となりしが性哲學を好み夙に佛國の哲學を研究して名聲ありき。同七十六年法律家ブラックストンの所説を批評せる一篇“Fragment of Government”といふを著し一躍して「オックス」派の預言者といふ稱を受け其の説一派の間に喧傳せられき。其の後“Theory of Punishments and Rewards”“Letters on Usury” (1787) “Introduction to the Principles of Morals and Legitimation” (1789) “Treatises on Evidence” (1813) “Fallacies” (1824) 等の著あり一千八百三十二年齡は八十四歳を以て歿しき。ペンタムが道德政治及法律上の持論の中心となりたる者は其の利用の説也。彼れはプリストレーが陳套の語を用ひ「最多數に最大幸福を興ふること」を以て其の目的となしき。而も其の多數といふ意義如何例へば小人八十を占め君子僅かに二十なる國に於ては如何所謂幸福とは何ぞや厚生利用の意義如何等の如き重大なる問題に就きては一たびも精説せず上に言る如き漠然たる語に基く孟浪の説

を建てしのみなりと雖も當時英國の社會は隣國革命の舉によりて人心頗る騷然たりし時なりしを以てペンタトが所説は此の機に應じて多少貢獻する所ありしや疑ひなし。嚴にいへば彼れは政治哲學者などいふべき者にあらずして一の政論家たりしのみ。其の文章は頗る華やかにして力ありシドニ、スミスが名篇にも伯仲すべきものあり。兎に角に一時多數の讀者を感動せしめたるは事實なり。

(二)デジョン、スチュアルトミル 一千八百六年ロンドンに生れき。父をデエームス、ミルといふ有名なる哲學者經濟學者にして著書頗る多し。デジョン幼時は父の許にて教育を受け後佛蘭西に移りて數年を送り十七歳に及びて印刷局の録事となり三十四年間此の業を執りき。是より先きデジョン父の紹介によりてクロート及び其の他の學者と交り又た時の有名なる文士と接し殊にカーライルと相善かりき。彼のカーライルが『佛國革命史』の稿をテーロル夫人より借りてこれを焼失したるは此の時なりしなり。ミル後ち此のテーロル夫人と婚し後年一奇書を著して當時の事を叙しきかくて哲學者、政治經濟學者、批評家としてミルの名聲日に

揚り一世の宗と推さるゝと十餘年此の間國會に入り佛蘭西に遊び一千八百七三年齡六十八歳を以て歿しき。ミルは資性温厚にして交友甚だ多し。其の著作(殊に後年の著作)は此れ等交友の助けによりて成りたるもの甚だ多しといふ。

ミルが早年の作は多く新聞雜誌の爲めにもせしものにして彼れ自らも“London and Westminster Review”といふを發行して盛に其達筆を揮ひき。ミルは一たびも美文を試みしとなく常に哲學、政治及び文學の評論をのみをものしき。一千八百四十三年“A System of Logic, Ratiocinative and Inductive”を著はしき是れを其の名篇の第一なり。五年の後“Political Economy”成る前者に次ぐものとして學者の推重する所なり。同五十九年“Liberty”を著はす文辭簡明なり。翌年論文集“Dissertations and Discussions”出版せられ次で『功利主義論』及『コムト論』出づ。是より先きミル佛のコムトと所説を一にせしが晩年に至りてコムト大に偏固となりしよりミル遂に之れが辯析を試むるに至りしなり。而して彼れが辯折の筆は更らに一層の鋭を加つてハミルトンの哲學に及び同六十五年有名なる“Examination of Sir William Hamilton's Philosophy”をものしき。ミルが神學及び形而上學に於て哲學系を立てし

ては全く此の時にありと稱せらる。さて其の後の著書にて名高きは“Representative Government”及び“Subjection of Women”等にして其の自傳は歿して後ちに世に出でたり。

以上の著述中に含まれたるミルが所説は學説として頗ぶる注意すべきものにして殊に經濟學上の所説の如きは殆んどいひ盡したりとまで稱せらる。仔細に觀察せば何れの論説にも多少の疵はあるべけれど今之れを論ふ能はず但し彼れはかいなでの文學的哲學者の如く一時の感にまかせて論理の邪路を走過するが如きは全くなく隨うて其の論を覆さんとせば第一前提より破壊するの他なきが如し。彼れは論理學の史上に於ても明かに一席を占むべきものなるだけありて其の文の明快適切なる恐らく古今に比なく一たび其の根本思想に同意すれば其の何れの著を讀むも徹頭徹尾これに首肯せざるを得ざるの概あり。而して彼れの議論を進むるや件の論理を右にし左には修辭の方則を控へ天稟の文學的才能を以て之れを動かす故に整々堂々險を馳せず邪を行かず滔々として大河の百川を集めて東流するが如く觀る者また神氣の爽然たるを覺ゆ。之れをマコウレーが

文に比せんか其の明快流暢なる點に於ては兩者異なる所なしと雖も彼れが文章には全躰に於て多少輕烟の之れを罩むるが如き所ありて事理の脈絡頗る模糊時には其の思想の朦朧たるを示すが如き所ありと雖も是れは飽くまでも瑩然洞然事理の深底に徹透して微塵も陰す所なし。即ちミルが文にはマコウレーの華麗なくテ、クインシーの濃淡なく又ラムの輕妙なしと雖も讀みて誤解すべからざる明晰と讀過の際不可言の快味を覺ゆる暢達とは他の文人に其の例を見難きものなりとす。宜なり今に至りても尙議家論客の範たるや

(三) フリアム・ミルトン 一千七百八十八年に生れき。祖父と父とは相嗣いでクラズムー大學の教授たり着實寧ろ平凡の學者なりき。フリアムも件の學校にて教育を受け卒業の後には蘇格土評議官といへる職に就き久しく此の職に従へりしが一千八百二十年フロンソンの件の大學にて倫理哲學科の教授となるを競争して敗れそれより暫く『エヂンバラ』評論の寄書家となりて哲學上の評論を擔當せしが同三十六年に至り遂にフロンソンに代りて大學に入り論理學及び形而上學を教授して名譽頗る高く其の教授筆記の如きは處々に傳はりてもてはやされき。

されども如何なる故ありてにや彼れは之れを印行せず且つ他にたづまはること
もありて生涯中著述といふは僅に“Dissertations”と稱する一篇の論集あるに過ぎ
ず。一千八百五十九年に歿しければ彼の講義草案は友人の手によりて初めて出
版せられき。ミルがハミルトンを論評せしは重に此の書に關してなりき。
ハミルトンの哲學に“Philosophy of the Conditioned”と稱す是れヒウムに反對してト
マスリードが蘇格士哲學を援助せんが爲めにカントを祖述して物せるものなり。
されど今は其の梗概をだに叙する能はずたゞ其の所説のトマス、スベンサル、ペー
ンス、及びヂェームス、フレデリッキ、フエリエル等數家に影響したりといふ事を記しお
かんのみ。

文藝につきては特にいふべきことなし。たゞ彼れはデクンシー、コールリッチ等よ
りは一層よく日耳曼風の研究を用ひたるだけに語辭文脈等頗る彼の國の科學者
よりなる所あるのみ。

(四)ヘンリー、ロンゲネルマンセル Henry Longueville Mansel は或人々の間には英國十
九世紀中の最大哲學者なりと稱せられ又たマーク、パッチソンよりは「仲買の親玉」

(arch-jobber)と毀られたれど現今に於ては兎に角に精緻なる思索家哲學者の一人といふ
いふ公評に其の位置略定まりたるが如し。惜哉彼れ齡甚だ長からず加ふるに
大學校の事務多端なりしと生來著作に營々するを好まざりしとによりて著書あ
まり多からず隨うて彼れが知識の那邊にまで及びたるかを知るに由なし。一千
八百二十年に生まれき小學校より進進してオックスフォードなるセント、ジョン大學
に入り卒業して其の校友となりたりしが彼の“University Commission”といふもの
に絶對の反對なりしかは忽ち“Pronostication”と題する一書を著はして之れを攻撃
せり華麗優雅なる文章中より骨に徹する諷刺嘲諷の隨處に隱見出歿するの妙ま
た當世紀の一奇書たるに耻ぢず。かくて件の社ソサエティの爲めに選ばれて倫理及純理哲
學の講坐を得たりしが其の講義は議論の内容と措辭の巧妙とによりて名聲を博
したり。後年親友ミルマンの死するに及びてセント、ボウルの監校師となりしが
幾程もなくして歿しき。時に一千八百七十年なりき。著書は彼の“Pronostication”
の他に教授筆記“Bampton Lectures”論理書“Prolegomena Logica”等あり。『毎季評論』
及び其の他に掲げられし小論文は彼の“Pronostication”と合綴して其の歿後に出版

せられき。

マンセルは甚だ多方面なる學者にして滄學の才もあり亦た世間智にも疎からざりき。是れ其の講義の大に學生に喜ばれ其の著書の學者をも益し且つ俗人にも解せられたる所以なり。隨うて彼れの或人々より毀らるゝも亦た此の點にあり。學者としての彼れの本領は自家の哲學系を立てゝ一派の開山たらんとするよりは寧ろ忠實に先人の哲學を傳へて精細に思想の變遷を叙説するにありしなり。されば彼れは多く獨乙の書を讀みしかどこれによりて自家の意見を固めんとするにもあらず彼の "Bampton Lectures" の如きはミルが批評 ("Examination of Hamilton") の中に於てはハミルトンの敷衍と見做されし程にハミルトン哲學を攝取したれど時にはハミルトンとは全く異なる解釋を試みしこともありき。要するに彼れは雜誌の評論家當時にては随分不正直にして随分褊狭ならざれば出來難き職業) としては餘りに周匝明晰の頭腦を有し又哲學組織家としては(ソニスト風の所皆無にては大哲學の組織は覺束なきものなるに)あまりに精細なる論理癖を有しき。即ち彼れは忠實精細なる哲學史家たるに過ぎず。彼れはこの種の記事評論には

最も適したる文章を有しき。其の短生涯中多く雜務の爲めに時を奪はれ爲めに首尾完備せる哲學史をもつること能はざりしは惜むべし。尙當時に出でし哲學書の文學的價值あるものゝ名を擧ぐる下の如し。

Frederick Denison Maurice. — "Moral and Metaphysical Philosophy"

William Archer Butler "Lectures on the History of Ancient Philosophy"

George Henry Leves (モリオート女史の夫) — "Biographical History of Ancient Philosophy"

等

(五)ホエートリー及びホヰウエル 歴史科學神學上の評論及著述の上に於て當時オックスフォード及びケムブリッジの兩大學より各一俊才を出だしき。ホエートリー及びホヰウエル之れ也。兩者各其の學校の特色を備へて顯はれたりし故に一見して明かなる相異の點あり加ふるに其の家庭に於ける上下の差より前者は秩序的教育を受けて議論文章共に雅正練熟後者は不規律に進歩せし才學だけに文字頗る粗硬なれども間々獨創の見に乏しからず。されども二人共に殆んど同時にいでゝ同じくジョンソンの獨斷家たり同様の論法を以て歴史を論じ哲學を論じ宗教

を論じ又た教育を論じき。

リチャード・ホーントリはロンドンの人、一千七百八十七年に生れき。父は教師にして頗る教會の事務に執掌しき。リチャード廿五歳を以てオリエル大學を卒業しオクスフォードに住すること十餘年にしてセント・アルバンス院の長となり(ニッマン副長に擧げらる)一千八百二十九年經濟學科の教授となる。一千八百三十一年ホイッグ黨に推されてダブリンの僧正となり難局に處ること三十餘年、一千八百六十三年に歿しき。

著作は多からぬ方なれどいづれも名あるものなり“*Historic Doubts relative to Napoleon Bonaparte*”は眼光の明透と論鋒の犀利を以て稱せられ教授筆記“*Party Feeling in Religion*”はこれに次ぎ『論理學』及び『美辭學』亦た頗る名あり。概するに多くシドニー・スミスと同じくオックスフォード教育の結果として觀察の細緻と所見の嚴なる統一とを缺き代ふるに文學的着想と表白とを以てせしものゝ如し。井ルナム、ホフウエルは工匠の子なり。幼にして數學の才に長じケムブリッジなるトリニチ大學を卒業し校友となり教授となり後ち校長となりき。彼れは科學にも

哲學にも件の數學を應用して頗る發明するところあり。“*The History*” (1837) “*The Philosophy of the Inductive Sciences*” (1840) “*Astronomy and Physic in Reference to Natural Philosophy*” (1833) 及び“*Plurality of Worlds*” (1853) 等皆名あり。其の文章は蕪雜生硬讀に堪へずと雖も當時英國に於て獨り獨立の研究法を取りて之れを試み兎に角多少の成果を得たりしことは忘るべからざるなり。

哲學を應用文學と見做して其の名家を擧げ來たれば應用哲學と見做すべき法理學經濟學の大家をも併序すべきなれどそはこゝにては企つべからざることなれば其の最も著はれたるもの二三の姓名と著述とを掲げて止まん。

デモン・オースチン(一七九〇—一八五九) 軍隊生活より教官となり “*Province of Jurisprudence Determined*” を著す其の夫人また文才あり“*Story without an End*”を首とし數編の好著作あり。夫の歿後其の教授草案を集め匿名にて刊行しき。“*Lectures on Jurisprudence*”『法學講義』是れなり。

ヘンリー・デュームス、サムマル、メーン(一八二二—一八八) ケムブリッジ大學を卒業してトリニチ、ホルの校友となり後ち校長に進み在職中に歿しき。著述法學政

治學史學等に涉りて頗る多し最も名あるものを“Ancient Law” (1861) “Village Communities” (1871) “Early Law and Custom” (1883) 及び共和政治を痛論せる“Popular Government” (一八八五)等とす。文牒亦た波瀾に富みよく其の意を悉せり。

デモームス、フイツ、デモームス、スチーヴン(一八二九—九四) ケムブリヂのトリニチ大學を卒業して狀師となり晩年法官となりき。著作は“Story of Nuncomar” (一八八五)の他に別にいふべきものなし。政治、神學などに關する評論の文は頗る多く最も論辯に長じき。“Liberty, Equality, and Fraternity” (一八七三)は其の集なり。父デモームス、スチーヴン亦た有名なる評論家にしてケムブリヂにて近世史の教授をなし、傍ら“Essays in Ecclesiastical History” 及び“Lectures on the History of France”等の著あり。

さて神學の方面を觀るに當時に於て最も注目を惹きたるものは、オックスフォード派オックスフォード派と稱する一派なり。こは半ば聖典エボレンツカナルトウヴンナツ派に反動し半ば改進黨と自由派とに反對して起りたるものにして最も名あるものをピウチャー、キーナル及びニューマンの三氏とす。

(一)エドワード、ブーヘリー、ピウチャー Edward Bouverie Pusey は一千八百年に生れき。幼時オリエルに送られ基督教院にて養育せられ業を卒へて後ち獨乙に赴き神學と東洋の國語とを研究し二十七歳の時國に皈りてロナル語の教授となりやゝ名あり。一千八百三十三年はじめてニューマン、キーナル等と相ひ結托して宗教につきて盡瘁すること數年遂に主義の爲めに大學の諸老より説教を禁ぜらるゝに至りぬ。同八十二年に歿しき。著述少なからず。中にも“Sermons” 及び“Fifteen” は最も文學的興趣の深きものと稱せらる。其の文章ニウマン、キーナル等に比して頗る差異あり或る人々よりは露骨に過ぎたりとて厭はれ又反對にも或る人々よりはあまり晦澁なりとて攻撃せらるれど宗教上の所論にさへあまりに科學的ならんとする當時の風に抗して態と自家の見を樹て信仰と情熱とを飾りなく筆に傳へたる一種の文牒は(時に露骨にして時に晦澁ならんも)また見るべきものなるべし。

(二)デモン、キーナル(一七九二—一八六六) は牧師の子なり。家庭にありて嚴峻なる教育を受け十四歳の時募に應じてオックスフォード大學に入り夙に神童の名あ

り。十九歳の時同校の助教授を托せられしが後ち職を辭して著作に従事し“*The Christian Yeomr*”の好著あり。一千八百三十八年同校の詩學教授となり終生此の職を奉じき。

キーブルの著作は“*The Christian Year*”(その他“*Lyrical Innocentium*”(及び詩集)“*Miscellaneous Pens*”あり。キーブルの詩才はロセッチ嬢に似て其の神怪幽陰に代ふるに廣大豊富を以てしき。彼れは又タルツタルスに影響を受けしこと少からずされど單に其の模倣にあらずして別に一家の風あり。惜哉宗教家の通弊ともいふべき歌て風趣なきの難はこれを免るゝ能はず情火内に燃ゆれども嚴峻なる教理之れを包みて趣味索然たるものとなれり。

されば彼れの作詩に従事せしことは大に彼れが詩歌の批評に資する所ありき。彼れは詩歌の批評家中當時第一の人なりき。其の名著“*Praelectiones Academicæ*”は例によりて羅旬語にてもせしが故に讀者の數少く隨うて世の注意を惹くこと少くして了りしも其の他英文にてもせし批評文の如きは皆人々の注視する所となりき。又彼れが教授せし美學は大に倫理の色彩を帯びたりと雖もさりとして

彼れは一切の詩歌を道義の眼を以て上下せんとするものにあらず。さて彼れは飽くまでも宗教の講論を其の本領とせしが故に勢ひ全力を批評に用ふる能はざりき。

(四) ニュマン

デヨン、ヘンリ、ニューマンはロンドンの人にして一千八百一年に生れき。そが幼時の教育は聖典派（エバンゲリカル）の思想を抱かしめむるの影響を生したりき。少うしてオックスフォードなるトリニチ大學に入り家業の後ち同校の助教授となり又セント、アルバンス院の副長となり次いでオリエル校の教授となりぬ。千八百二十七年にはハウキンズに嗣ぎてセント、メリー校の教師となりしがこは彼れが持説を實行するに最も適當なる地なりきさて其の説教は大に當時の問題となりこれに關する著書も隨うていと多かりき。彼れがこの職に在りし十六年間の事業はオックスフォード派の歴史の骨子となれるものなり。彼れは當時の宗教に於ける智的方面をば其の儀禮的方面と共に一變する所あらんと欲したり是に於てか物議紛然として辯難雨の如くこの問題に關して世に出でたる冊子を蒐むれば殆ど一圖書館

を成すに足るべしといふに至りき。而も是れに對する終局の斷案は今に及んで尙定まらざる有様なり。かくて同四十三年彼れはフルードと共に南歐に航してこゝに其の進路を一轉し二年の後ちローマ教會に聘せられてオックスフォールドを去り爾後三十二年間は飯り來ることなかりき。

彼れは屢々反對派の人々の爲めに妨げられ若しくは譏誣せられて頗る逆境に陥り居を易ふることも數回に及びしが晩年に至りては機運一變し一千八百七十七年には故郷なる三一^{トリニ}致大學の名譽員に擧げられ且法王レオ十三世の知遇を得て同七十九年には首坐教師の榮職を授けられき。仍りて一たびローマを訪ひやがてピルミンガムに飯りて靜かに餘生を養ひ同九十年八月に歿しき。此のころには彼れが眞意も初めて世に知られしかば其の死を悼惜するもの無慮數万人學者僧侶の別なく皆贊辭を列ねて其の墓碑を飾りき。程なく其の著述全集上梓せられしが書翰及び隨筆の類を除きてすらも太冊四十卷を成すに足れりき。今少しく之れによりて彼れが思想と文章とを略評せん。

ニユーマンが著の大部分はいふまでもなく散文の論說なれど彼れは韻語の作者

としても文學史上裕かに一の地位を占むるに足るなり。中にも“The Pillar of Cloud”の如きは優美巧妙なる讚美歌にして宗教上の理想を詩化したる技巧ロセッチの上にありと稱せられて頗る人口に膾炙す。此の作は南歐漫遊の歸途シ、リよりマルセールに航せし時の船中の詠にして當時の他の諸篇と共に神興横溢の餘に成りしものなり。尙其の前後にも名作に乏しからず中に“The Dream of Gerontius”は最も長篇にしてまたそが一生の傑作と稱せらる。蓋し是れそが複雑多様なりし行路の最高所を過ぎて今や靜かに來りし方をふりかへりたる時の作なればなるべし。

韻語の作以前の美文にては傳奇的物語“Callista”及び“Loss and Gain”の二篇あり言辭に巧妙なる個處は少からねど作に教訓の目的を置きたる跡あまりにあらはにして餘情乏しく又多數人に讀ましめんことを詮どせしが爲めに趣致の俗に流れたる惜むべし。

さて其の著作の大部分を占めたる神學上の文章につきて觀るに各所にてもせし講說集十二卷セントメリー領にてものせし『通俗說教集』八卷雜說四卷論文

四卷歴史的断片三卷耶蘇教非議を反駁せる者及びセント、アタナシアスの翻譯合せて四卷及び雜種の辯難文六卷あり。其最も不得意なりしは歴史にして彼れはたこれを重視せず他の史に據りて論を立つる者を見ては「好古癖なり」と一喙に附せしことさへありき。随て自らの所論中には史上の事實を引證すること少く稀れにこれある中にも年代などを誤まれるもありき。以下彼れが宗教上の意見を覗はん。

ニューマン及びニューマンの徒は彼の十七世紀の清淨教徒に對しては些の同情を有せざりき。クラフの記する所に據れば人若しオックスフォールドに於て「ミルトンは大詩人なり」と立言して同意を求めんとするも恐らくは一人の之れに應ずる者なかりしならん。彼等が清淨教徒に對する反感情はかばりなりき。然れども此のオックスフォールド派の首領たるニューマンは或意味に於ては或は真正の意味に於ては清淨教徒たりしなり。ニューマンの起ちて教導に従事せしや其の事業の標的は當時の世俗のあまりに卑俗なるを匡正して宗教の眞旨を振興せんとするにありき。所謂眞旨とは宗教の森嚴なるべき方面是れなり。彼れは曰は

「方今誰れか上帝に對して眞に畏敬の念を持するものぞ。誰れか熱情を以て其の神聖を認むる者ぞ。誰れか眞に罪惡の嫌ふべきを知る者ぞ。誰れか罪人を見て眞に恐怖震慄する者ぞ。誰れか上帝を褻瀆する異端の卑むべく又憫むべきを知る者ぞ。教義教律の眞に對して其の身を愛せざるものありや否や、最終最好の目的に達するが爲めに方便を用ふる事の眞意義を知るものありや否や。誰れか誠心を神聖使徒教會に捧ぐる者ぞ。誰れか宗教の神聖は心の神聖に伴ふを知る者ぞ。一言すれば誰れか今日宗教の嚴肅を知るものぞ。是れ實に一種の清淨教徒の言にあらざして何ぞや。然りニューマンの率るたるオックスフォールド派の舊教徒は實に新教的舊教ともいふべきもの若しくは十九世紀的新教ともいふべきものなりき。ニューマン曰はく「予はあくまでもリベラリスム(自由宗派)と戦かばんと欲す聖儀を非し聖典を議する我意放埒の一派及び其の一段進歩せるものと戦はんと欲す。夫れ心の靜平なると行ひの悠々たるとは彼の聖典を熱信するよりして得たる賜なり云々。彼れが焦慮して研究したる問題は如何にせば教會に自由派を生ずることなくして止むべきか」といふにあり。彼れは謂へらく有漏の

人間は茫々たる宇宙の迷津に立てる丐見のみ。吾れは何處より如何にして來りしかを知らず。日暮れて彼岸は遠し此の時に方り忽然として我が前に現はれ我れを撫で我を導くものは彼の大慈悲の御手なり誰れか之れを疑懼して殊更に行く手を轉せんとするものぞ。盡く聖典を疑はば聖典なきに如かず吾人の依從する所は此の唯一の聖典にあり黒朦々裡の大悲の御手にあり云々。此の説の當否はこゝに評せざるべし但し主我の觀念世界に氾濫し安心依從の靈地たる宗教界までも覆殺せんとしたる十九世紀の精神界の如何に混亂紛擾の有様を呈せしかはニューマンが反對の立却地によりてよく之れを観るを得べく上帝畏敬の念の十七世紀に比して如何に進み來りたるかは兩者相對して之れを知るを得べしとせばニューマン氏の所説は英國十九世紀の精神界の一側面として永く史上の地を占むるに足らんか。

ニューマンは文章家としても一世に冠たりき。彼れは一派の文人の如く格を破りて文を修飾する弊なし意の赴くに隨うて筆を進むれども行文皆典據ありて一語苟くもせず讀者の易解を主として平順明正を第一とせり。されば文章中形容詞

め較いど少く直喩隱喩體例の如きも動もすれば險に陥り易しとて常に力め之れを避けき。されば一種の批評家はあまりに平明なりとて賤するものもありしが彼れが天賦の詩才は始終其の文に現はれ温潤春光の趣致酌めども盡きざるの觀あり。加之主題にまじりてはよく此の筆致を脱し曲折波瀾の妙を盡したる場合も少からず。

オックスフォード派中の有者なる文士を擧ぐることを下の如し。

カーチナル、マッシュタ(二八〇八―九三) ロイヤル教會に屬し派中ニューマンと

名聲を争ひし人なり。文才は實かに其の下にあれども教會中の説教は大に喧傳せられ著述また多し。

リチャード、ハルレル、ブルード(二八〇三―三六) 史家デュームス、ブルードの兄

なり其の説大にニューマンを感化し更に派中の人々を感化しき。されば正當にオックスフォード派の先達といふべき人なり。不幸短命にして著作も少く事業の見るべきものなし。

アイザック、キルナムス(一八〇二―六五) ニューマンに次ぐの詩人なり。「小キ

人間は茫々たる宇宙の迷津に立てる丐兒のみ。吾れは何處より如何にして來りしかを知らず。日暮れて彼岸は遠し此の時に方り忽然として我が前に現はれ我れを撫で我を導くものは彼の大慈悲の御手なり誰れか之れを疑懼して殊更に行く手を轉ぜんとするものぞ。蓋く聖典を疑はば聖典なきに如かず吾人の依從する所は此の唯一の聖典にあり黒朦々裡の大悲の御手にあり云々。此の説の當否はこゝに評せざるべし但し主我の觀念世界に氾濫し安心依從の靈地たる宗教界までも覆殺せんとしたる十九世紀の精神界の如何に混亂紛擾の有様を呈せしかはニューマンが反對の立却地によりてよく之れを觀るを得べく上帝畏敬の念の十七世紀に比して如何に進み來りたるかは兩者相對して之れを知るを得べしとせばニューマン氏の所説は英國十九世紀の精神界の一側面として永く史上の地を占むるに足らんか。

ニューマンは文章家としても一世に冠たりき。彼れは一派の文人の如く格を破りて文を修飾する弊なし意の赴くに隨うて筆を進むれども行文皆典據ありて一語苟くもせず讀者の易解を主として平順明正を第一とせり。されば文章中形容詞

の數いど少く直喩隱喩證例の如きも動もすれば險に陥り易しとて常に力めて之れを避けき。されば一種の批評家はあまりに平明なりとて眩するものもありしが彼れが天賦の詩才は始終其の文に現はれ温潤含光の趣致酌めども盡きざるの觀あり。加之主題にまりてはよく此の平板を脱し曲折波瀾の妙を盡したる場合も少からず。

オックスフォード派中の有名なる文士を擧ぐると下の如し。

カーチナル、マシニク(二八〇八—九三)

ローマ教會に屬し派中ニューマンと

名聲を争ひし人なり。文才は實かに其の下にあれども教會中の説教は大に唱傳せられ著述また多し。

リチヤード、ハルレル、フルード(二八〇三—三六)

史家ヂェームス、フルードの兄

なり其の説大にニューマンを感化し更に派中の人々を感化しき。されば正當にオックスフォード派の先達といふべき人なり。不幸短命にして著作も少く事業の見るべきものなし。

アイザック、非ルアムス(一八〇二—六五)

ニューマンに次ぐの詩人なり。「小キー

ブル」と稱せらる。井ルアム、マヨール、チワード(一八一二—一八二二)は「理のワード」の綽名あり。其の著「Ideal of Christian Church」の文章の恐しく粗笨なりしに係らず其の所説頗る注意するに足りし故なり。

ダイン、チャーチ(一八一五—一九一) 派中の錚々たる文士なり。ダンテ、Anselm、スベンサー等の評論をもものして名あり。晩年オックスフォード派の史を起稿し中途にして歿しき。

ヘンリー、バリー、リットン(一八二九—一九〇) Pusey の傳をもものして名あり。講説に有名なるもの少からぬといづれも旨よりは修辭の巧妙なるを以て稱せられたり。

オックスフォード派と其の反對派との中間に立ちし神學者中にて忘るべからざる者はオックスフォード派及びウィントン、チェスタルの僧正たりしウィルバーフォース Samuel Wilberforce(一八〇五—七三)なり。最初オックスフォード派に屬し後ち殆ど反對の地位に立ち再びオックスフォード派にかへりたる人なり。僧官としての事業多か

りしが中に其の説教の時俗を化導するに効ありしは著き事實なり。且つ文才に富みて宗教に關する著作少からず。さてオックスフォード派も正反對の位置に立ちし人々の中にて稍、顯はれたる人三家あり。スタンレー、ベチソン及びデニートこれなり。

(一)アーサー、スタンレー Arthur Pearyn Stanley (一八一五—一八三) はアーノルドの感化を受けて其の傳記を著し、人なり。大學に助教師たりしこと十年許り後ちカンターベリーの法教師となりクラトスト、チャーチに轉じ又オックスフォード大學にて宗教史の講師となり終にウェストミンスター^{Westminster}の監牧師となりき。此の間著述少からず殊に多年の研鑽を重ねてバレストアインの地理及びイースター、チャーチ(Easter Church)の變遷史を著しき。文章は流麗にして平易なり。

(二)マーク、バッチソン(一八一三—一八四) リンコン大學の校長たりき。始めニューマンの人物に負ふ所ありきといふ。學識該博にして爛眼炬の如く、ニューマンを助けて爲す所少からざりしがニューマンの南歐に航するに及びて漸く説を變じ遂に自由信仰を唱ふるに至りき。さて名籍は教會におきながら私に懷疑説を持

し獨り討究する所ありき。有名なる "Essays and Reviews" に於て他の六人と共に當時の宗教及び教會を論じて頗る物議を惹起せしかと著き影響もなくして止み自らも其の思想の全軀は社會に發表せざりしが故に其の懷疑の思想は果して如何さまりしか今知るに由なし。平常書籍を著はさば最良の書籍たるべしとの主義なりしかば多く筆をとりて『英國文人列傳』の爲めに『ミルトン論』をものし『シオータリ』評論』及び『土曜日評論』などに断片を寄せたるのみなりしも其の學才は夙に知人間に推服せられたりき。行文流石に一家をなして雅馴雄健の名あり。

(三)ベンチミン・チニエット(一八一七—一九四) 其の經歷は界はベンチンに似て身は宗教大學の長たると同時にパチソンにひとしく "Essays and Reviews" の記者の一人たり但しニューマン等が主唱せりし宗教復古レトリックに對しては毫も同情を寄する所なかりき。その著作の大部分はプレトリーの反譯にして文章はパチソンに劣れり。オックスフォード派の運動が其の頂點に達したりし時は蘇格士教會の分裂の衰運に傾きし時なりき。此の派に於て最後の運動の最も勢ひありしはトマス・チャーマー
スなり。一千七百八十餘年に生れ一千八百四十七年に歿しき。一千八百二十三

年セント・アンドリヤーズにて倫理哲學の教授となり後エヂンバラに轉じて神學講師となる。著書は "The Adaptation of Eternal Nature to the Moral and Intellectual Constitution of Man" を首として頗る浩瀚なり。説教者としての名は高かりしも學者教師としての名譽は太ならず論理よりは修辭に長じたりといふ評はあれど其の修辭だにも文學史上に特筆する價值なし。

エドワード・アーキンガ(一七九二—一八三四) カムライルが親友にして一時はチャーマーヌを援けて蘇士教會の爲めに盡瘁しチャーマーヌがグラスゴウにて名譽を馳せし頃アーキンガは單身ロンドンに赴きハットン、ガードンにて説教を試みき。説教者としての伎倆はチャーマーヌに及ばざりしかと文人としては尙かに其の上にあり殊にホールリッチに就きて文學を學びし以後の如きは其の筆大に見るべきも蓋しチャーマーヌは天資宗教家でありながら布教の方便にとて文學の力を借りにし者、アーキンガは本來文學者になりながら途を失して神學界に入りにし者と
ス
ル
ト

第二十三章 科學壇の文才

前章神學壇及び哲學壇の名家を略説せし折にも文學史上に掲ぐべき人として之れを取捨選擇するの容易ならざるを感じたりしが今科學壇の文才を紹介するに當りては其の取捨も同じく選擇の一層容易ならざるを感じざるを得ず。哲學や神學や素と純文學の範圍に入るものにあらず而も其の應用せられて諸種の評論或は説教の文となるに及びては其の文致や詩趣や多少文學的價值無きにあらず隨うてそを擇りいだして略説する必しも難き業にあらずれども他の科學に至りては本と純文學と相反するもの隨うて其の文章につきて文學的評議を試みんはいとく爲し易からざる業なり。されども實際につきて見るときは科學壇にも亦た文才の士なきにあらず且や其の著述の中にはいみじき文章も尠からねばこゝに其の最も著はれたる數人のみを擇びせめても其の大略を叙説せんと欲す。さて第一に擧ぐべきは彼の語原學者、古典學者の人々なり。按ずるに中世の頃には所謂古典學未だ興らず殆ど一人の之れを專攻する者なかりき降りて文藝復興期に至れば苟も操觚の業に従ふものにして多少これを修めざるはなく就中彼のエラスマスの如きは此の古典學の初期に於て最も著名なる學者なりき。さてこ

れより一方には國文學發達し一方には希臘、拉典の古文學盛んに研究せられ十七十八世紀の頃に至りては所謂古典學は文學と獨立して別に專攻せらるべきものととなりぬ。而も文學者は猶ほ一般に必ず此の知識なかるべからずといふ有様に勢ひ其の分離も全きを得ざりしが十九世紀の初めに至りて古典學は遂に全く文學と立離れて科學の部分に入ることとなりぬ。下に述ぶるは分離以後の學者につきてなり。

まづ最も尤なるはチャップ、フライアント、ギルバート、ウークフィールド。及びリチャード、ボルソンの三家なり但し此の中二家は學者として功績著大ならず。

(一)チャップ、フライアント(一七一五——一八〇四)は古典學に於いて當時全く遺却せられたりし神話を研究せし人にて當時比ひなき碩學なりき。

(二)ギルバート、ウークフィールド(一七五六——一八〇一)はケムブリッジの出身なりしが教會を去りてチャップン派に入り激烈なる筆を振ひて盛んに宗教上の事を論議せしが遂に讒謗罪にて入獄し赦されて後ち多く古學に關する書を著し斯道を益せしこと尠からず中にも“*Silva Critica*”は最も名高かりき。

(三)リキーン・ドナルド(一七五九—一八〇八)はスコットリーと共に國學の大家と稱せられ、殊に其の英詩の麗澤を以て著せられたりき。一七九七年より一八〇一年に於てオクスフォード大學に入りしが在学中夙に俊才の名あり、殊に擬古風詩文に長じき卒業に及ばずして校を退き同校にて希臘語の教授となり、後ちロンドン教育會の圖書館係りとあり、在職中に歿しき。ドナルドは斯學者として最も貴重すべき明晰の思想と博大の記憶力とを有し、其の文藝に於て得易からず、尙れの方面に筆を馳するも入後に落つるといふが如き。然れども、惜しい哉、生來の酒癖は筆と共に長じ、正則の業務に堪ふる能はざりき、それが爲め著作の見るべきものを遺さずして終りぬ。

以上三家の歿後、オクスフォード、ケンブリッジ及びエジンバラより各三名の古學者を出だしたり。

(二)オクスフォードより出でしは、ジョン・ギンゲト(一八二五—一六九)にして卒業の後、オクスフォードの教授となり、終生其の職に従事せりき。ホレーシウス、キーツ、及びリッセル等の翻譯を首として、南歐の古文學を紹介して、文壇を益せしこと、絶

からず。其の古學に於ける學風は、日耳曼の學者の如く精緻なるを得ず、また英倫の學者の如く堅實なるを得ざりきと雖も、多く子弟を誘發して、遺憾なく古學の堂奥を窺はしめし、伎倆と彼の死記、死誦の弊習を脱して、よく古文學を現文壇に復活せしめたりし功績とは、共に長く忘るべからざるものなり。

(二)ケンブリッジより出でしは、ニコラス・マクドナルド(一八一九—一八二)なり。トリニチ校を卒業して、同校の拉典語教授となりし人なり。學者として、力量は、コニングトンの上にあり、ベントリー、ホルソンなどの業と大成せしは、此の人の力なりと稱せらる。或は *Lucanus* を翻譯し、或は *ホレーシウス*、*カタラス* (*Catullus*) 等を評論し、其の他古學研究に屬する、断篇少からず、中にも希臘拉典の詩歌を國語に翻譯し、伎倆は當時獨歩なりしなり。たゞ其の音調の眞を傳ふる能はざりしを遺憾となす。

(三)エジンバラより出でしは、ヘンリー・ヤングセラ(一八二五—九〇)なり。其の著述は以上三家の比して、更に文學的趣味に富めり。クラスゴ、及びペリオルにて教育せられ、數年の後、オクスフォードのセント・アンドリュースに教授たりしが、一千

八百六十三年エヂンバラニ轉じ終生そこに奉職したりき。在職中“Roman Poets of the Republic”の著あり同種の作中空前の名什なりと稱せらる。後ちワルマルホレーヌ、チペラス Tibullus 及びプロペルチウス Propertius 等に關する評論を著しぬ。其の他前の著と牒を同うせるもの一二篇あれど何れも取りいでしむに足らず。ざるほどに古學の研究これより一步を進めて或はエジプトの古文學を研究し或はセミチックの古語を討ぬ更に印度を中心として東洋諸國の語學を修め兼ねて其の文學宗教等を傳ふるもの出づるに至りしが其の中にてやゝ名高きを舉ぐればパルチー。エルムスレー。ゲイヌフーディーオチ、ロング。ケンテデー。ミレット。リンウード。マルケス。モンク。アロムフィールドなど其の他尙あまたあれど今はたゞ最も功績の著しと見ゆる非リアムロバートソン、スミスの上のみを略説して直ちに他の科學者に移らんとす。

非リアム、ロバートソン、スミスは一千八百四十六年に生れ同九十四年に歿しき。アメルチー、ンシヤのフリーチャーチ、コレッチといふ學校にて希臘の教授となり

文壇に立ちては獨逸風の評論をものせりしが彼の『エンサイクロピヂア、ブリタニカ』の事に關して其の職を失ひ轉じてケムブリッジにて亞刺比亞語の教授となり又圖書館の館友となり遂に『エンサイクロピヂア』の寄書家となり編輯助手となり更に編輯發行の主任となりき。彼れの最も長じたりしは東洋の古典にして新約書に關する貴重の考證少からず。其の他“Kinship and Marriage in Early Arabia”及び“The Religion of Semites”の二著より文牒措辭少くも當時の二三流に列するを得べし。

さて理化學壇の文士に移らんにハムフレード、ダヴィ(Humphry Davy)一七七八——一八二九は先づ第一に紹介すべき人ならん。彼れは有名なる化學者にして炭坑用の安全燈を首め諸種の發明ありもと詩人ペッドリスの父なる(クリフトンにて有名なる)醫師の弟子となり其の助手となりし間に諸種の有益なる研究をなしぬると共に上流の人々と交り殊にコールリッヂ、ソーシー等の一派の詩人と相往來して大に文學上の知識を得たりき。

さて二十三歳の時選ばれてロンドンなる「ロイヤル、インスチテューション」の講師とな

りしが其の講義の趣味に富めるは前後比の樹なかりきと云ふ。著書は“Salmonia”及び“Consolations in Travel”の二冊あるのみなれど何れも當時に歓迎せられ其の他の小片また文才の見るべきものあり。

タネーと同時に出で數學天文地文等の學者にして文名噴々たりしはメリー、フーリアン、ア、ソムerville) なり。一千七百八十年に生れ同八百七十二年に歿しき其の自傳は筆致婉約にして流麗有趣味の記事に富むを以て稱せらる。其の他に David Brewster 175—11868 數學理學の専門家) John Herschel 1792—1871 天文學者) Charles Lyell 1797—1875 地質學者) Robert Murchison 1792—1871 同上) John Tindall (1820—93 物理學者等皆多少の文名ありき。

されども科學界の泰斗にして文名また一世に冠絶せしはダーキンとハックスレーに超ゆるものなし。

チャールズ、ダーキンは彼のエラスマス、ダーキンにて十八世紀中韻語を以て著はれ兼ねて科學の造詣淺からずして一流の進化論を立てにし人の孫にて一千八百九年二月シリエズベリに生れき。初めエチンバラにて教育せられ後ちケムブリ

ッジなるシライスト大學に入り最も心を理科學に傾けしが卒業の後南海に航して實地觀察を試み滞在五年間大に得る所あり同三十六年本國に歸り其の觀察を元として數年間一説の組織に勉め傍ら巡見記の出版に従事せりき。かくて程なく同五十九年に至りて有名なる“Origin of Species”の一書を公にして世界の學界を聳動し尙引きつゝきて夥多の注意すべき者ありき。一千八百七十一年又“The Descent of Man”を出しき。蓋し掉尾の大作なり。同八十二年に歿しき。齡七十三。ダーキンは晩年に至りて人に語りし所に據れば彼れはいたく文學を好みことにシェイクスピアを愛誦せしが其の詩文を讀みしは老後よりは寧ろ少壯の間にありきといふ。そが文學の素養の最も文學と縁遠き學術研究の時代にありきとは奇ならずや。而して彼れが文才は英氣の旺盛たる少壯時には其の勢を潜めて老成一家の見を樹つるに及んで始めて煥發せりき。“Voyage of the Beagle” “The Origin of the Species” “The Descent of Man” 等として文才の整調を見ざるはなし。實にダーキンの文才は明晰と強健とを旨として無要の修飾を加ふることなし而も其の事を敘し理を論ずるや主客整然緊張宜しきを得て宛らに其が文說の風姿を現じ來

たる。

ダービンより前に出で、早くもダービン風の進化説を“*Vestiges of Creation*”と云ふ一書に唱へ、忽ち世俗に喧傳せられ學者より手痛き攻撃を受けし者あり。其の名はロバート・チャムベースといひてエヂンバラにて其の兄と共に多年通俗にして有益なる多種の書籍を發行して名ありし人なり。件の書は科學説といはんよりは寧ろ隨感録の整ひたるものともいふべきものなるだけに讀みての趣味は少なからず。説の斬新なる文の感情的なるいづれも當時多數の讀書社會を動かして力ありき。此の人の著尙ほあれどいづれも彼此の著に及ばざると遠きものなれば擧げず。チャムベース及びダービン等が説に對する攻撃はさまざまなりしが中に最も激しく反對せし者はいふまでもなく時の宗教家なりき。而して“*Vestiges*”の攻撃者中にて最も力ありしはヒュー・ミルラー(一八〇二—五六)なりき。彼れは半は宗教的半は科學的なる見地を立て、根本的に件の邪説を覆さんとなしき。ミルラーは當時の英才にして觀察の周細を以て著はれ地質學を專攻しなからも侮るべからざる文才を有し、多年新聞雜誌の編輯寄書に従事して論難に老練なり

し人なればチャムベースの薄弱なる議論の如きは忽ちに挫け敗れ殆んど全く其の跡を絶ちし程なりき。然れども彼れは早年にして事によりて發狂し遂に自殺して失せたりしかば其の著書の如きは“*Old Red Sandstone*”(一八四一)の外多く見るべきものなくして了りぬ。されども彼れが通俗にして而も俗に媚びず明晰にして根柢ある論風と之れに協ふ文致とはいづれの編に於ても見ることを得。

十九世紀科學壇の彬々たる文才の殿として餘業今に顯著たる者をトマス・ヘンリ・ハックスレーとなす。ミルラーよりは二十年ダービンよりは十五年の後に生れ殆んど一世の師表と仰がるゝと四十年、一千八百九十五年に齡七十一歳にして歿しき。早く海軍軍醫となりてダービンにひとしく南海に航して研究する所ありしが未だ世に知らるゝには至らざりき。齡二十六歳にして學士會員となり齡六十歳に至るまで件の學會の講演に従事し大に諸科學を研鑽せり。彼れが科學界の功業は彼の進化説を特殊の立脚地によりて確立不動のものとなし、を第一として其の外枚擧するに暇あらず。其の博覽強記にして根柢の廣く固きは更にいはず其の斷案の力ありて確かなるなどは皆人の稱ふる所なり。彼れが批評家と

しての技倆は一千八百七十八年『英文家』"British Men of Letters"の爲めにもせしむ
ユーム論に於て知らる。引證該博議論雄大文辭もまた莊重正明警拔を求めず曲
折を力めず而も事理透徹一毫遺す所なきは眞に一世の大家たるに恥ぢず。

第二十三章 脚本

第十六世紀このかたの英國脚本を通覽せる人は必ずや其か第十九世紀に至りて
著き變化を經過したるを見ん。蓋し十八世紀以前には脚本と演劇と大抵相一致
せりき即ち作られたるものは大抵演ぜられ演ぜられたるもの將た讀み物として
も興ありしが第十八世紀の末より第十九世紀へかけては兩者次第に相分離し机
上に巧妙の文學として持て囃さるゝ脚本は舞臺にかけては成功せざるが多く舞
臺に面白く演ぜらるゝ脚本は讀みては興味の索然たるを常とするに至りぬ。一
言すれば脚本の中に演すべき脚本と讀むべき脚本との二種を生ずるに至りたり。
奇なる現象といひつべし。今其の原因を尋ねんよりは先づ演劇脚本の實況に就
いて語らんか。一千七百九十年より一千八百十年の間に於ける舞臺に上りし演
劇の臺帳は一千八百十一年イマホポールド夫人の手にて "Modern British Theatre"

と名づくる十卷の冊子となりて出でたるが其の文學的趣味の索然たることは言
語道斷なり、センツペリーの如きは之れを通覽せんには他に一冊の書もなき絶海
の孤島に於てか又は長雨に降りこめられたる旅亭の徒然に堪へざる時かさなく
ば餘程狂氣じみたる好奇心に驅られたる時ならではかなはずといへり。さて件
の十巻中につきて見ればフレデリッキ、レノルド(多作の劇作者にして『エルテル』を
脚本に譯したる功は記すべし)の作二卷餘、インチポールド夫人の作一卷、ホールク
ロフトの作一卷、カムパライランドの作一卷、數多の小作家が劣作五卷にしていづれ
も文學の眼を以て見れば讀むに堪へずといふものから脚本の側に立ちて公平に
觀るときはホールクロフト及びホールマンなどの如きは臺帳の作者としてやゝ
堪能のものにして其の他の作者の伎倆はた幾分か參考すべきものありオキーン
O'Keefeの如きは蓋し其の尤なるものか。

John O'Keefe(一七四八一—一八三三)はダブリンの人少壯の時自ら俳優となりて盛
んに脚本をもつせしが晩年に至り明を失ひて筆を絶ちしが爲め其の老熟の作を
見るを得ず。一千七百八十一年より同九十八年に至るまでに大小五十種の作あ

しての伎倆は一千八百七十八年『英文家』British Men of Lettersの爲めにもせしむる論に於て知らる。引證談博議論雄大文牘もまた莊重正明警振を求めず曲折を力めず而も事理透徹一毫遺す所なきは眞に一世の大家たるに恥ぢず。

第二十三章 脚本

第十六世紀このかたの英國脚本を通覽せる人は必ずや其か第十九世紀に至りて著き變化を経過したるを見ん。蓋し十八世紀以前には脚本と演劇と大抵相一致せり。即ち作りたるものは大抵演ぜられ演ぜられたるもの將た讀み物としても興ありしが第十八世紀の末より第十九世紀へかけては兩者次第に相分離し机上に巧妙の文學として持て囃さるる脚本は舞臺にかはては成功せざるが多く舞臺に面白く演ぜらるる脚本は讀みては興味の索然たるを常とするに至りぬ。一言すれば脚本の中に演すべき脚本と讀むべき脚本との二種を生ずるに至りたり。奇なる現象といひつべし。今其の原因を尋ねんよりは先づ演劇脚本の實況に就いて語らんか。一千七百九十年より一千八百十年の間に於ける舞臺に上りし演劇の臺帳は一千八百十一年のモナポールド夫人の手にて『Modern British Theatre』

と名づくる十卷の冊子となりて出でたるが其の文學的趣味の索然たることは言語道斷なり。センツペリーの如きは之れを通覽せんには他に一冊の書もなき絶海の孤島に於てか又は長雨に降りこめられたる旅亭の徒然に堪へざる時かさなくば餘程狂氣じみたる好奇心に驅られたる時ならではかなはずといへり。さて件の十卷中につきて見ればフレデリック、レノルド(多作の劇作者にして『エルトル』を脚本に譯したる功は記すべし)の作二卷餘、インチポールド夫人の作一卷、ホールクロフトの作一卷、カムパライランドの作一卷、數多の小作家が劣作五卷にしていづれも文學の眼を以て見れば讀むに堪へずといふものから脚本の側に立ちて公平に觀るときはホールクロフト及びコールマンなどの如きは臺帳の作者としてや、堪能のものにして其の他の作者の伎倆はた幾分か參考すべきものありオキーン、O'Keefeの如きは蓋し其の尤なるものか。

John O'Keefe(一七四八—一八三三)はダブリンの人少壯の時自ら俳優となりて盛んに脚本をもせしが晩年に至り明を失ひて筆を絶ちしが爲め其の老熟の作を見るを得ず。一千七百八十一年より同九十八年に至るまでに大小五十種の作あり

りと雖も自ら選んで出版せしものは三十種に過ぎず。多くは滑稽劇にして眞の喜劇の趣に近きものと單に一場の戯態に過ぎざるものとあり。其の直接の文學的價値はいと少けれど何れも舞臺上に當りを博せしものなれば脚本として多少参考するに足るものなり。"The Merry Mourners"は粗大なる笑劇劇にして"The Castle of Andalusia"は珍らしき野賊の事を作れるもの。"The Poor Soldier"は愛蘭士滑稽樂劇なり。其の他"Wild Oats" "A Beggar on Horseback" "The Doldrum"など見るべし。いづれも愛蘭士の風を帯びたる所其の特質なり。

さて前にもいへる文學と劇との分離に及へる端緒はペーリー女史 Joanna Bailie (一七六二—一八五一)が作せし頃にあるといふべし。女史は當時國秀として一世に讚美せられし女にて其作に多少見るべきものあり。久しくハムプステットに住してスコット以下の名士と交りたりき。一千七百九十八年"Plays on Passions"と題する戯書ビブリスの第一巻を出版せしがこれには十八世紀の主なる人情を表はさんと期して喜劇悲劇さまざまの形とりませて著き憎怨恐怖戀愛等の感情を描きたり。この巻の序に劇に關する議論を附し且つ開卷第一には"Basil"と呼べる書齋劇ブクゼイキョクを載せ

たり。此の書忽ちに遠近に傳はり期年にして三版を重ねるに至り中なる一篇"De Monfort"の如きは上場せられて頗る喝采を博しき。さて一千八百二年に同じく第二巻を同十二年に第三巻をもつし尙其の間に"Miscellaneous Plays"といふを著しき(一八〇四出版)後ち短篇の詩文若干を加ふ。概して女史が作は演じてよりも寧ろ讀みて趣味あり。其の悲劇の無韻律語は文字精練なれども熱誠の神興に乏しく且つ多くは地方の特風と時代の特風とに偏しヒザンチンサクソン又は文藝復興等の一時一處の類型的人物を主とせるが故に個人個人の性格は漠として捉へ難きを常とせり。喜劇の作には時に無邪氣の可笑味なきにあらねどこれはた科白上の滑稽に乏しく且つ破綻和解の因縁を人物の性格に置かざりしが爲に興味深からず。要するに女史の一世に名を爲しは其の作の價値ありしが爲めにあらざ文學の間歇期なりしが爲めなり。

かくて十九世紀の初めつかたより所謂技巧悲劇 Artistic tragedy (artistic comedy) に對す起り劇界に新現象(好現象とはいはず)を呈しぬ。其の由來を尋ねるに氣鋭の作家等が當時の劇の或は價値なき佛劇の模倣にとゞまり或は荒唐なる夢幼劇の類

ひにして到底爲すに足らざるを感じ翻然遠く十七世紀に折り直ちにシェークスピアを模範として之れに十九世紀の新思想を注ぎ以て一新劇を興さんと企てしに出でたり。蓋しローマン派運動の一種なり。而も此の種の劇の起るまた偶然にあらず。之れより先きチャールスラムの作に既に“John Woodvil”といふあり。トギンが作に“Antonio”といふあり。また彼のパイロンが悲劇の如きも詩としては他の諸名篇に劣り劇としては舞臺的効果乏しかりきと雖もまた決して劣作にあらず。たゞレスコットに至りては作劇の才全く無くシエリーが“Cenci”も詩才の燦然たる割には劇的趣味に乏しかりき。特リコールリッチに至りては劇の才能一派に冠絶し舞臺の成功は頗る著く中にも“Remorse”及び“Zapolya”の如きは當時には珍しき傑作なりき。

かゝる失敗の引きつゝきしにも拘らず演劇をして若しくはせめて劇詩をして趣味多からしめんの企圖は念々に息まず如何にもしてこれを進め行かんと欲せしは時の明かなる傾向なりき。こゝに於てか或はベードリスが傳奇劇復興(エリザベス朝の人にあらざれば到底夢幻劇の成功覺束なきこと猶ほ我が今日の夢幻劇

の新作の到底元録享保の夢幻劇に及ぶ能はざるが如きものなるに拘らずとなり或は所謂學者劇アカデミック・ドラマとなりぬ。(ミルマンが“Fazio”タルフォールドが“Ion”などは學者劇の兩極端の標本なり。而もイヴレ一つとして成功の著きものはなかりしかどタルフォールドが作は端なくもブラウニンクが新作の先驅となりて彼の鬼才をして神韻幽渺たる“Stafford”及び情感深刻なる“Plot in the Southen”を著さしむるに至りたり。後者はたしかに一名篇なれど演ずべき劇としては不具なる所夥しく到底抒情詩劇を以て目せざるを得ず。

かくて當世紀上半の文學と劇をして全く分離せしめしはシェリダン、ノールスJames Sheridan Knowles (一七八四—一八六二)とす。名門に生れしかば少にして文壇知名の士と交りしが長ずるに及びて一たび民兵隊に入り又藥劑師となりしが性來の嗜好は藝苑に馳せて遂に某劇場に入りて俳優となり又舞踊の師となりしが著き成功なく遂に三十歳にして劇の作者となりぬ。其の作は當時殆ど確言視せられし劇場の實際知識なくては好脚本をものする能はずといふ言と文學の才に秀でし人は不思議にも劇場に意を得ざる世なりと言ふを實證せり。但しこは反面よ

り實證せしにて彼れが作は彼れが劇の實際知識を有するが爲めに劇場に於いて成功したる割に文學の才は乏しかりしなり。其が悲劇にて最も著名なるは“*Titus*”にして作として最も善きは“*Cainus Gracchus*”(一八三六)及び“*William Tell*”(一八三四)なり。而して喜劇にはなほ良き作あり“*The Hunchback*”(一八三二)及び“*Love Chase*”(一八三六)等もつれも例の *Artificial comedy* をやゝ改善せるものと見るべし。本來神興によりて筆を馳せしことなきが上にあまりに多く舞臺の事情に拘束せられし爲め其の人物動作等いつも型に拘したるものとなり文學上及び美術上の價值を損したるは亦た已むを得ざる結果なりき。

舞臺上の成功はシエリダンに次ぎ文學上の價值もシエリダンに敵せしはバルワー、リッソンの脚本なり。“*The Lady of Lyons*”、“*Richelieu*”(一八三八)、“*Money*”(一八四〇)等は蓋し世の傑作なるべし。“*Richelieu*”は甚しき妙所なき代りに咎むべき難なく出来上りたる所は頗るシエリダンの作に似たり“*The Lady of Lyons*”は劇場的に大袈裟なる笑ふへしと雖も其の自然の哀情には皆人の同情すべき處あり。而して“*Money*”に至りては例の技巧的喜劇 *artificial comedy* の上乘なる者なり。其の他“*Duchesse de la*

Valiere”を始めとして作あまたあれど皆文學としても劇としても以上三作の列にあらざ。

以上の作者はシエリダンを除く外は大抵専門の劇作者にあらずいは劇の極衰期にいでしが爲めに多少の名をなし、門外文士なり。まかるにこゝに門外文士にして流れ／＼て竟に劇界文士となりしもの一人ありフランス *James F. Blanche* 是れなり(一七九六—一八八〇)。もと古物學者にして多少の名ありしが一千八百十八年頃より著作に従事し翻譯創作の長短篇合せて百餘に及ぶ中には劇の作は正劇より端物に至る頗る多けれどいづれも輕妙にして自由也隨うて文致精練ならざれど流石に棄て難き節あり抒情的文字に富む所其の特色也。

此の外當世中脚本に指を染めし人々を挙げ來らばミットフォールドよりテニンに至るまで詩人小説家の名若干を擧ぐべき筈なれど彼等の作はもとより其の本領にもあらず且つは劇壇を輕重せし作にもあらねば今は總て省くこととせり。要するに

「十九世紀に於ては文學者の戯曲はあしなべて飽かに其の人々の詩歌小説の作

に劣り詩歌小説に秀でざりし人々の脚本は文學的價值殆ど皆無なりき。既に論述したるが如く第十九世紀の新文學は前世紀の末に起りし歐洲革命の所産にして其の萌芽は既に十八世紀の末にあり就中一千七百八十年より一千八百年までの間に此の氣運最も著かりしなり。此の間に由りし著作は單に文學上よりのみ見るときは價值多き者にあらず。所謂文學鑑賞家等は以爲へらく此の期の文學中ホスウェルが『ヂンソン傳』、ペーンスが詩歌の數篇及び『Lyrical Ballads』等を除くの外は亦た大に見るべきなしと。又所爲らく小説のごときも大抵は荒唐蕪雜雅氣を脱せざるもの多しと。さもあれ比較研究文學史家、國史家などの見地より見來れば流石に作の價值以外に幾多の取りどころあるをおぼゆ。例へばクラッブ若しくはクーバーをとりてゴールドスミス若しくはトムソンと比較せば如何。更らに之れをウァルゾオス若しくはコールリッチと比較せば如何。かくの如く比照すれば當時の諸家が小品だにも別に新意義を生じ來る。况んやペーンス、ブレーが新聲をばソウシー、コールリッチ、ウァルゾオスが初期の作と比照するに於てをや。所詮過渡時代の作の價值は作其の物の上に存せずして後の傑作の導火線たりし

上に存す。

當期の小説界の狀況またこれにひとし當時の小説家が後代の作家を指導せし力は詩人のに劣りたれども其の苦心の度は彼れに越えたり。ベックフォードが物語はペーンスが詩歌と對すべくホルクロフト、ゴドギン等の小説はクーバー以下の作と相照らすべし。而してスコットが小説上の新功蹟に至りてはウァルゾオス、コールリッチ等の韻語上の功績よりも或意味に於ては一段困難なる事功なりしなり。且つや當時の韻語詩人にありては若し十八世紀の無氣力爛熟に厭きたらん場合には直ちに古に復りて其の師表を紀元前四五紀の希臘に求むるを得べく、中世の伊太利に求むるを得べく、學藝復興時代の各國に求むるを得べかりしが特り小説に於てはさる便宜を得る能はざりしなり。小説作家の則るべかりしものは十八世紀の自國の作物かさなくば佛蘭西伊太利の物語類ありしのみ。而してこれ等の作はた新小説の創始に對しては殆ど何の裨益する所もなかりしなり。彼等は徒らに闇黒中を索模したりき。吾人のスコットの功を多とする所以は蓋し此に存す。

評論壇神學壇などの模様も亦詩歌小説壇の趣と大差なし。要するに此の二十年間は文學界全牀が未だ緒に着かざりし時なり。

そのころより今日までの間に詩歌界は變遷の五期を劃せり。其の第一期第三期及び第五期には創才ある詩人彬々として輩出し第二期と第四期とには彼等が名作相接踵して出版せられき。即ち第一期は一千七百八十年代即ちスコット及び湖上派詩人を首としてシエリ、キーツなどの出生せし時代也。第二期はこれにつぐ十五年間に於て第三期は一千八百十年より以後の十五年なり。第四期はそれより一千八百三十六年まで第五期はモリスの生れし年より今日までなり。

件の第一期に於てはローマンス傳奇的詩歌復古の勢ひめざましく中世文字の復活佛蘭西革命の影響及び神秘的觀念の勃興等はこれを助けて力ありき。「自然に復れ」新たに立脚地を自然界に求めよなどいふ聲は先づ半無意識にクーパーとクラップとによりて揚げられ全く無意識にパーンスとブレイクとによりて助長せられ程なく「Lyrical Ballads」は出版せられ遂に確固たる精神的のものとなりてウォルヅナオス、コールリッジ、シエリ及びキーツよりスコット、バイロン以下ソーシー、カムベ

ル、レーハント、モーア等に傳はりたり。蓋し當時の詩壇は自然主義を以て一貫したりきといふも可なり。而して其の派の詩人が社會に及ぼし、勢力の多少は必しも件の精神を享受せりし度には關せず。スコット、バイロンの如きは詩人としてはウォルヅナルス、コールリッジ、シエリ、キーツの下にあり其の自然主義はた四子のに及ばざれども其の社會上に得たる名聲に至りては遙かに彼等が上にありしなり。レーハントも詩人たるの天才技倆は更に一段の下にありしも其の一時の感化力はウォルヅナオス、バイロンに越ゆるものありき。

さてこゝに注意すべきことあり何れの代にても名匠巨手の輩出したるあとには曠壇の景氣一時沈落するに至るか、さなくば小手腕の作家が模倣の作のみはびこるが常なるに當期に於ては毫もさることなかりしこと是れなり。テニソン、ブラウニング、アーノルド、ロセッチ、モリス、スフィンバインの如き俊才がウォルヅナオス以下前代名家の後嗣として一層の光彩を門戸に生じたりしは更にいはずフツード、フレド、フレード、マコーレー、テローア、ダルリー、ベッドリス小コールリッジ、ホオン等の如き第二流少詩人すら各々獨得の伎を有して他の模倣を事とせず兎に角に一家

の詩體を持して此の間に参はりしは奇觀とすべし。彼れ等群詩人のウォルツオスに對するはユリザ晩朝の詩人等のジョンソン、フレッチャーに對し若しくはスペンサーに對するが知くならざりしのみならず、むしろ新面を開き來つて英國の詩歌を富贍ならしめき。ベドリスの天上界を歌へる、ブレイドの慎重なる社會歌、フッドの痛切なる哀情歌、ホオン、テローア等の森嚴なる道德歌等一つ／＼に取りいで、こそ見どころも少けれ引きくるめて評すれば容易に得難き吟詠集とたゞへつべし。さて次ぎにあらはれしテニンソンとフラウニクとは共に詩歌の英才といはんよりは寧ろ神才といふべきものにして全く同時にいで同行路を取り作詩に従事すること共に六十年、且つ修養の爲めに久しく作を絶ちしこと其の修養の大効ありしこと、爾來致々として作詩に従事し、終生之れを怠らざりしこと等に於て兩者全く同じかりしのみならず其の作詩の質に於ても一人の差はチーサー、スペンサー、ウォルツオス、シエリ等の個々の間に存する差異の如き著大なるものにあらず。二人共に自意識して現在を歌ひ又未來を歌へり。其の差違は纔かに此の未來を謳歌せし分量と作詩の伎倆とにあるのみ。かくも同様なる天才の同時代にいで

同一方面にあらはれて半世紀以上の文壇を飾りたりしは稀有の盛觀といふべきなり。

テニンソンとフラウニクとが作を誦するに方りて毎に回起せらるゝはキーツが功蹟なり。彼れが作詩の量は多からず又社會に對して勢力ありしものにあらず。然れども彼れは明かに第三期の首に坐せりしもの、彼の十九世紀詩歌の特質の一たる歴史、美術、文學を歌ふことは主としてキーツによりて端を發かれしが如し。人或はキーツを以てテニンソンの祖なりとなす、かゝる意味より言はゞ或はフラウニクの祖なりともいひつべし。

テニンソン、フラウニクの二文木が技を交へ葉を重ねて一世紀間の文壇を蔽ひし時幾多の名草芳樹其の下蔭に生長しき。詩才に兼ねるに批評眼を以てし春秋の眺めもわかぬはマツシュー、アーノルドが楓の一もと、異邦の手ぶりゆかしき梅柳の兄妹はロセッチの一家清影月を迎へ瑛珩風に鳴るはモリス、スパンパーンか修葺の一叢、クラフ、ロッカー、リットンの諸英この間を點綴して紅紫繽紛正に是れ不老の長春園、仙鶴松韻に和し鶯語雨聲を綴ふの概。

テニソン、ブラウニングを以て十九世紀の詩歌は其の頂點に達しこれより暫時また衰期に向はんとする徴あるは第一期第二期に皆無なりし模倣といふ事の此の時に起れるを見ても知るべし。もとより大詩人の作は或は想に於て或は形に於て後代に影響すること夥しく現にウオルヰテオスの如きは殆ど一百年間多數人散文家をも含むの間に大なる勢力を有し、シェリの如きも久しく盛んに模倣せられたりしことあれど概して第一期第二期の作者は或一二家を標的とせず寧ろこれを階段として一層の高處に登らんと試みし概あり。然るにテニソン、ブラウニング出づるに及びては十九世紀詩人の爲し得べき頂點ほゞこゝに定まり只管に二人を師表とせんとするもの續出しき。想に於て二人の如くならんと勉むる或は可なるべし、晦澁險怪なるブラウニングが詩形を學びてそも何ごとをか爲さんとすらん。

この模倣の卑しきを知り獨立して自家の感想を歌ふべしといふ主意を立て、健氣にも現はれし一派ありしが惜しや此の派のうち一人の深大なる詩想を有するものなかりしかば其の作爲せし所は本來の目的にたがひたゞ新事項を歌ふを事

とし新聞紙の雜報を韻辭とせるが如き淺膚露骨の詩を出だすに止りき。そは十九世紀の中葉に暫く榮へし所謂「暫且感動派」これなり。按ふに英國十九世紀後半の韻語史に於て最も注意すべき一事はこの模倣と創作との關係なり。現にマッシュ、アーノルドの如きは晩年に於てこそウオルヰテオスを排斥したれ一たびは熱心なるウオルヰテオス崇拜者たりき。ウオルヰテオスが詩風は彼れが一生の詩歌に浸潤せしのみならず彼れは、尙ゲーテ、テニソン等の詩風をも取り入れにき。或る評家はアーノルドにして若し先輩に影響せらるゝとすくなく獨立して作せしならば其の成功一層なりしならんといへり。アーノルドの果して然るべかりしか否かは容易に斷じ難けれどもロゴド、リットンに至りては明かにこの前人模倣の弊に陥りしものなり。當時書に近づくは詩をして拙ならしむる所以といふ擧行はれきといふ。但しアーノルドが當期に於ける第一流の詩人たりしとは争ふべからず。セーリツベリ氏がいへる如く、人は前代の詩歌を記憶するによりて始めて詩作し得べしといふべからず又記憶せざるによりて名詩を得べしといふべからず、而も前人の作を讀み無意識に其の影響を受け或は意識的に之れを排撃するは

止むを得ざる所詮大詩人は如何なる位地にありても兎に角に自家の一風を持つるを得べきものにして如何ばかり前人に私淑することあるも其の中に自家を没了するが如きは萬これなかるべきなり。

第四期に於て最も注意すべきは先ラファエル派の事なり。此の派の生起せし發端は美術界にあり。繪畫彫刻界に於ては今尙其の勢力盛んなり。而して詩歌界に於ける其代表者はロセッチ兄妹モリス、スフィンパーンの四家とす。十九世紀後半に於てこの派の勃興せし伏線を尋ねれば近くはテニソン、遠くはスコット、更に遠くはパーシーのローマニス主義にありといふべし。この點につきてセーリントン氏は曰はく

一般の歴史に應用して最も趣味あるは嘗てアリストートルのものせし問答の隱語なり。同に曰はく「汝等若し水を喫して噎息すさせば更に何をか飲まんとするを對へて曰はく「酒を飲まん」或は曰はく「更らに多量の水を飲まん」也。然りこの二條の答へは共に當れりといふべし歴史の現象につきてこれを見るに事件の連續轉換殆ど此の二途の外に出でざるが如し。更に先ラファエル派の興起に見んか中古の風に復らんとするローマン派の運動は文學上美術上等に於てバルシよりテニソンに至るまで既に踵を接して起

りぬ。バルシはバルシの主義を以て主張しスコットはスコットの主義を以て起りテニソンまたテニソンの主義を以て試みき。かくの如き復古の運動は相併び相重りて十九世紀中葉の英國詩歌の咽喉に充塞しぬ。この時に方り取るべきの方法は斷然これを排して別種の文學を起すべきか然らざれば一層盛んにこの主義を推進せんかの二方法ありしのみ。十九世紀中葉の詩人は其の後者を選びしなり。更らに多量の水を取りて彼の充塞物を嚙下したりしなり。一言すれば先ラファエル派は積年停滯せるローマン派の主義を決下して爽然たる神氣を詩歌界に與へしものなり云々

げに此の派の復古は復古と稱して當然なるのみならず或は古へに復りたる上は更に一步を高めたりしものとも稱すべし。彼の單に趣向のみを古風にし言語のみを舊稱にするか如き復古は文學上より見て何の進歩ともいふ可からざる也。「先ラファエル派の諸家はちのく別に見る所を立てたり。ロセッチの多感にして感情燃ゆるが如きロセッチ嬢の宗教的にしてやさしくみやびたるは更にいはずスフィンパーンの好辭流るゝか如くにして韻調鏘然たる、モリスの物語歌の美妙にして温雅なる何れも近代の佳什にして上代にも稀れに見る所の珍品たり。要するに此の派の詩人は中古の詩歌の骨髓を取りて之れに加ふるに十九世紀風の精神を以てしたるものといふを得べし。中古の作多くは荒唐奇怪、言華燦爛趣向意表

に出で九霄の天を穿ち九地の底に達する太晶宮の大迷路に入るがごときものありと雖も十九世紀の眼を以て見れば其の間に存する生氣は茫莫捉へがたく朦朧見るべからず爲めに彼の輪奐たる大厦も實物と見んよりは寧ろ鏡裡の影なるが如き觀あり。此の不可思議の大魔宮を十九世紀の英國に移し來り十九世紀精神を以て其の本尊となし更に新様の裝飾を添へて以て文壇の一奇觀を築き做したる「先ラフェル派」の偉業蓋し特筆するに足りぬべし。

第十九世紀は實に詩歌の全盛期なり英國詩歌の全盛期なり。其の量より見るも其の質より見るも其の主題の範圍より見るも古今に通し内外に亘りてかばかりの盛況に達したりしはあらず。試に“*Ancient Mariner*”より“*Crossing the Bar*”に至る九十年間の作物を見よ。其の價値の度の上より見るも世界中何れの國の詩歌が多くこれに凌駕すべき。其の詩風の上より見るもシェリ、ウオルヰテオスの如きは他國に其の比を見る易からざるに非ずや。加ふるに往昔行はれたりし長篇の物語歌に妙趣あるを認めて之れを再興せんと圖る者ありき。要するに詩歌は及ばん限りあらゆる方面に於て其の發暢を試みられたり其の成功せざりしは僅かに彼

の劇詩を有韻にすること、深刻なる諷刺詩を試る事との二ありしのみ。後年に至りては彼の深刻に過ぎて美感の範圍を逸せらる程の輕快なる諷刺は頗る成功の跡ありき。其の他所謂應用詩歌の類皆な興らざるなし。所謂十九世紀の英國抒情詩は其の圓滿なるとに於て殆ど希臘の昔に接近するものといふべく其の範圍の廣きことに於て世界の詩風を籠蓋せるものといふべきなり。詩中の詩たる抒情詩に於てこの域に達したる英國の功蹟贊美すべし。

十八世紀英國詩歌の此の域に達するにつきて四の短期を通過したりしとは以上いへるが如し但しこはたゞ大體の別にしてもとより各詩人につきて其詩想發達の期試験の期修養の期成功の期等を精査せば千様萬態際限なかるべく且つ眞詩人が這般の變移のあとに到底他人の心を以て察知すべきものにあらざれば今はたゞこれにて止むべし。

さて小説のことを言はんはんに十九世紀の小説は其の興隆の初めに於て大體の標準なかりしが爲め五里霧中にありしことは前にもいへるが如し。十八世紀末二十年間及び十九世紀の初十五年間の中にて見るべきものは僅かにエッチテオス女史

の作二三篇若しくは異種の作 "Vehlek" 等に過ぎず。スコットが韻語より散文に轉ずるに及びて近代小説はこゝにロマンス派の一風を加へ今に至りて絶えず。其の作 "Waverley" の如何に成功せしか、其成功の如何に急速に歴史小説を誘起せしか、歴史小説の如何に時風小説を誘起せしか、これと共に起りしシオドア・ア・ブックが滑稽小説は如何、この兩者の間に立ちしリットンは何より十九世紀の中葉に至りて歴史小説の火氣一たび熄み更にキングスレーのロマンスを以て如何に万丈の光燭を舉げしか、これと共にサッカレー、プロンテ女史、ゾールツ、エリオット、アントニー、トロープ、ヂッケンス等の起りし摸様は如何更に現今に於て諸種の小説の如何に一層の小區分をなすに至りしか等は略、これを説きおきたれば今これを重説せざるべし。只注意すべきは詩歌の全盛と小説の全盛との關係なり。詩歌と小説とは共に十九世紀英文學の大現象にして共に近世大革命の影響によりて現はれしには相違なけれど詩歌と小説とは元來其の勃興の動機を異にせる由を知らざるべからず。古今東西を問はず人の或境に臨みて詩情を催すは天性なれど人必ずしも他の詩歌を玩讀するを好むものにはあらず。かるが故に古今

東西詩歌は頗る多けれども其の後世に傳はるはいと少し。其の同時代に傳播する範圍また知るべきのみ。幸ひにして多數の讀者を得る作者だにもこれのみによりて生計を立つるは難し。然るに古今東西斬新にして趣味ある話を好むは人の天性なりこれを語るもの又これを聞くもの、多き言を俟たず而かもこれを組織し又は之れを文に草して一部の小説となす技倆あるものに至りて割合に少數なり。此等の事情によりて詩歌と小説とを比較せんは前者は需要少くして供給多く後者は供給少くして需要多し。かるが故にホーマーは食を市に請ひリットンは一作數十万金を得たりき。

以上は通じて見たる詩歌小説と讀者との關係なるが今これを英國の十九世紀に見んか文明の進歩は日に月に著く教育は急に普及し國民の大かたは文字を解するに至り世間一般に生活の餘裕生じたりしかばこゝに娛樂を求むる心起り人々小説類を歡迎しき。かるが故に少しく文才機知あるものにして筆を小説に染むれば其の作としての價値は兎も角もあれ裕かに一生を支ふるを得たりき。こゝに於てや僅々五六十年間に由りて其の數に於て過去全體の幾十倍するに至

りぬ。此の間に出版せられたりし小説は必ずしも悉く拙劣なる急作にはあらず其の質に於て概して十七八世紀の幼稚なるものより進歩せるは更にいはずこの五六十年間にすら次第に進歩せしは事實なり。要するに小説の作は今より大凡卅五年乃至四十年前の頃を以て極盛の期となす。ヂッケンス、サッカレ、ジョール、マエリ、オット、プロンテ、トロ、ー、ブ、キングスレー、バルワー、ヂスレリ等の名家は皆千八百五十年代に最も多く傑作を著ししものにて彼の小説を以て文學の生命となせる佛國すら當時は及ぶ能はざりき。これより二十年が程のうちにはサッカレ、ヂッケンス相次ぎて歿しトロロープもエリオットもまた大作をものせざるに至りキングスレー、バルワー將た漸く老衰するに至りしかば作の質稍下落せし觀あり。但し第二流の作の量に至りては寧ろ前代に倍せんとし世間の歡迎は愈加はり遂には單に書物としいへば小説のたと解する者も生じ若くは文學と小説とを同一視する者夥しくなりぬ。而して一世紀の前に於て率先して小説界の榮華を開き此の全盛の種子を蒔きしは主としてスコットの方なりといふも過言にあらず。かく詩歌と小説とが等しく全盛を極めたりし動機は如何。前者は全く自動的に

革命の潮氣に感じて續發せしにて後者は重に他動的に社會の要求に應じて起りしなり。

次に注意すべきは定期出版物の進歩なり。彼の新聞雜誌的小冊子の政治界などに頗る勢力ありしは遙かに前の時代にして當時は其の數もいと少かりしがアジソン、スウィフト、さてはデフォーなどの頃は斯業大に衰へ一般に價値なきものと見做され掲載の記事なども幾かに“*Rodinson Crusso*” “*Sir Lancelot Graaves*”等の持て囃されしのみにて評論文の如きは一向に世の冷遇を受くる様なりしが十八世紀の末に至り一筆水を隔て、佛蘭西革命の大活劇の演ぜらるゝや英國民は争ひて其の事相を知らんと欲し新聞紙の勢力はこゝに一轉するとなりき(これにはまた讀書社會の擴張などいふ内部の因縁の添ひしはいふを俟たず)。かくて讀者の歡迎につれて發行者もまた成るべく記事に趣味を加へて讀者を誘ひつゝ起る他の出版物と競争するに至りこゝに定期刊行物の亂發を來しき。時にヂャコビン黨新聞雜誌を機關として政界の活動をはじめたり。是に於て反對黨も亦同じく新聞誌に據りて議論を闘はるととなりいよく世間の注意を惹きぬ。後程な

く便利なる新聞紙條例定まり印刷術の進歩と共に價額も減じ其の隆盛加はりたり。さる程に定期出版物は文學の全類を集め詩歌小説の創作より歴史哲學宗教科學の評論に至るまで大概の著作は其の單行する前に一たびは新聞雜誌に掲載せられずといふことなく毎日毎週毎月毎季等の出版物を通覽すれば文學の全豹は窺ひ得て遺漏なきに至りき。

定期出版物と文學との關係はこれに止まらず其の盛んなる頃は大抵の文士は皆これに關係を有するに至り小作家小評論家もなほこれによりて生活し彼のグラブストリートの文學、ごろつきの如きは全く其の跡を絶つに至りぬ。或る意味よりいへば定期出版物の力が文學者の地位を高めしなり。さてこれら定期出版物に掲載せし文章詩歌には大かた匿名を用ふるを例としたりき。特に十九世紀の初めには何れの新聞雜誌にても徹頭徹尾匿名を用ひたりしかは所謂文章通にこそ其の論旨筆致等によりて大凡の見當もつきたれど普通の讀者は曉る能はず人を離れて文のみを讀みにき。後には此れが一種の愛嬌と見做されて知名の文人等もわざと^エ帳衣を用ひ遂には大雜誌の主筆さへ異様なる別號にて社説をものせ

しことありき。かくていつしが此の風止みて本名を署することとなりしが其の何時の頃よりかは明知し難し。Household Words にデングスの人物評論を公然署名したるなど其の早きものなるべくひき續きては週刊のAcademy 月刊のPunchなど、の佛蘭西風を用ひて匿名を廢せしなど最も著き例なり。但し批評文の如きは今日に至るまでも以前を異ならず。批評文に匿名を用ふるときは尙どなく記事に責任輕くやうせざは刺傷嘲諷の道具となりさらでも作或は作者の眞價を穩當に論定するよりは寧ろ自家が着眼の奇警を衒はんとするが如き傾向となるは必然なれどさりどて全く本名を署するとして其の寄書もかれがれとなるべく讀者の快味も減少すべし。要するに定期出版物の狀況はすべて今の我が邦の新聞雜誌に徴じて大かたは察知せらるべし。さて交或る意味に於て科學に屬すれどもまた文學に密接の關係あるいは純文學と科學との中間にある歴史につきては十九世紀中には目覺ましき事もなし。されば其の研究の勞力及び其の未來の史家に資供せし便宜などにつきて考ふれば其の功必じも多くの文學に讓るべくあらす。ケンブリッヂ大學の教授アク

く便利なる新聞紙條例定まり印刷術の進歩と共に價額も減じ其の隆盛加はりたり。さる程に定期出版物は文學の全類を集め詩歌小説の創作より歴史哲學宗教科學の評論に至るまで大概の著作は其の單行する前に一たびは新聞雜誌に掲載せられずといふことなく毎日毎週毎月毎季等の出版物を通覽すれば文學の全豹は窺ひ得て遺漏なきに至りき。

定期出版物と文學との關係はこれに止まらず其の盛んなる頃は大抵の文士は皆これに關係を有するに至り小作家小評論家もなほこれによりて生活し彼のグラブストリートの文學、ごろつきの如きは全く其の跡を絶つに至りぬ。或る意味よりいへば定期出版物の力が文學者の地位を高めしなり。さてこれら定期出版物に掲載せし文章詩歌には大かた匿名を用ふるを例としたりき。特に十九世紀の初めには何れの新聞雜誌にても徹頭徹尾匿名を用ひたりしかは所謂文章通にこそ其の論旨筆致等によりて大凡の見當もつきたれど普通の讀者は曉る能はず人を離れて文のみを讀みにき。後には此れが一種の愛嬌と見做されて知名の文人等もわざと帔衣を用ひ遂には大雜誌の主筆さへ異様なる別號にて社説をものせ

じことありき。かくていつしか此の風止みて本名を署することゝなりしが其の何時の頃よりかは明知し難し。"Household Words" にデッケンスの人物評論を公然署名したるなど其の早きものなるべくひき續きては週刊の "Academy" 月刊の "Forthrightly" などの佛蘭西風を用ひて匿名を廢せしなど最も著き例なり。但し批評文の如きは今日に至るまでも以前と異ならず。批評文に匿名を用ふるときは何となく記事に責任軽くやうせすは刺傷嘲諷の道具となりさらでも作或は作者の眞價を穩當に論定するよりは寧ろ自家が着眼の奇警を衒はんとするが如き傾向となるは必然なれどさりとて全く本名を署するとして其の寄書もかれがれとなるべく讀者の快味も減少すべし。要するに定期出版物の狀況はすべて今の我が邦の新聞雜誌に徴して大かたは察知せらるべし。

さて又或る意味に於て科學に屬すれどもまた文學に密接の關係あるいは純文學と科學との中間にある歴史につきては十九世紀中には目覺ましき事もなし。されば其の研究の勞力及び其の未來の史家に資供せし便宜などにつきて考ふれば其の功必しも多く他の文學に讓るべくもあらず。カムブリヂ大學の教授アク

トシ嘗て學生に隔りていはく歴史は今や歴史家と離れて獨立すと。この語はよく十九世紀歴史事業の得失兩方面を蔽へる者といふべし。これを希臘羅馬の古に徴するに有名なるシウシヂニス、ヘロドタスなどの歴史は單に直接に聞規せる事柄又は自家が感懐せし傳説等によりて綴れるものにして今の史歴の眼を以て見れば到底不具なるを免んず。而して爾後數百年の後に至るまでも歴史は各國共に同様の有様なりき。是の如くにして成れりし歴史は史家か知識と感情との範圍内に於ける歴史即ち主觀の歴史にして真正の客觀的歴史にはあらず。十七世紀の末より十八世紀の初めにかけて英のキッソンは卓越の識見を以て史の研究に佛蘭西派の風を用ひ周到綿密に事實の採拾に従ひしか當時編逸にても此の種の研究行はれ大勢茲に定まり遂に十九世紀に至りては其の極端まで推進するに至り。マコーレー、カトリヤル、著の如何に經營慘酷たるものなりしかを見れば明かならん。往時は荒唐無稽の臆語として棄てられし傳説記録の類も今や史料の最上級を占め出所不明の逸話すらも拾摭して博を銜ふものさへいひき。傳説記録の類はもとこれ杜撰なるか多し相互の矛盾もあり意外の過越もあ

り之れを統へ之れが隱微を解釋し之れを有機體として生命を賦與するは一に史家の手腕を要す。然らざれば死語死語の徒が千百の機械的考證竟に何の爲す所があるべき。主觀に偏して詩歌的なりし往昔の歴史は今や客觀に偏して無機無生のものとならんとせしむ。昔これ歴史攻究法の不備より來れるもの也。歴史が歴史家を離れて獨立するはよし而も歴史家は到底活人情活世相と離るべからざるなり。彼のマコーレー、カトリヤル、ブルード等の史は幸にして如是死物とならざりしも尙餘りに同事物の考證に密なりしか爲めに十二年間の記事に四卷を費し五六十年間の歴史に十三卷を費したるが如き未だ時弊を免れずといふべし。要するに十九世紀中の史的事業は過去の獨斷の風を矯めんか爲めにあまりに機械的に流れたりし憾おれども夥多の史家が銳意に研究し出たし、史料は今や積んで山の如く以て後の眞史家の出づるを待てるが如くなれば歴史の地盤はやゝとくに固きを得たりといふべきなり。

十九世紀に於て最も振はざりしものは劇文學なり。もとより其の量より見れば敢て前世紀に譲らざれど臺張となりて舞臺に演ぜられしものに至りてはいと稀

なり。劇の形式上の工夫、古大作の研究などは大に歩を進めたりしも新作に至りては大抵は凡上劇學者、劇文學、劇たるに止まりき。其のうちリットンLyttonの作二三篇は屢々テニソンの全盛時代の作は稀に演ぜられしことなきにもあらねど大なる興味を看客に與へたりといふべからず。かくて追々文學と劇場との間に一大溝渠を見るに至りしかば學者はさまざまに其の原因を求めて調停の運動もありしかどさせる効果もなく今日に至りぬ。案ふにこは作劇そのもの、困難なるによれるものにしてシェリマンSherrinman以後英國に眞の劇詩家の出でざりしは主として之れに因るなるべし。

さて應用文學のいま一つなる神學につきて見るに其の振はざりしこと遙かに歴史の下にあり。概言すれば神學上の著述は十七八世紀より追々不振に赴きたりき。十九世紀の初めにはやゝ見るべきものもあしが中頃より今日に下るに及びて其の不振いよゝ甚しくなりぬ。單に出版物につきて見れば其の分量他種のものに譲らずと雖もこれを文學的方面より見れば其の價值いよゝ少く彼の讚美歌なども現今のに至りては情高きにあらず趣清きにあらず辭妙なるにあらず

否無味にして乾燥なるを常とせり。此の間たゞ僅かに歴史熱の餘炎によりて著されたる高僧の傳記、宗派分裂の由來若しくは教義の變遷等を録せるものの讀むべきあるのみ。有名なるアーギンクArginc、チャルマース等の如きも寧ろ人物として秀でたりしのみ著述の上より見て大なりしはたゞニューマンNewman一人のみ。

さて又文學とは最も縁遠き科學の壇上に當時二三の文章家を出だしたりしは頗る奇なり。科學本來の性質より言へば其の説明に美文を要することはなかるべき筈なれど科學者の或者につきて見れば天性文學の嗜好に富みたる者あり若しくは其の文學の自らにして修辭の法にかなへるもあり。第十九世紀の科學者中にはハクスレーHuxleyを首としてかゝる文章家鮮からず。

終りに科學よりは文學に縁近き美學家、博言家等につきて一瞥するに其の聰明なる一二を除くの外は概ね蛙鳴蟬噪の徒にして未だ文園を飾るに足らざりき。似而非美學家が二三の書物によりて得たる覺束なき智識を基礎として一足飛びに批評壇に上り自家が賞鑑力、判別力の不具なるをも知らず、杓子、定規の批評を試るの片腹いたきは更にいはず、純文學の修養もなき博言家が手當り次第に外國文

學をとりて紹介若しくは批評して俗耳を驚すなど何れの國にもありがちなが、特に英國近代の騷壇に此の輩の跳梁の盛んなりしを見る。蓋し文學全盛の春風にふきあげられにし大路の塵埃ならんのみ。

近代文學の概況はほゞ以上に盡きたりと信す。こゝに一言を加へたきは第二十二世紀に於ける英文學は如何なるべきかの問題にしてこゝは讀者諸君を益すること頗る多かるべきものなれど今は輕々しく断定する能はざる所且つやこゝに少許の餘白中に試みん程の事は蓋し現今の狀勢より推究してほゞ察知し得らるべきたぐひなれば今はたゞ現今評論壇の名家トーマス、セプトンツベリ等二三氏か所説の概要を紹介せん。

つら／＼現今の英文壇を見渡すに此の世紀の初めつかたに生れ出でし名家は大抵筆を易へ中ころに出でし人々のみが現騷壇の牛耳をとれる次第なるが暫く眼を轉じて過去の一百年を一瞥すれば多少の感なき能はざるものあり。見よ詩壇に小説壇に批評壇に其の他あらゆる文學準文學の壇に、何ぞ名家の秋天の星の如く多かりし。正に是芳芬張天の春スコットやバイロンやシニエリヤやキーツやウ

ルゲチオカヤテニソヤアラウニソクヤカ、ライルヤマコトレイヤヂクンスヤカ、カレヤニオットヤキングスレーヤ枚舉に遑あらず。これを今の文壇に見んか彼の今尙生存せる二三の老作家を除くの外は滿目悉く黃茅白草然らざれば春蕭の甍を摸して至らざる狂花のかへり咲きに過ぎ。是に於て人或は曰はく現今の文壇は沈息せりと又自はくこれ更らに一轉するの兆と。沈息にあるか轉機にあるかは疑問ならめど兎に角に文壇の振はざるは事實なり。六百年間(文學隆盛期として未曾有の長日月)榮えにし文壇は更らに百尺竿頭一步を進むるを得べきか否か。十八世紀末より十九世紀の初めへかけて起りしが如き世界的大革命の再ひ起ることなくして沈着なる英國人が大に奮發することあるべきか否か。彼の如き動機なく彼の如き素養なく彼の如き感奮激怒恐怖希望等なくして更らにかの如き革新運動を試ることを得へしや否や。これ現未の間領なり。

按ふに若しこの十九世紀をば前の文學隆盛期たどへはエリサベス朝若しくはアトン朝などと比較し或はこれを外國近代の文學と比較照し來らば興味は頗る多かるべけれど今はさる餘裕もなければただ各方面にわたりて過去全體の文學と

あらしの比照を試むべし。

(第一) 詩歌につきて見んにバートン、スプレーキ、クーパー、ルザオス、ユー
ルリ、チン、シー、パイロン、シエリー、キーツを経てテニソン、ブラウニング、アーノル
ド、ロセッチ、並びにモリス、スピンバインに至るまでの作は質に於ても量に於てもは
た其の範圍に於ても決して過去の何れの代のにも譲らず。(第二) 小説に至りては
過去全躰の作を集め來るも今の百分が一にも當らず。即ち純文學の重なるもの
は總て過去の全躰の文學に勝れり。但し(第三) 文學の最も大切なるものゝ一は
る劇詩は不幸にして過去の匹敵にあらず。(第四) 歴史の進歩したるは明かなり。
(第五) 神學、宗教に關するものは過去に比して概して熱情と崇嚴の度を失へり。
(第六) 定期出版の雜種の散文に至りてはさまざまの方面に發達し變化多様ま
た前代に比なし、即ち彼のモンテーン、ペーコンの代、ドライテン、カウリー、テンブル
の代若しくはアチンソン、スチールの代、ジョンソン、ゴールドスミス、の代すらも到底
チャールズ、ラム、ウイリアム、ハズリット、レイトン、トマス、デクンシーの代に及ぶ能は
ず、マコーレー、チャタレイ、カーライルの代に及ぶ能はず、況んやアーノルド、ラスキン

の代に及ばんや。要するに散文の進歩はいと速かなりき。彼の雜誌上の評論に
於て華麗巧緻なる一躰を掬めし者はデクンシーなりしがこれより人々思ひ
にさまざまの躰を工夫し出だし、となるがこゝにはまたさまざまの因縁あると
にて或はこれを定期刊行物の隆盛に因すとし、或は韻語(想形とも)の發達に影響せ
られしものとす。なほこの外に思想の進歩と、もに文章の緻密なるを要する
自然の傾向なども與つて力ありしものなるべし。さてかくの如く神速に發達し
來れる今日の文躰は早晩また更に一變すべきか、否かこれ趣味ある問題なり。今
セーリッペリ氏の解答をかゝけて参考に供せん。曰はく

壓制政治の眞に止むば國內の最下級入が、かかる政治を怖るゝに至りし後なるべし。時
尙の(こゝに文學的時尙の)眞に變するまた國內の最下級までもこの時尙にあき足りたる
後にあるべし。今や英國の社會文學の傳播日に進み教育の進歩と共に讀者の数はいよ
々増加の途にあり、現今の散文の一般國民間に於ける勢力は非常なり、この時に於て僅
僅二三子の運動を以て文躰の變化を企てんこゝは實に容易のこゝにあらす。云々

げにや英國の現社會が文學を歓迎するの度は非常なり。或は非難して曰はく「英
國今日の社會はあまりに文學的なり」と。あまりに文學的なりとは文學熱あまり

に高きをいへるなり。蓋し文學的といふ美稱を有する現今の讀者の多數は敢て
識高きやからにあらざり眞誠の文學を愛するものにあらざり。加ふるに作者の大か
たはた理想高きにあらざり伎倆勝れたるにあらざり。讀者は頻りに小説を渴望しひ
たすら其の量の多からんを望み作者はこれに應じて多作し殆ど其の質を顧みず。
最近二三十年間に小作家の新たに起りたるもの實に千を以て數ふべし而もなほ
社會の要求を滿すに足らず。彼れ等は少許の素養と拙劣の技倆とを以て文壇に
あらはれなほ裕かに其の地位を保てり。彼等は一方に於て名譽賞讃を得一方に
於て報酬と禮遇とを受く。既に花を手にし又實をも得一二批評家の喝棒は食ふ
を意とせざる所。誰れか評家の言を恐れ寛大なる社會の好意に背き危險なる理
想の作を試んとせんや。大勢是の如くなるが故に其の作は追々俗尙を標準とす
るに至り遂には批評の文字すらいつしか同様の程度に引き下げられんとせり。
嗚呼作家評家購讀者が彼のラスキン、チェフレ、の眼を以て自然を見ラスキン、ベ
ーターの眼を以て美術を見、アーノルド、サンヒューヴの眼を以て人生を見るに至る
はそも何れの時にかあるべき。

狀勢かくの如き英國の俗文學が早晚著き變化を生ぜんは豫期すべきが如し。而
も二十世紀の文壇に於てよく十九世紀にありしが如きめざましき大運動の起る
べきか否かは世界的大革命の二十世紀中に起るべきか否かといふ問題と聯關す。
こは容易に定むべきことにあらざり。況んや二十一世紀二十二世紀の英文壇をや。
而も時は悠々たり世波は漫々たり。

英文學史 完



